# 京都府遺跡調査概報

## 第 13 冊


1. 宮津城跡第4次
2. 土師川改修関係遺跡
3. 味方遺跡
4. 田辺城跡第6次
5. 宮福線関係遺跡
   (1) 石本遺跡
   (2) 波江古墳群
6. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡
   (1) 奥谷西遺跡
   (2) 薬王寺古墳群
   (3) 薬王寺古墓
   (4) 多保市城跡



1985

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し，間もなく4年が過ぎようとしています。その設立の目的は，京都府内の埋蔵文化財の調査，保存，活用及び研究を行い，その保護を図るとともに，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努め，地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は，京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり，昭和59年度は，39件の調査を実施しました。これらの発掘調査は，いずれも道路建設，学校建設，宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり，調査によって発見された遺跡の多くは調査終了後破壊され，消滅する運命にあります。しかし，発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅していいはずがありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され，現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は，遺跡の重要性を理解していただくために，またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し，その活用を図るために刊行するものであります。昭和59年度は，第13冊，第14冊，第15冊，第16冊の4冊にまとめることにしましたが，この第13冊には宮福線関係遺跡ほか5件を収録しました。調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では，開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会，各市町村教育委員会をはじめ関係機関の協力を受け，さらに炎暑の下，極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって，これら多くの関係者に厚く御礼申しあげます。

昭和60年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

# 凡　　例

1.　本冊に収めた概要は，

　1.　宮津城跡第４次　　2.　土師川改修関係遺跡　　3.　味方遺跡

　4.　田辺城跡第６次　　5.　宮福線関係遺跡　　6.　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

を対象としたものである。

2.　各遺跡の所在地・調査期間・経費及び概要の執筆は下表のとおりである。

| 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 経費負担者 | 執筆者 |
|---|---|---|---|---|
| 1.　宮津城跡第４次 | 宮津市字柳縄手 | 昭60. 2. 6 ～ 昭61. 3. 30 | 京都府土木建築部 | 竹原　一彦 |
| 2.　土師川改修関係遺跡 | 福知山市字長田小字前ケ嶋ほか | 昭59. 11. 8 ～ 昭60. 3. 8 | 京都府土木建築部 | 三好　博喜 |
| 3.　味方遺跡 | 綾部市味方町中ノ坪 | 昭59. 12. 13 ～ 昭60. 3. 30 | 京都府土木建築部 | 辻本　和美 |
| 4.　田辺城跡６次 | 舞鶴市大字南田辺 | 昭59. 10. 11 ～ 昭59. 11. 7 | 京都府教育委員会 | 辻本　和美<br>山下　正 |
| 5.　宮福線関係遺跡 | | | 日本鉄道建設公団 | 辻本　和美<br>竹原　一彦 |
| (1)　石本遺跡 | 福知山市牧ほか | 昭58. 3. 10 ～ 昭59. 9. 30 | | |
| (2)　波江古墳群 | 福知山市波江 | 昭59. 10. 29 ～ 昭60. 3. 18 | | |
| 6.　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 | | | 日本道路公団大阪建設局 | 伊野　近富<br>藤原　敏晃<br>山下　正 |
| (1)　奥谷西遺跡 | 福知山市大字大内小字奥谷 | 昭58. 12. 2 ～ 昭60. 3. 15 | | |
| (2)　薬王寺古墳群 | 福知山市大字多保市小字打越 | 昭59. 3. 6 ～ 昭60. 3. 30 | | |
| (3)　薬王寺古墓 | 福知山市大字多保市 | 昭59. 10. 22 ～ 昭59. 10. 29 | | |
| (4)　多保市城跡 | 福知山市多保市打越 | 昭59. 5. 7 ～ 昭60. 3. 30 | | |

3.　本冊の編集には，調査課企画資料担当が当った。

# 目　　次

1.　宮津城跡第４次発掘調査概要…… 1

2.　土師川改修関係遺跡発掘調査概要…… 7

3.　味方遺跡発掘調査概要……17

4.　田辺城跡第６次発掘調査概要……27

5.　宮福線関係遺跡昭和59年度発掘調査概要……33

　(1)　石本遺跡……35

　(2)　波江遺跡……43

6.　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和59年度発掘調査概要……59

　(1)　奥谷西遺跡……63

　(2)　薬王寺古墳群……80

　(3)　薬王寺古墓……97

　(4)　多保市城跡……98

# 挿図・付表目次

**宮津城跡第４次**

第 1 図　調査地位置図…… 2
第 2 図　宮津城跡周辺地形図…… 3
第 3 図　調査地平面図および石垣立面図…… 4

**土師川改修関係遺跡**

第 4 図　調査地周辺遺跡地図…… 8
第 5 図　調査地位置図……10
第 6 図　トレンチ位置図……11
第 7 図　土層柱状図……12
第 8 図　第15トレンチ検出遺構および土層図……14

**味方遺跡**

第 9 図　周辺遺跡分布図……18
第 10 図　調査地位置図……20
第 11 図　７・８トレンチ拡張区遺構配置図……21
第 12 図　出土遺物……23

**田辺城跡第６次**

第 13 図　調査地位置図……27
第 14 図　田辺城復元図……29
第 15 図　トレンチ配置図……30
第 16 図　調査地平面図……31

**宮福線関係遺跡**

第 17 図　周辺遺跡分布図……34

**(1) 石本遺跡**

第 18 図　調査地位置図……36
第 19 図　Ａ地区遺構配置図……37
第 20 図　Ｃ地区遺構配置図……39

第 21 図　A地区遺構変遷図……40

(2) 波江古墳群

第 22 図　地形測量図（調査前）……45
第 23 図　地形測量図（調査後）……47
第 24 図　波江 3 号墳・5 号墳埋葬主体部実測図……49
第 25 図　波江 4 号墳埋葬主体部実測図……51
第 26 図　土坑実測図……52
第 27 図　出土遺物実測図 (1) ……54
第 28 図　出土遺物実測図 (2) ……55
第 29 図　出土遺物実測図 (3) ……55

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

付 表 1　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡一覧表……60
第 30 図　調査地位置図（及び周辺遺跡分布図）……61

(1) 奥谷西遺跡

第 31 図　地形測量図……64
第 32 図　奥谷西遺跡遺構配置図……65
第 33 図　溝SD03土層断面図 ……66
第 34 図　竪穴住居跡SH393実測図 ……67
第 35 図　竪穴住居跡SH235実測図 ……68
第 36 図　竪穴住居跡SH144カマド実測図 ……69
第 37 図　竪穴住居跡SH144実測図 ……70
付 表 2　竪穴住居一覧表……71
第 38 図　土坑SK192出土遺物実測図……72
第 39 図　土坑SK192実測図……72
第 40 図　集石遺構SX06実測図 ……73
第 41 図　出土遺物実測図……74
第 42 図　遺構変遷図……75
付 表 3　遺物観察表……78

(2) 薬王寺古墳群

第 43 図　多保市地区調査範囲図……81

第 44 図　薬王寺古墳群地形測量図……83
第 45 図　墳丘断面図……84
第 46 図　1号墳第1主体部実測図……86
第 47 図　1号墳第2主体部実測図……87
第 48 図　1号墳第3主体部実測図……88
第 49 図　2号墳第1主体部実測図……89
第 50 図　2号墳第2主体部実測図……90
第 51 図　3号墳第1主体部実測図……91
第 52 図　3号墳第2主体部実測図……92
第 53 図　出土遺物実測図(1)……93
第 54 図　出土遺物実測図(2)……94
第 55 図　出土遺物実測図(3)……95

**(3) 薬王寺古墓**

第 56 図　土層断面図……97

**(4) 多保市城跡**

第 57 図　薬王寺古墓・多保市城跡C地点地形測量図…… 100
第 58 図　B地点墳墓SX01実測図 …… 102
第 59 図　B地点墳墓SX11等実測図 …… 103
第 60 図　C地点土層断面図（トレンチ東南端）…… 104
第 61 図　出土遺物実測図…… 106
第 62 図　墳墓配置図…… 108

# 図 版 目 次

**宮津城跡第４次**

図版第１　(1)大手川右岸トレンチ調査前（西南から）　(2)新・旧外堀石垣全景

図版第２　(1)新・旧石垣接続部　(2)旧石垣および胴木

**土師川改修関係遺跡**

図版第３　(1)調査地遠景　(2)調査地全景航空写真（南西から）

図版第４　(1)トレンチ掘削状況（北西から）　(2)石垣状遺構検出状況（西から）

図版第５　(1)第15トレンチ溝状遺構群（上層）　(2)第15トレンチ溝状遺構群（下層）

**味方遺跡**

図版第６　(1)試掘調査状況（北から）　(2)試掘調査状況（南から）

図版第７　(1)第７トレンチ試掘調査状況（北から）

(2)第９トレンチ試掘調査状況（北から）

図版第８　(1)第７・８トレンチ拡張後の全景（南から）

(2)同上　北半部の遺構（北から）

図版第９　(1)円形竪穴住居SB01（北から）　(2)土器溜りSX04（北から）

**田辺城跡第６次**

図版第10　(1)調査地全景（東から）　(2)トレンチ掘削状況（西から）

**宮福線関係遺跡**

**(1) 石本遺跡**

図版第11　(1)試掘調査状況（南から）　(2)調査地全景（北から）

図版第12　(1)A地区調査状況（南から）

(2)A地区　大溝（溝２）検出状況（北から）

図版第13　(1)B地区調査状況（北から）　(2)C地区調査状況（東から）

図版第14　(1)C地区　16号住居跡（北東から）　(2)A地区　８号住居跡（西から）

**(2) 波江古墳群**

図版第15　調査地全景（航空写真）

図版第16　(1)調査地遠景（西北から）　(2)調査地全景（東から）

図版第17　(1)波江３号品・波江４号墳周辺第１主体部（東から）

(2)波江４号墳（東から）
図版第18　(1)土坑１遺物出土状況　(2)蔵骨器検出状況
図版第19　出土遺物
図版第20　出土遺物(2)

**近畿自動車舞鶴線関係遺跡**

**(1) 奥谷西遺跡**

図版第21　(1)調査前風景（北から）　(2)調査地全景（南から）
図版第22　(1)溝SD03完掘状況（東から）　(2)溝SD03土層断面（東から）
図版第23　(1)竪穴住居跡SH393（西から）　(2)竪穴住居跡SH144（東から）
図版第24　(1)竪穴住居跡SH144カマド検出状況（南から）
(2)土坑SK192検出状況（南から）
図版第25　(1)土坑SK192出土遺物　(2)集石遺構SX06出土遺物

**(2) 薬王寺古墳群**

図版第26　(1)調査地全景（東から）　(2)調査地全景（東から）
図版第27　(1)１号墳主体部全景（北から）　(2)２号墳主体部全景（南から）
図版第28　(1)１号墳第１主体部（南から）　(2)２号墳第２主体部（南から）
図版第29　(1)３号墳主体部全景（東から）　(2)SX01全景

**(3) 薬王寺古墓・多保市城跡**

図版第30　(1)薬王寺古墓断面（西から）　(2)多保市城跡Ａ地点（南東から）

**(4) 多保市城跡**

図版第31　(1)多保市城跡Ｃ地点（北から）　(2)多保市城跡Ｃ地点（西から）
図版第32　(1)多保市城跡Ｂ地点SX11（北から）　(2)同SX11下層（西から）

# 1. 宮津城跡第4次発掘調査概要

## 1. はじめに

今回発掘調査を実施した宮津城跡は，京都府宮津市の市街地に所在する旧丹後国の近世城郭である。宮津城跡は，宮津湾に注ぐ大手川の河口部東岸に位置し，その規模は東西約550 m・南北約350 m を測る。

宮津城は，天正8(1580)年に丹後に入った細川氏により築かれた「細川城」の築城に始まる。細川氏の後，丹後守に任ぜられた京極高広の代に改築され，寛永年間には近世宮津城が完成したといわれている。宮津城は，京極氏以降明治初期に廃城されるまで，永井・阿部・奥平・青山・木荘の諸大名がこの地を治めたが，城の規模は京極氏当時と大きな変化はなかったようである。明治以降は宮津市の市街地と化し，往時の宮津城をとどめるものは太鼓門・本丸北西部石垣・外堀の一部石垣等がわずかに残るのみである。また，城外には沼田氏表門がわずかに往時の武家屋敷の面影を残している。

今回の発掘調査は，宮津市字柳縄手に所在する国道176号線大手橋の改良工事に伴う事前発掘調査である。当該地は，宮津城跡大手橋の一角にあたり，外堀石垣・橋台等遺構の存在が予想されたため，工事前に調査が必要であるとの判断が下された。各関係諸機関の協議の結果，当調査研究センターが調査主体となり，宮津城跡の発掘調査を実施することになった。

宮津城跡の調査は，地元郷土史家の方々による立会調査の他，京都府教育委員会・宮津市教育委員会による発掘調査が実施され，石垣等数多くの遺構・遺物が検出されている。今回の発掘調査は，前述の発掘調査(第1次調査～第3次調査)に続くものである。発掘調査の実施にあたっては，当調査研究センター主任調査員 辻本和美・同調査員 竹原一彦の両名が担当した。調査期間中は，京都府宮津土木事務所・京都府教育庁指導部文化財保護課・宮津市教育委員会・府立丹後郷土資料館・金下建設株式会社等関係諸機関の他，地元地区の方々には作業員として多数参加していただき，多大な御協力・御援助を賜わった。また，市文化財保護審議会会長の中嶋利雄氏から御指導を得た。ここに記して謝意を表します。

現地調査は主に竹原一彦が担当し，昭和60年2月6日～3月30日の期間で調査を実施した。

## 2. 調査経過

大手川の両岸部旧大手橋橋台部分に1か所ずつ2か所のトレンチを設け，発掘調査を実施した。それぞれのトレンチの規模は，大手川右岸トレンチは東西約7 m・南北約18 m・左岸

トレンチは東西約８m・南北約３m である。調査地はその大部分が大手川にかかり地盤が軟弱であることから，改良工事に伴うシートパイルの打込みを待って調査を開始した。

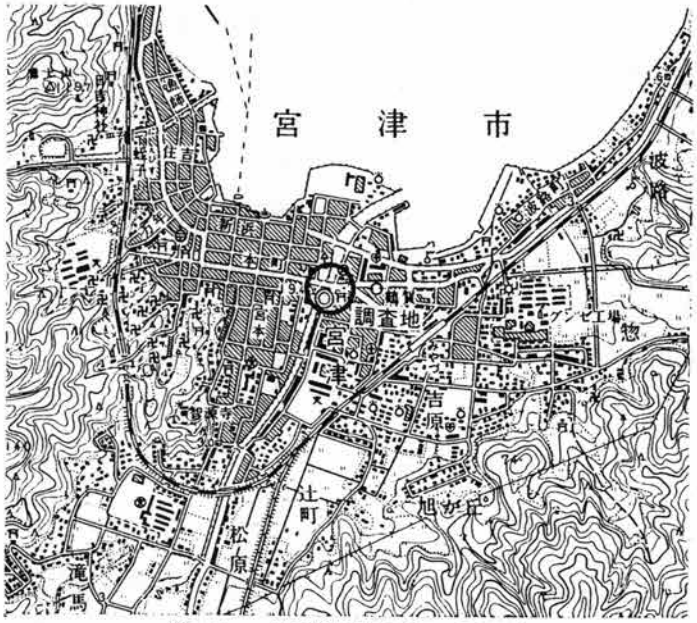
調査地内には，明治19年築造の石製アーチ型の旧大手橋橋台とその基礎が残っていたため，調査は旧大手橋橋台の撤去に伴う立会調査から実施することになった。橋台の撤去は大手川左岸部から開始され，重機による石材撤去および掘削に伴う土層の観察を行った。

宮津城に関する古い絵図によれば，城域外にあたる大手川左岸に石垣の存在を示すものは無く，土層観察においても地山層である黄灰色砂層の堆積が認められただけであり，石垣が積まれた痕跡は認められなかった。

大手川右岸部のトレンチは，絵図にも石垣が描かれており，調査地内に宮津城に伴う外堀石垣が含まれていると予想されたことから，旧橋台の撤去に伴う重機の使用を慎重に実施した結果，宮津城に伴う外堀石垣が良好な状態で遺存していることが判明した。移築保存される旧大手橋の石材と裏込めに使用されていた巨石(宮津城に伴う石材の転用か)の撤去を待った後，宮津城外堀石垣断面を露出させるべく本格的な掘り下げを行った。調査の結果，新・旧２時期にわたる石垣面を検出した。

## 3. 検 出 遺 構

大手川右岸のトレンチ内から２時期の石垣面と，石垣構築段階の基準杭とみられる丸太杭も若干検出した。外堀石垣は，旧大手橋橋台の基礎部分に接して存在していた。石垣は道路の盛土の直下に認められ，トレンチ中央地表下約１m 付近から新しい石垣が検出された。古い石垣はトレンチの西南部に存在し，地表下約1.8m と新しい石垣より若干下がった地点より検出した。新・旧両時期の石垣と




第１図　　調査地位置図（１：25,000）

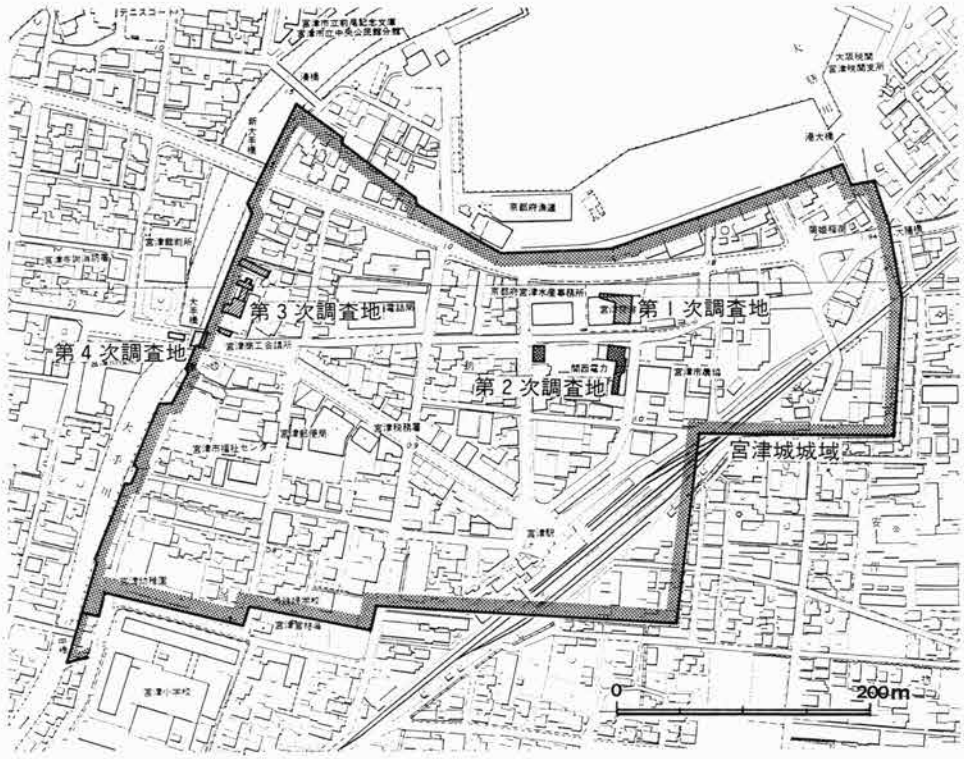
も，弱い地盤である砂層の上に築かれていた。両石垣は個々に存在していたものでなく，新しい石垣は古い石垣の前面にくの字形に張り出す状態で取り付けられていた。

① 新段階石垣

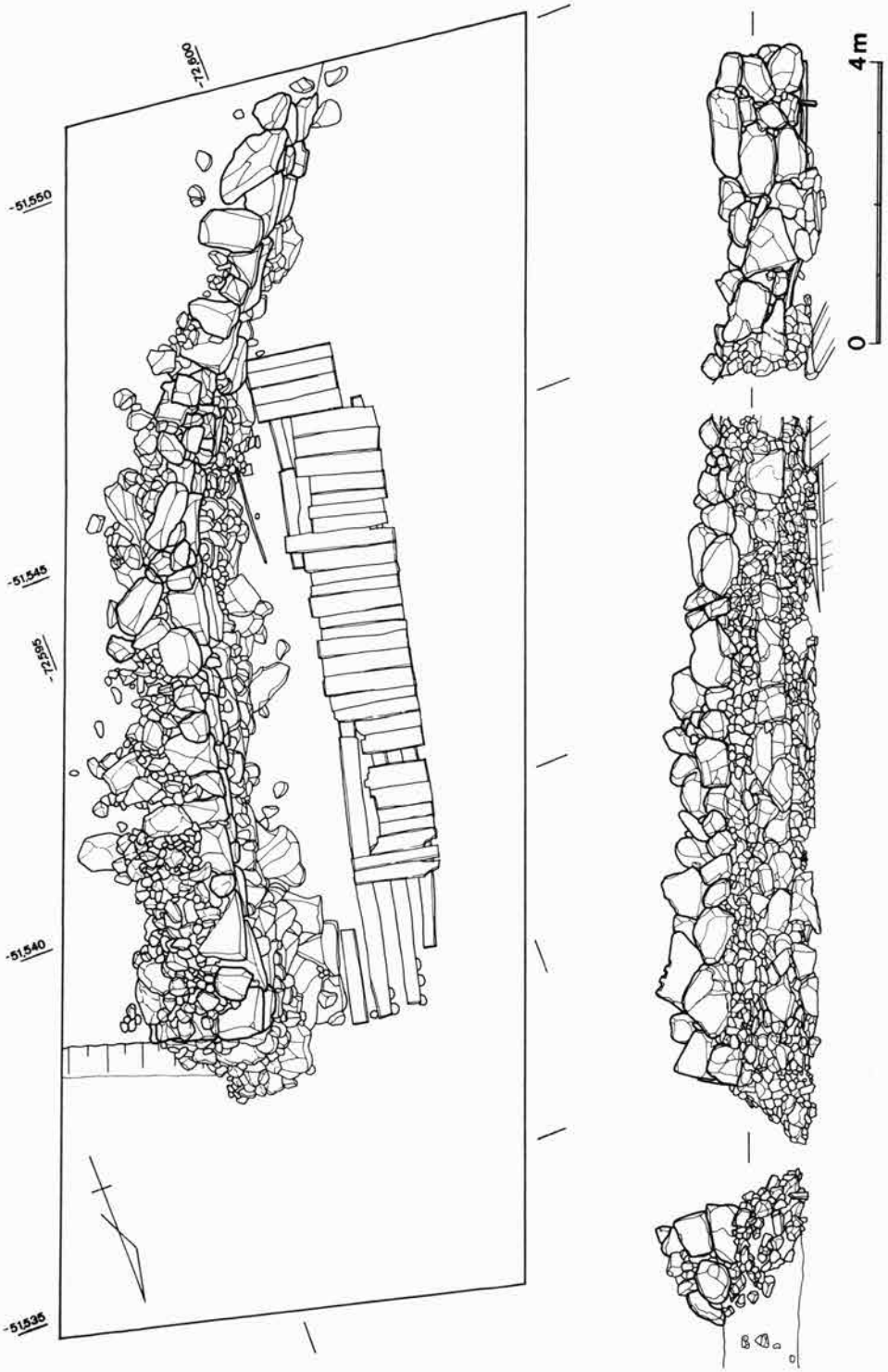
トレンチ内中央部で検出した石垣である。石垣は直角に近いコーナーをもっており，西および北側に石垣面を向けている。西面する石垣の南端は古い石垣の前面に取り付けられている。石垣の南端から北端のコーナーまでの長さは約8mであった。コーナーから北面する石垣は東方向約1.5m分が遺存していた。石垣はまだ東方に向って続いていたものとみられるが，シートパイル打込み段階の溝掘りにより取り去られていた。

石垣は40cm～50cm大の花崗岩を使用し，基底石から2～3段目まで遺存していた。石垣に使用された花崗岩の大部分は自然石であるが，コーナーの角石を含む若干の花崗岩には切石の使用が認められた。切石には4～5か所に幅約10cmのクサビ痕が残る。

石垣の基底部は海抜0.1m付近にあたり，現在の大手川水面とほぼ同一であった（大手川の水位は干満の差により約30cm前後の変化をもつ）。石垣基底部に土台木（胴木）を認めず，西面する石垣下には10～15cm大の比較的小型の栗石が，約50cm前後の厚さで込められて




第2図　宮津城跡周辺地形図




第3図　調査地平面図および石垣立面図（立面図水準：0 m）

いた。この栗石の下部には，40～50 cm 大の花崗岩が2段に積みあげられていた。この下部の石垣は，軟弱地盤補強のための根石と判断される。この大型石の根石は，角石の下に認めることはできず，角石下部および北面石垣の下部には栗石もあまり無く，ただ砂層の堆積があるだけであった。根石最下部から石垣の最上部までは約2.1 m であった。石垣は角石が認められたが角脇石は無く，石垣面は平石のみであり，石垣の積み方もやや乱れた状況を呈していた。角石の下方外周囲および北側部分に，直径約15 cm 程度の丸太杭が若干打ち込まれていた。この杭は新しい石垣築造時の基準杭か補助杭の残存であるとみられる。

② 旧段階石垣

トレンチの東南部分で検出された石垣である。石垣は東北から西南方向に一直線に走りトレンチ外に延びるとみられ，シートパイルにより寸断されているが約8 m分を検出することができた。石垣はやや大型の花崗岩(自然石)を使用している。基底部から2～3段目までが遺存していた。石材は小口面を石垣面として積み上げている。石垣の基底部は海抜－1.1 m地点に位置し，石垣下には幅約20 cm，厚さ約7 cm程度の胴木(角材)を1本，石垣に平行して敷いていた。石垣の裏には新しい石垣にみられた栗石はほとんどみられなかった。

③ そ の 他

旧大手橋橋台基礎(明治19年築造)が検出された。基礎部分は直径約15～20 cm，長さ約2.5 m前後の丸太杭(松)を4列に隙間なく打ち込み，その上に幅約30 cm・厚さ約15 cm の長い角板を4列に乗せていた。さらにその上部に直交する方向で幅約20～30 cm・厚さ約10 cm・長さ約2 m程度の板を隙間なく敷きつめていた。板の上面は海抜－0.9 m であり，この上面に大手橋の石材を据えていた。

## 4. 出 土 遺 物

今回の調査において出土した遺物は，すべて外堀部分の掘り下げにより出土したものである。出土遺物は近世・近代の陶磁器・巴文軒丸瓦等が若干出土した他，硯・北宋銭の熙寧元宝(1068年初鋳)1枚が出土している。外堀は現在も大手川として存在し，現在使用の陶磁器片も多く出土し，直接今回出土した石垣の年代を決める遺物の出土はみられなかった。

## 5. ま と め

今回の調査地は，宮津城跡の大手橋に近い外堀部分にあたる。絵図でみる宮津城跡大手橋は，現在の大手橋より南約10 m付近に位置していたものとみられ，以前に大手川の中より橋の礎石が一部出土している。今回の調査では，大手橋に関する遺構の検出はみられなかっ

たが，大手橋に続く外堀石垣を検出した。

宮津城の歴史は大きく2時期に分けられる。第1期は天正8(1580)年に宮津入りした細川氏によって築かれた細川氏宮津城であり，第2期は慶長5(1600)年丹後に入った京極高知の長子，高広の代に築かれた京極氏宮津城である。京極氏宮津城は元和9(1623)年から寛永2(1625)年にほぼ完成し，同13年に完了したとされる。この後宮津城の城郭に変化はほとんどなかったとされている。

今回の調査において検出した宮津城外堀石垣は，石垣および裏込め部分から年代を決定できる遺物の出土がなく，外堀石垣築造の年代を決定しえない。古い時期の石垣は，全てやや大型の花崗岩の自然石を使用し，基底石下に胴木が存在し，石垣も丁寧に積み上げられている。この石垣は宮津城築造に伴う石垣とみられ，細川氏築造時の石垣とみることができるのではなかろうか。宮津市教育委員会の発掘調査では数多くの石垣・石列等が検出されており，京極氏以降とみられる石垣には花崗岩の切石が使用され，自然石のみ使用の石垣等はより古い時期と判断されている。(注1)

今回出土した新段階石垣は，旧段階石垣に石垣面の方向を変えるべく取り付けられている。この石垣は現在の国道大手橋の直下に位置し，石垣面も道路に対して直交することから，あまり古くない時期の石垣と判断される。明治19年築造の大手橋橋台裏込めが石垣の前面にみられたことから，アーチ型大手橋築造以前にはこの石垣は築かれていたと判断される。宮津城廃城後，城跡部分は市街地と化し，現国道もそれに伴い新たに造られ，大手川に架かる橋も数回付け変えられたとみられ，いずれの段階かの大手橋橋台の基礎部分になる石垣とみることができよう。

古い石垣は東北方向に延びているが，調査地東北部は第3次の調査地であり，その調査では調査地の西方外にも宮津城跡の遺構が延びている(注2)ことから，この古い時期の石垣は，検出した東北端部から近い場所で，北および西方にその方向を転じているものとみられ，現存する大手川の石垣に接続するものとみられる。現在の大手川右岸の石垣には石積みの状況から，宮津城跡の石垣が当時のまま部分的に残っていると思われる。

今回の調査では大手橋に関する遺構は検出されなかったが，大手橋から東北方向に延びる宮津城外堀石垣の検出をみることができた。　　(竹原一彦)

注1　宮津市教育委員会 主事 中嶌陽太郎氏の御教示による。

注2　『宮津城跡第3次発掘調査概要』(『宮津市文化財調査報告』第9集　宮津市教育委員会) 1985

# 2. 土師川改修関係遺跡発掘調査概要

## 1. はじめに

今回の調査は，土師川水系河川改修工事に伴い，京都府土木建築部の依頼を受けて，当調査研究センターが実施したものである。

丹波山地から日本海側へ流れ出る河川の大半は，福知山盆地で由良川に集められ，日本海へと注ぐ。多くの河川が集中する福知山盆地では，古来より水害の多発地域であった。記録が残る近世以降だけでも，2～3年に1度の割合で大災害に見舞われてきている。(注1) 由良川の支流である土師川の流域もこの例外ではない。最近では，昭和59年9月，台風10号による豪雨出水のため，土師川の流域は甚大な災害を被っている。こうした状況のなかで，被災箇所の復旧だけではなく，土師川の全域にわたる河川改良工事計画が計画されたのである。

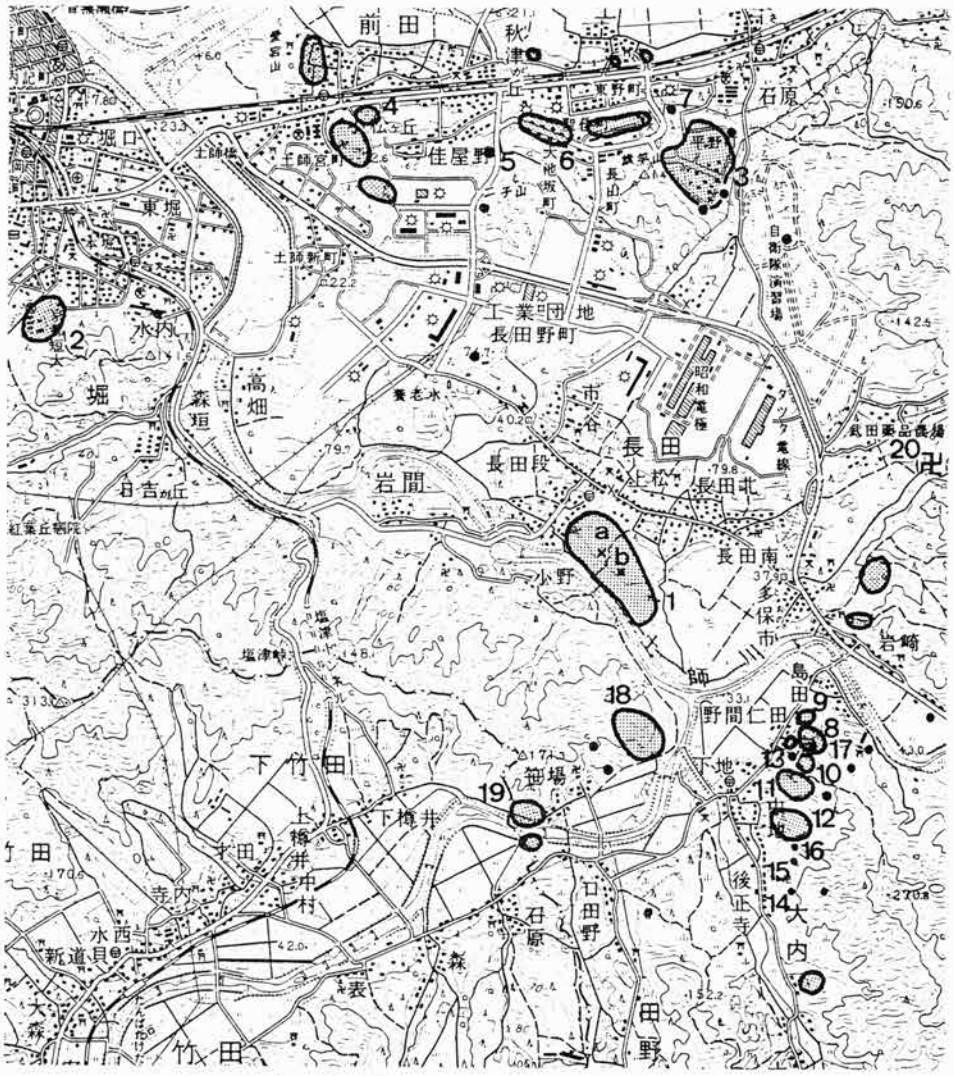
土師川改修工事の施工区間内には，遺物散布地として周知されている和田賀遺跡・前ケ嶋遺跡・仲堤遺跡が存在する。このため，京都府教育委員会，京都府土木建築部と当調査研究センターで協議を行い，各遺跡について遺構・遺物の有無の確認を行うとともに，その記録を作成し，特に重要な遺構・遺物などが確認された場合には，保存のための資料もあわせて作成することを主な目的として，発掘調査を行うこととした。

現地調査は，当調査研究センター主任調査員 長谷川達，同調査員 三好博喜が担当し，昭和59年11月8日から昭和60年3月8日まで行った。

調査に際しては，福知山市教育委員会をはじめとする関係諸機関の協力を得た。また，調査期間中，地元長田段・長田上松・長田北・長田南の各地区の方々には多大な助力を賜るとともに，発掘調査参加者(注2)および協力者(注3)の方々には，厳寒の折，幾多の苦労をかけました。ここに改めて謝意を表わします。

## 2. 位置と環境

調査地は，広大な長田野台地の南西縁部，竹田川と土師川とによって織り成された標高28～30 m の沖積地にある。所在地は，福知山市字長田小字前ケ嶋 および 下出合にまたがる。調査区間内の地勢は，中央付近(第9トレンチ付近)で段差がみられるものの，ほぼ平坦であった。ちなみに，標高は中央付近を境に北西側で 28 m 余り，南東側で 29 m 余りを測る。最近まで水田として利用されていた所であり，調査地の東側には今なお水田地帯が広がっている。西側は堤防を挟んで土師川が流れている。




第４図　　調査地周辺遺跡地図（１/50,000）

1. 和田賀遺跡
前ケ嶋遺跡
仲堤遺跡
a．石器出土地点
b．土器出土地点
2. 武者ケ谷遺跡
3. 上野平遺跡
4. 宝蔵山古墳
5. 八ケ谷古墳
6. 中坂古墳
7. 仏山古墳
8. 宮遺跡
9. 城ノ尾城館跡
10. ケシケ谷遺跡
11. 奥谷西遺跡
12. 大内城跡
13. 男塚古墳
14. 洞楽寺古墳
15. 後青寺古墳
16. 小屋ケ谷古墳
17. 城ノ尾古墳
18. 嶋戸山古墳群
19. 境谷古墳群
20. 多保市廃寺

福知山市の南東部に位置するこの一帯は，古代には「六人部郷」と称した地域で，京都・丹後ルートの山陰道と播磨からのルートとの合流地点にあたる。おそらく，交通の要衝の地として，早くから開発が進んだ地域であったものと思われる。このことは，近年発掘調査が進んでいる近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の調査成果からもうかがえる。以下，調査地周辺の

主要遺跡について概観してゆくことにする。

まず，調査の対象となった地域には，和田賀遺跡・前ケ嶋遺跡・仲堤遺跡が存在する。長田野台地の縁辺部は，良質な陶土の得られる場所であり，これらの遺跡は製瓦用粘土の採集に際して発見された。和田賀遺跡では，チャート製の縦長剝片を素材とした削器が採集されており，先土器時代の所産である可能性が指摘されている。(注4) 仲堤遺跡では，古墳時代前期を主体とする土師器が出土しており，同時期の集落遺跡と思われる。前ケ嶋遺跡では，石鏃などが採集されている。

調査地西方，土師川左岸の丘陵端部には武者ケ谷遺跡があり，縄文時代早期の刺突文小型丸底土器が出土している。(注5) さらに西方の豊富谷には，縄文時代後期の土器や石器を出土した半田遺跡がある。(注6)

調査地北方，長田野台地の北縁部には多くの古墳がみられる。この地域の遺跡については，長田野工業団地の住宅地造成に伴う発掘調査などで，詳細が明らかにされている。台地の北東縁部に広がる上野平遺跡では，縄文時代晩期から弥生時代に属する打製石斧などの石器類が出土している。(注7) 弥生時代の遺跡は，由良川に沿った自然堤防状の微高地と思われる地域にあり，土器や石器などが採集されている。古墳時代には，沖積地に面した丘陵縁辺部や突端部に数多くの古墳が築造される。このなかには特徴的な古墳が幾つか存在する。宝蔵山古墳群では，弥生時代後期の墳墓と古墳時代初頭の古墳群とが同一丘陵上に営まれていることが確認されている。(注8) 八ケ谷古墳では，3基の箱形石棺があり，当地域では珍しい琴柱形石製品が出土した。(注9) また，古墳時代後期に属する中坂5号墳第3主体部や同7号墳(注10)・仏山1号墳(注11)では，横穴式粘土室と呼ばれる特殊な埋葬形体が確認されている。このように，長田野台地北縁部は福知山盆地の他の古墳とは若干異なった内容をもつ古墳が集中している地域である。

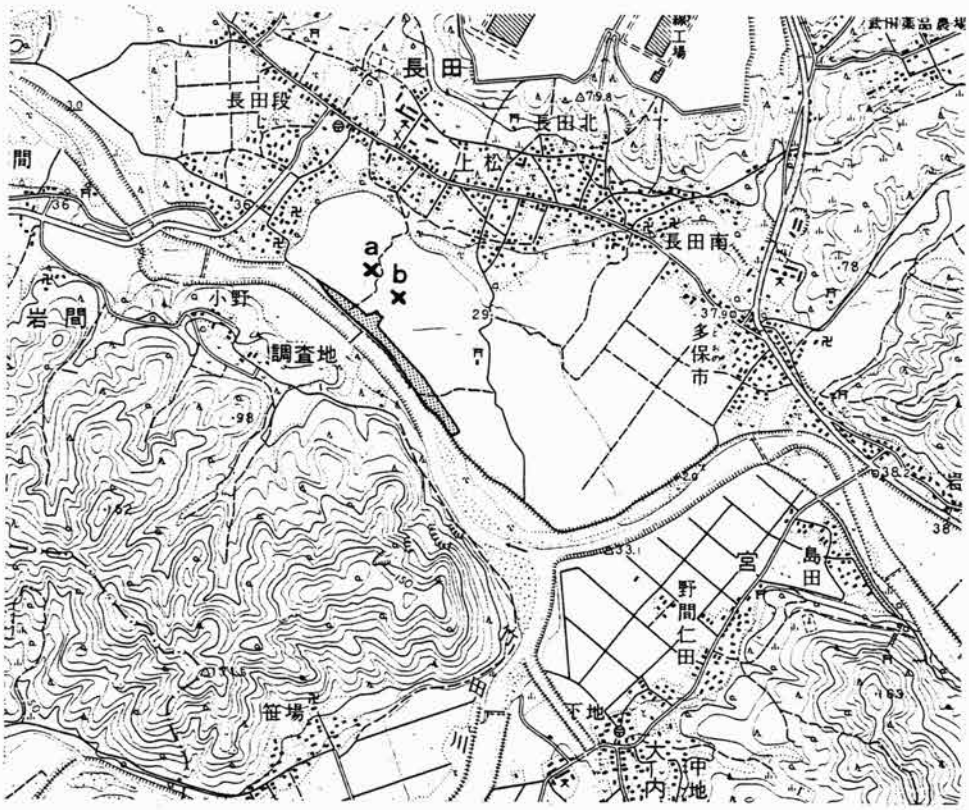
調査地南方の六人部地域では，近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の発掘調査によって，その概要が明らかになりつつある。(注12) 弥生時代の遺跡としては，宮遺跡・城ノ尾城館跡・ケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡・大内城跡などがあり，多くの遺構・遺物が検出されている。いずれも丘陵縁辺の平坦部に位置し，沖積地との比高は40 m程度を測る。このうち，宮遺跡・ケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡では，数棟の住居跡が検出されており，この地域一帯が弥生時代の居住地域であったことが確認された。古墳では，六人部地域唯一の前方後円墳である男塚古墳をはじめとして，洞楽寺古墳・後青古寺墳・小屋ケ谷古墳・城ノ尾古墳など，単独の古墳が数多く存在している。一方，竹田川を越えた地域には，庵戸山古墳群や境谷古墳群などの群集墳が形成される。この現象に対しては，身分の差異による墓域の選別と解釈するむきもある。(注13) 奈良時代，多保市には七堂伽藍を備えた寺があったといい，塔の心礎が残されている。また，

文献史料によれば，平安時代には「六人部庄」という荘園が営まれていたことが知られている地域でもある。

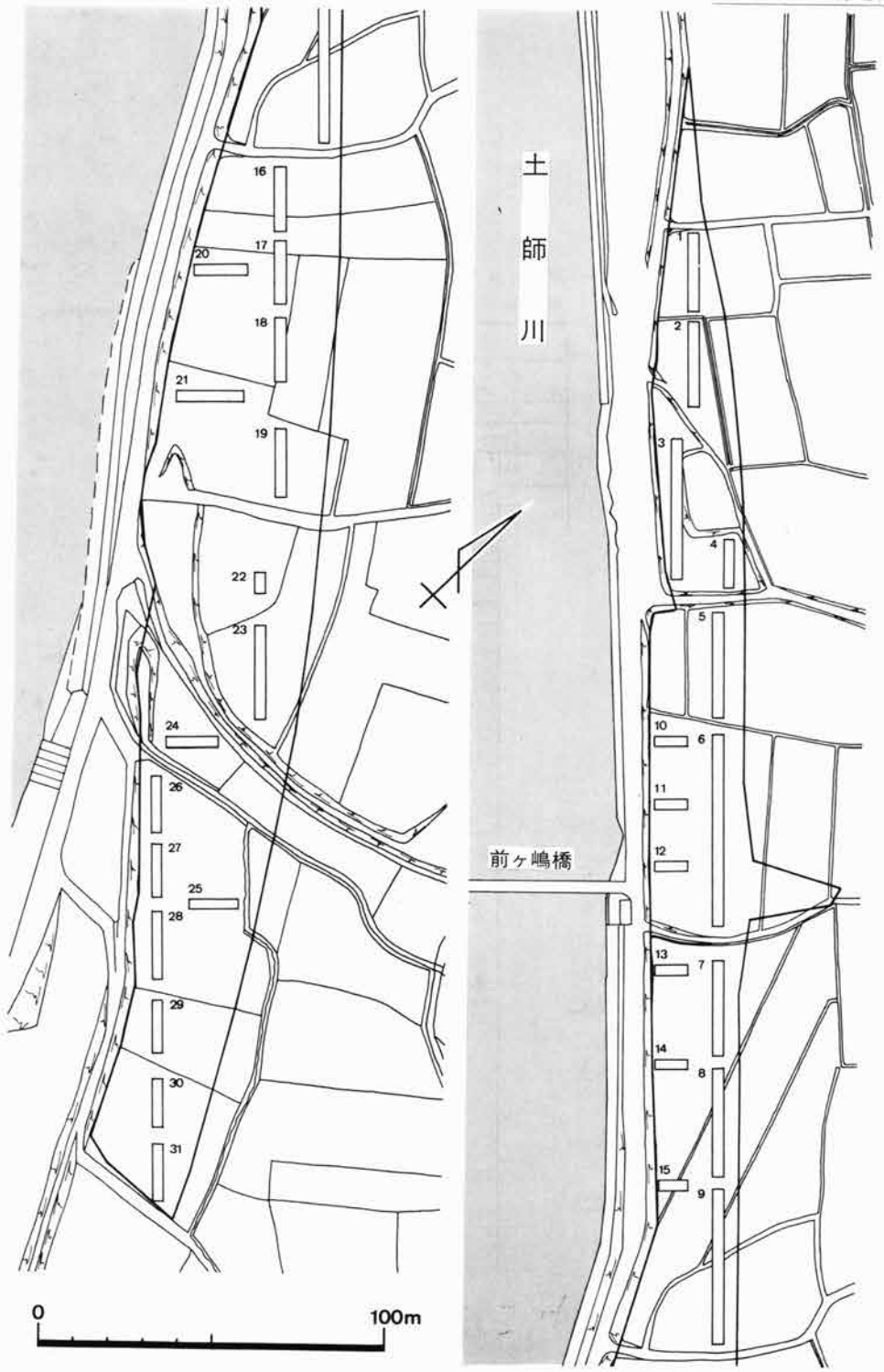
## 3. 調査の経過

調査対象地は，全長約 650 m，幅約 25 m，面積約 16,250 m² という広範囲にわたるため，遺構・遺物の有無を確認することに重点をおき，随所にトレンチを設けることにした。調査に際し，基準線を任意に設け（磁北から39度04分37秒西へ振る），基準線に対して平行もしくは直交するように31か所のトレンチを 3 m 幅で設置した。トレンチの総延長は 615 m，調査面積は 1,845 m² に及ぶ。

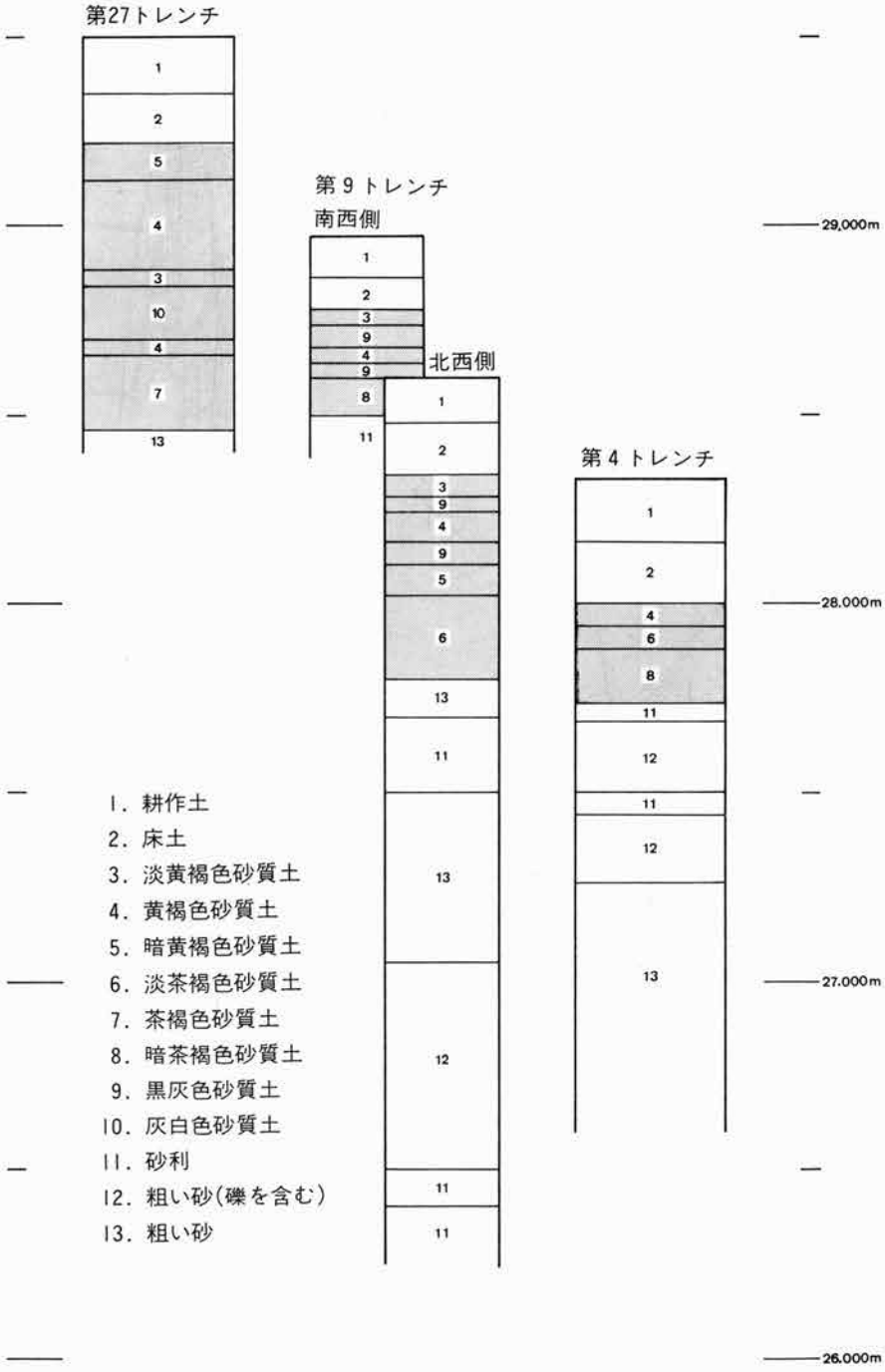
現地調査は，11月 8 日・9 日および12月25日・26日，1 月 7 日・8 日に草刈・伐採作業を行ったのち，重機により耕作土・床土の排除を行った。重機掘削は，11月12日～17日および 1 月 9 日・10日，1 月28日・29日の 3 回に分け，北西側から順次進めた。重機掘削後は人力




第5図　調査地位置図（1/25,000）
a．和田賀遺跡石器出土地点　　b．仲堤遺跡土器出土地点


土
師
川
前ヶ嶋橋
16
17
20
18
21
19
22
23
24
26
27
25
28
29
30
31
2
3
4
5
10
6
11
12
13
7
14
8
15
9
0
100m

第6図　トレンチ位置図


第27トレンチ
第９トレンチ
南西側
北西側
第４トレンチ
29.000m
28.000m
27.000m
26.000m
1. 耕作土
2. 床土
3. 淡黄褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 暗黄褐色砂質土
6. 淡茶褐色砂質土
7. 茶褐色砂質土
8. 暗茶褐色砂質土
9. 黒灰色砂質土
10. 灰白色砂質土
11. 砂利
12. 粗い砂(礫を含む)
13. 粗い砂

第７図　土 層 柱 状 図

による掘削を進め，遺構・遺物の検出に努めた。写真撮影・測量作業はその都度行い，3月8日にはすべての現地作業を終了した。

調査地の全般的な層位は，耕作土・床土が砂質土層となり，砂質土層の下は，主として粗い砂と礫との互層が続く状態であった。以下，調査地の北西側・中央付近・南東側の各基本土層について記述する。

調査地北西側の第4トレンチでは，耕作土・床土(灰白色砂質土)の下に約25 cmの砂質土層が堆積していた。この砂質土層は，土色の違いにより，黄褐色砂質土・淡茶褐色砂質土・暗茶褐色砂質土の3層に分かれる。砂質土層の下には，1 m以上の砂礫層が続いていた。砂礫の堆積は，5 cm程度の砂利層の下に約20 cmの礫混の砂層があり，再び砂利層・礫混り砂層となったのち，粗い砂の層が続くというものであった。

調査地中央付近の第9トレンチでは，耕作土・床土(灰白色砂質土)の下に約50 cmの砂質土層が堆積していた。砂質土層は，土色の違いにより，淡黄褐色砂質土・黒灰色砂質土・黄褐色砂質土・黒灰色砂質土・暗黄褐色砂質土・淡黄褐色砂質土の6層に分かれる。砂質土層の下には，1.5 cm以上の砂礫が堆積していた。砂礫の堆積は，上部に粗い砂と砂利との互層が1.3 m程度あり，以下は砂利層であった。

調査地南東側の第27トレンチでは，耕作土・床土(黒灰色砂質土)の下に約80 cmの砂質土層が堆積していた。砂質土層は，土色の違いにより，暗黄褐色砂質土・黄褐色砂質土・淡黄褐色砂質土・灰白色砂質土・黄褐色砂質土・茶褐色砂質土の6層に分かれる。砂質土層の下には，砂礫層が続いていた。

調査地は土師川に近接しているためか，下層には砂礫の厚い堆積がみられた。土師川の河床には随所に巨岩がみられることから(注14)，砂礫層の下は岩盤へと続くものと思われる。砂礫層は，円礫と粗い河原砂とから成り，竹田川・土師川の運搬・堆積作用によって形成されたものと推測される。さらに，砂礫層からは遺物の出土がみられないことなどから，砂礫層中に遺構面の存在する可能性はほとんどないものと判断し，砂質土層に調査の重点を置いた。この砂質土層は，基本土層で述べたように，調査地南東側の土師川上流部に厚く，北西面の下流部になるに従い薄く堆積してゆく状況であった。

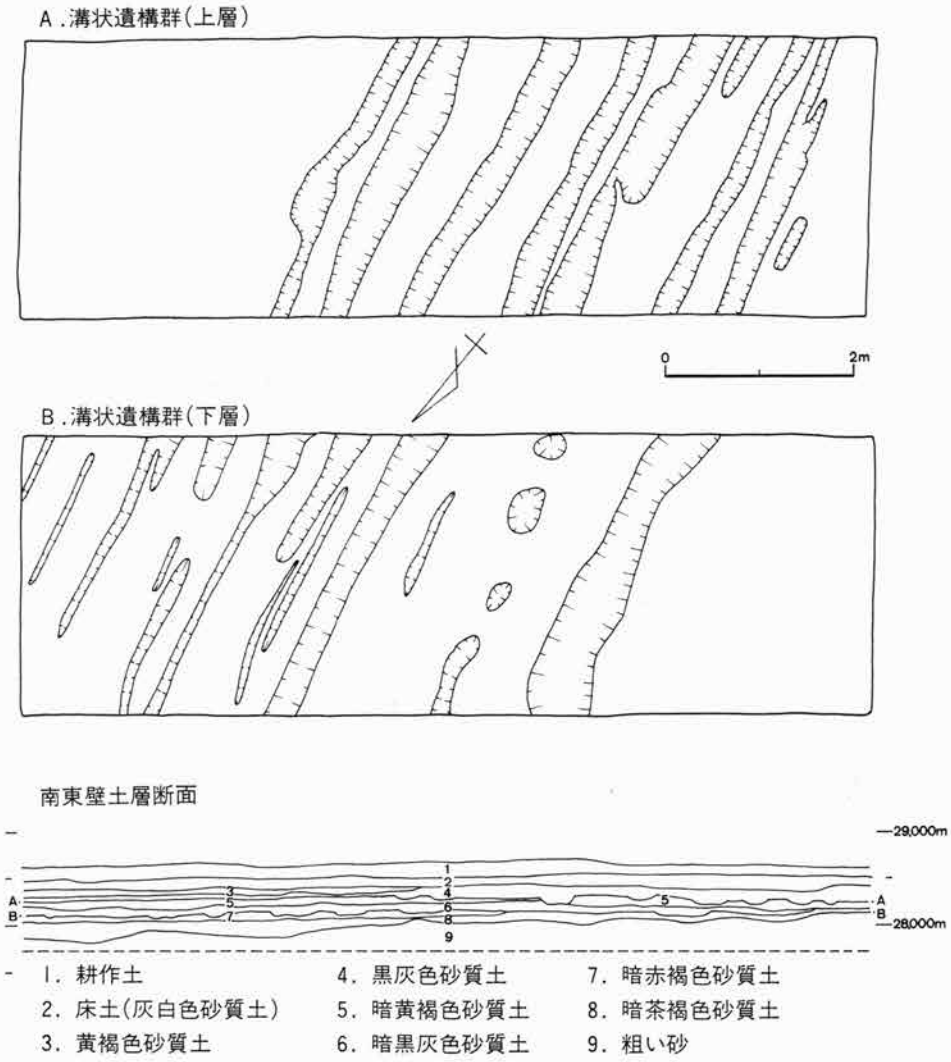
## 4. 検 出 遺 構

今回の調査によって検出した遺構には，多数の溝状遺構と石垣遺構とがある。

### (1) 溝 状 遺 構

砂質土層を掘削する過程で，耕作に伴う畝の跡と思われる溝状遺構群を検出することができた。検出トレンチは，3・5・7・8・10・11・12・14・15・18・20・29・31の各トレン

チで，計13か所である。このほか，土層断面の観察によって溝状遺構群を確認できたトレンチが数か所あり，調査地のほぼ全域にわたって溝状遺構が存在していたといえる。特に，5・7・15の各トレンチについては，上下2層にそれぞれ検出された。溝状遺構の規模は，幅20～30 cm 程度・深さ約 5 cm のものが一般的で，溝状遺構と溝状遺構との間隔は 30 cm 前後である。溝状遺構の走る方向は，ほぼ南北方向のものが最も多く，8か所を数える（5下層・7上層・7下層・8・15上層・15下層・18・19の各トレンチ)。次いで，南北軸から東へ約 135 度振るもの，即ち，現在の土師川の流れに対して平行に走るものが6か所(3・10・




第8図　第15トレンチ検出遺構および土層図

11・12・14・20の各トレンチ)にみられた。ほかに，南北軸から東へ約45度振るもの，即ち，現在の土師川の流れについて直交するものが2か所(5上層・31の各トレンチ)あった。なお，東西方向に走るものは，今回の調査では確認できていない。

これらの溝状遺構群のうち，第15トレンチで確認できたものについて記述してゆくことにする。第15トレンチは，調査区のほぼ中央に位置し，基準線に対して直交するように設けた幅3m，長さ9mのトレンチである。層位は，耕作土・床土(灰白色砂質土)の下に約40cmの砂質土層があり，粗い砂層へと続いている。砂質土層は，土色の違いにより，黄褐色砂質土・黒灰色砂質土・暗黄褐色砂質土・暗黒灰色砂質土・暗赤褐色砂質土・暗茶褐色砂質土の6層に分かれる。溝状遺構群は，暗黄褐色砂質土および暗赤褐色砂質土の上面を精査したところで検出されたものである。溝状遺構の走る方向は，どちらもほぼ南北方向のものであった。出土遺物は，近世以降の陶磁器の破片が若干出土したほか，下層で検出した溝状遺構内から寛永通宝が出土している。

今回の調査で検出した溝状遺構群の年代は，砂質土層が主として近世以降の陶磁器を包含していること，第15トレンチ下層検出の溝状遺構内から寛永通宝が出土したこと，などから江戸時代中期以降と考えられる。

(2) 石垣状遺構

第3トレンチの北西隅で，砂質土層中に石垣状遺構を確認した。この石垣状遺構は人頭大から拳大の河原石を2段積みにしたものである。土層断面に攪乱の跡がみられることから，砂質土層が堆積する以前もしくは堆積する過程で構築されたものである。ただし，この一郭は墓地であったため，調査対象地から除外された地域であった。このため，今回の調査では，石垣状遺構の一部分を確認しただけで，その全貌は明らかにできていない。

## 5. 出 土 遺 物

今回の調査によって出土した遺物には，土師器・須恵器・中世陶器・近世以降の陶磁器および古銭(寛永通宝)・土錘・釘などがある。出土遺物の総数は，整理箱1箱に満たない量であり，ほとんどが近世以降の陶磁器の細片であった。中世以前の遺物は，若干出土してはいるものの，多くが磨滅した破片である。これらの遺物は，砂質土層から出土したもので，砂礫層から出土したものはない。このような状況から，中世以前の遺物は，外からの流れ込みであろうと思われる。

## 6. ま　と　め

調査の結果，砂質土層は近世以降の段階で堆積したものであることが確認できた。砂質土層にみられた著しい土色の変化は，度重なる土師川の氾濫によるものと思われる。このように幾度となく繰り返された氾濫のなかで，人々は臆することなく営みを続けた。その結果が砂質土層中に掘り 込まれた溝状遺構なのである。砂質土層下にみられた砂礫層は，中世以前の段階で堆積していたものと考えられる。

調査地付近は中世段階まで土師川の河床もしくは河原床であったものが，近世以降になって急激に開発が進んだということができる。したがって，既述の石器や土器を出土した和田賀遺跡・前ケ嶋遺跡・仲堤遺跡の中心は，調査地の北東を流れる天井川より北側の，一段高くなった段丘上にあるのであろう。　（三好博喜）

注1　『福知山市史』第1巻　1976

注2　調査補助員（敬称略・順不同）
浜口和宏・清滝　龍・上杉英世
作業員（敬称略・順不同）
大西健太郎・吉良美智恵・芦田ハジメ・芦田きぬゑ・田中繁次・中見澤一・藤田安江・田辺喜代志・大西ひさゑ・井上あや野・藤原みさを・高橋正郎・和田岩男・杉山初枝・芦田津世志・高橋マツ野・杉山きぬゑ・山本みゆき・和田久大・松下義男・大西やゑ・藤雄木一枝・杉山ひさゑ・芦田八重子・橋本カツ子・山本栄一・植村つゆ・芦田よの・芦田まさの・大槻ますゑ・芦田トシエ

注3　中川淳美氏からは，仲堤遺跡および前ケ嶋遺跡から出土した資料を貸り受けることができた。機会を得て紹介することにしたい。

注4　注1と同じ

注5　『京都府福知山市武者ケ谷遺跡発掘調査報告書』福知山市教育委員会　1977

注6　『半田遺跡発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会　1975

注7　『上野平遺跡発掘調査報告書』京都府教育委員会　1973

注8　「宝蔵山古墳群発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概要』京都府教育委員会）　1967

注9　注1と同じ

注10　「中坂古墳群発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）　1972

注11　注1と同じ

注12　「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和56年度調査 概要」（『京都府遺跡調査概報』第1冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1982
「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和57年度 調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第6冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1983

注13　「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和56年度 調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第1冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1982

注14　調査地付近において，平常時の土師川水面の高さは26m前後であった。

# 3. 味方遺跡発掘調査概要

## 1. はじめに

京都府の北部，綾部市味方町中の坪他に所在する味方遺跡は，昭和45～46年頃に綾部市教育委員会や地元の研究者の集まりである綾部史談会の熱心な分布調査によって，その存在が確認された遺跡であり，『京都府遺跡地図』にも周知の遺跡として記載されている。

今回，京都府道路建設課では，国道173号線改良工事に伴い，当遺跡地内において新丹波大橋の橋梁架橋工事を計画した。

当遺跡については，その範囲が不明確であり，また，過去に発掘調査が行われたことがなく，性格等についても不明な点が多いため，その取り扱いについて京都府教育委員会と協議を重ねた結果，当調査研究センターに発掘調査の依頼がなされた。

現地調査は，調査課主任調査員辻本和美を担当者として，昭和59年12月13日に着手し，昭和60年3月30日まで実施した。

調査に当たっては，現地の作業全般にわたって地元味方町および綾中町の多勢の有志の方々の御協力を得たほか[注1]，綾部市教育委員会・綾部史談会・味方町自治会等の各機関には，期間中多大の御援助を受けた。それぞれの方々に対し深く感謝したい。

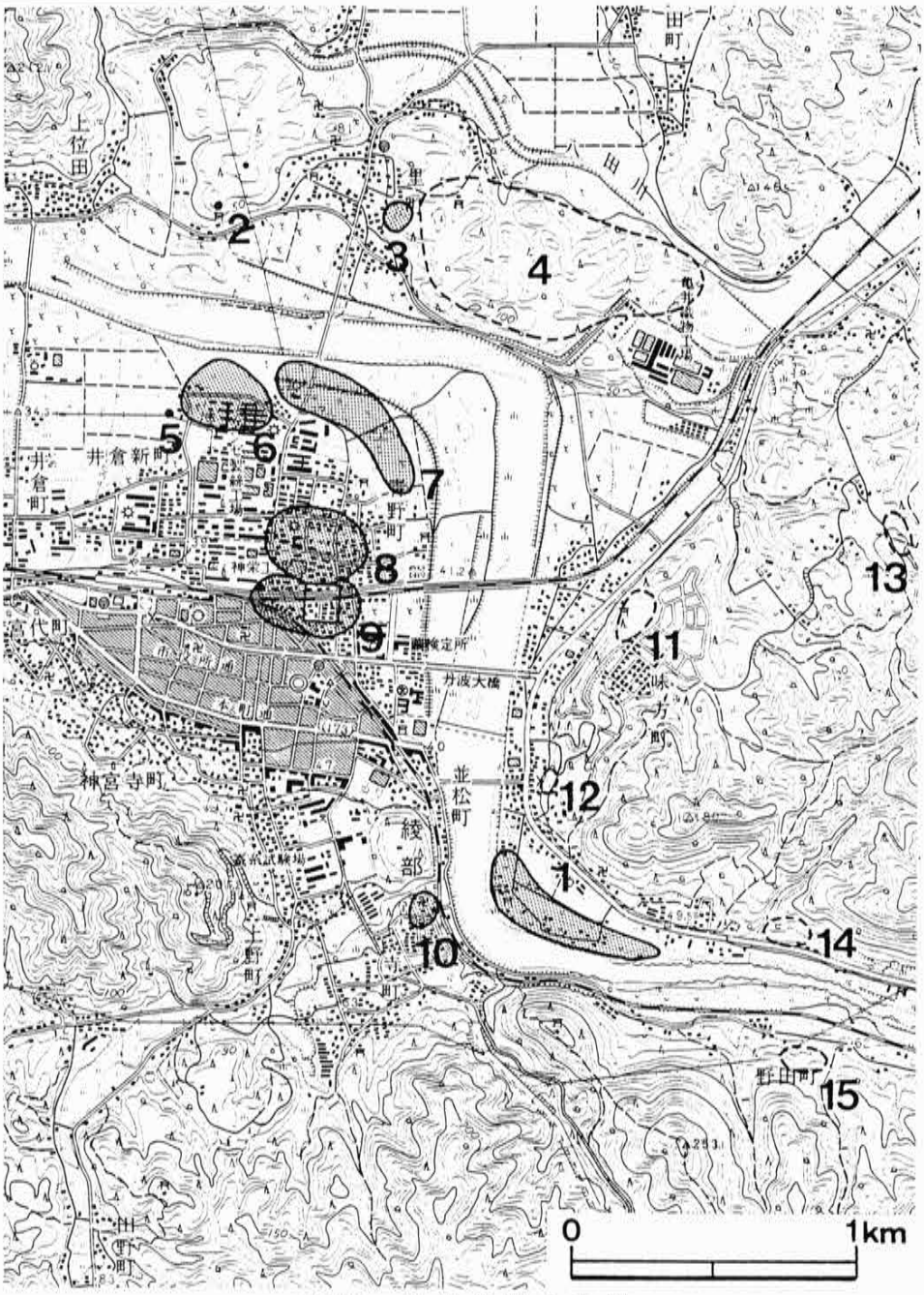
## 2. 立地環境と周辺の遺跡

丹波高原の山間部を縫うように流れる由良川は，綾部盆地に流入する手前で大きく進路を変える。味方遺跡は，この流路屈曲部の右岸に位置する。この付近は，北東に存在する低平な丘陵の裾から南西の由良川川岸に向って緩やかな傾斜面を形成しており，現在は主に水田・畑地として利用されている。標高は山側部で50m，川岸部で45.6m を測る。

従来の分布調査では，由良川の川岸に沿って帯状に広がる自然堤防状の微高地を中心に遺物が採集されており，特に今回の調査地に近接する笠原神社周辺の畑地と，その東方約400m 付近の2地点について，遺物の散布密度の濃いことが知られている。

採集された遺物には，縄文あるいは弥生時代に属する石鏃・チャート片・サヌカイト剥片のほかに，弥生土器や古墳時代から歴史時代にかけての須恵器・土師器片がみられ，当地が人々の生活の場として早くから適していたことをうかがわせる。

綾部地域には，当遺跡の少し下流部に，青野遺跡[注2]・青野西遺跡[注3]・青野南遺跡[注4]・綾中遺跡[注5]等の大規模な集落遺跡が集中して存在する。これらの諸遺跡の所属時期は，おおむね弥生時代




第9図　周辺遺跡分布図

1：味方遺跡　2：里古墳　3：久田山遺跡（弥生・古墳）
4：久田山古墳群（前方後円墳2・円墳，方墳その他69）
5：青野大塚古墳（円墳）　6：青野西遺跡（弥生末～古墳前）
7：青野遺跡（弥生中～古墳）　8：青野南遺跡（弥生～奈良）
9：綾中遺跡・廃寺（古墳～奈良）　10：寺町遺跡（弥生）
11：斉神社古墳群（円墳7）　12：平古墳群（円墳2）
13：ごまさの池古墳群（円墳2）　14：古墳群（円墳3）
15：野田古墳群（円墳2）

から中・近世に至るが，詳しくは各遺跡毎にその集落活動の中心となる時期に若干の差異が認められている。このうち，青野南・綾中遺跡においては，古墳時代集落跡の上に，奈良時代前期に遡る寺院跡（綾中廃寺）や何鹿郡家跡と想定される大規模な掘立柱建物群が検出されており，盆地内上流域の拠点的な位置を占めている。

一方，味方遺跡に関しても，由良川上流の山間部と盆地平野部を結ぶ接点として，あるいは，日本海側の舞鶴，若狭湾方面への交通の要衝として，重要な位置を占めていることが，その立地上からもうかがわれる。

当地の周辺には，2～5基を単位とする小規模な後期古墳群が点在するが，その内容については不明な点が多い。このうち，当遺跡北方の斉神社古墳群中の1基，紫水ケ丘古墳(注6)は，扁平な板石を用いた組合式箱形石棺を埋葬主体としていた。出土した小形勾玉や銅鏃等から4世紀後半の築造年代が与えられており，市内における数多い古墳の中でも古い例に属するものである。

### 3. 調査経過とトレンチ調査の概要

今回の調査に当っては，まず工事予定地内について，トレンチ掘りによる試掘調査を実施し，その結果を待って再度調査箇所の選定を行うこととした。そこで，山麓を走る国道27号線から南西の由良川川岸に至る全長約260 mの区間で，用地内に設置された道路中心杭を基準にして幅4 mのトレンチを各水田一筆毎に合計10本設け，第1トレンチから順次掘削を開始した。

この結果，第1から第6までのトレンチでは，現水田耕作土の直ぐ下で，赤褐色ないし黄褐色の礫層が顕われ，場所により灰褐色の粘土層になる箇所もあった。これらの調査トレンチからは，石詰の暗渠排水溝や灌漑用の溜池状の落ち込みなど後世に属するものが検出されたのみであった。

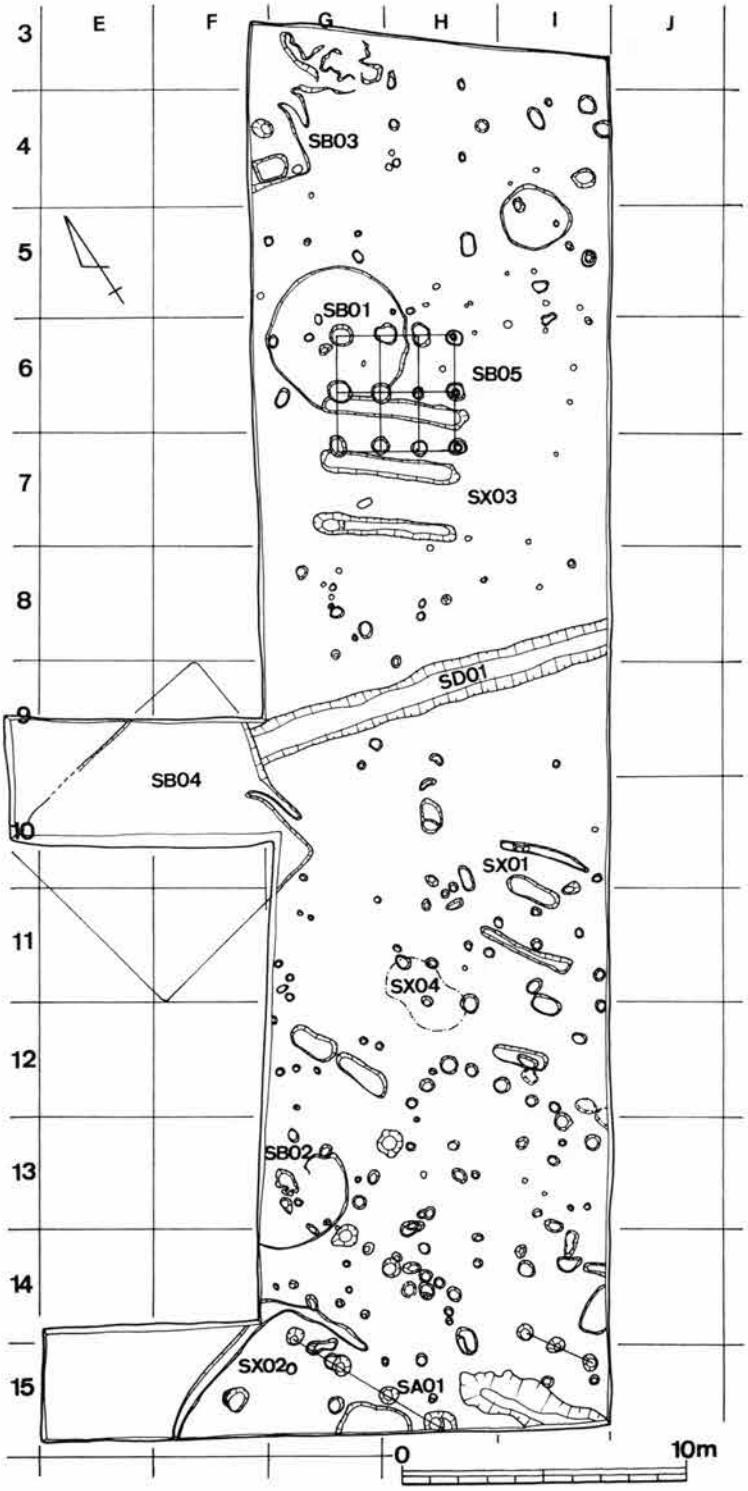
これに対し，川岸側の第7～9トレンチからは，弥生時代から中世に及ぶ各時期の遺構や遺物が検出された。このため，当地点については，トレンチ調査の範囲を広げ，遺構の面的な把握に努めた。当地点で検出した遺構については，次章で概略を記したい。

第10トレンチについては，地山の礫混り黄褐色土面で数条の桑等の耕作溝を検出したのみで，遺構等は由良川の氾濫によって削平されたものと考えられる。

試掘分を含め，今回の発掘調査面積は，約 1,200 $m^2$ である。

なお，調査地域全般にわたって伏流水の影響か地下水位が高く，川岸側の第9・10トレンチを除いて，掘削時比較的浅い箇所でも湧水をみた。

第10図　調査地位置図




第11図　第７・８トレンチ拡張区遺構配置図

## 4. 検 出 遺 構

今回検出した遺構の所属時期や細かな数値等については，今後の整理作業の進展を待って改めて報告することとし，ここではその概要を記すことで止めたい。

各期の遺構が検出された第７・８トレンチでの基本的層序は，水田耕作土・床土の次に暗褐色粘質土(遺物包含層)，そして地山である黄褐色粘砂質土となる。第９トレンチから以南の由良川川岸にかけては，自然堤防状の地形の上昇がみられ，地山は砂質を強く含んだものになる。

各時期の遺構は，この地山面を掘り込んで構築されているが，第７と第８トレンチを結ぶ地点では凹地状の地形の下りが存在し，地山上に堆積する暗褐色粘質土の層位も厚い。

現地表から遺構検出面までの深さは，平均で約30 cm程であるが，凹地部分では，深い所で約90 cmを測る。この後背湿地状？の凹地底部では，SX01など弥生時代に属する遺構が検出されており，また，この凹地部を埋める黒褐色土層の最上層には，古墳時代後期の須恵器・土師器を多数含む土器溜り (SX 04) が存在することから，同地形は弥生時代には既に存在し，6世紀後半頃に埋没したものと考えられる。

弥生時代の遺構としては，次に述べる円形竪穴式住居跡・溝・溝状遺構・土坑等がある。

溝 (SD 01) は，前述した凹地状地形の北縁に沿って，東から西に延びる。幅 1.2 m，深さ 50 cm で，断面逆台形状。底部は，地山下の礫層に達する。溝内からは，壺・甕などの破片が少量出土した。なお，溝西端は，古墳時代後期住居跡 (SB 04) によって切られている。

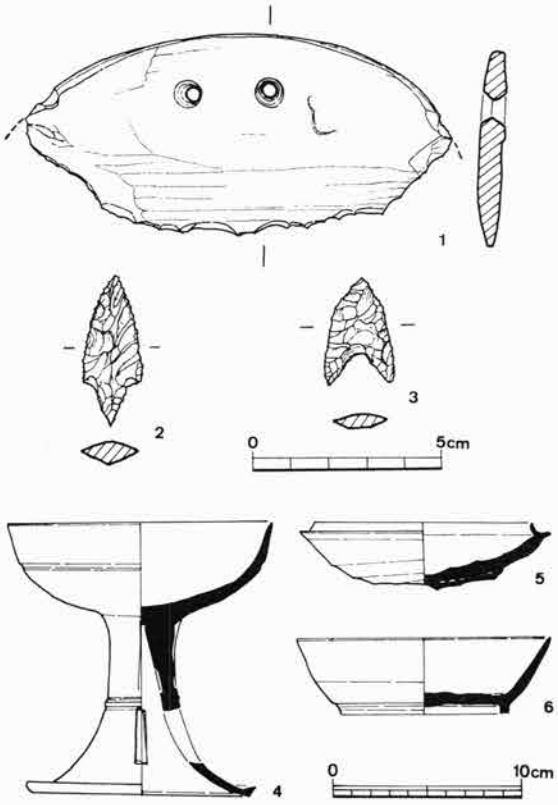
今回検出した２基の住居跡 (SB 01・SB 02) は，上面の削平が著しく，遺存状態は悪い。全体を検出できた SB 01 は，10 cm 程の壁高を残し，直径約 5 m を測る。中央に炉跡を配している。柱穴については，住居跡内外に小ピットが存在するが断定できない。

土坑＋溝状遺構 (SX 01) は，土坑を中心に両側に細い溝を配する。北側の溝内中央部には，弥生中期に属する一個体分の甕が埋納されていた。他の２辺を欠くが，小規模な周溝墓の一種と考えたい。溝状遺構 (SX 02) についても，L字形の溝底部しか検出されなかったが溝内から弥生土器片が出土しており方形周溝墓になる可能性がある。

古墳時代のものとしては，方形竪穴式住居跡・布掘り遺構・土器溜り等がある。

方形竪穴式住居跡 (SB 03・SB 04) は，両者とも今回は部分的な検出に留まった。そのため，規模・形態等不明な点を残しているが，幸い調査できた住居跡の東辺側に２例とも造り付けカマドを持つことが確認された。カマドは，住居跡南西の一角を掘り残し，住居壁に沿ってやや斜め外方へ細長い煙道を延ばすもので，若干の形態上の差異は有るが，由良川流域部，特に青野遺跡周辺の７世紀代の竪穴式住居跡に類例が見られ，「青野型住居跡」と呼ば

れる特異な平面プランを持つものであることが判明した。SB 04 については，北辺の一部を検出しており，それによって復原すると一辺約 7.5 m となる。両住居跡からは，少量の須恵器・土師器片が出土している。これらの土器は，不確定ながら 6 世紀後半代に比定できるもので，前述した青野型住居跡の盛行時期とズレを生じており，今後検討を要する。



第12図　出 土 遺 物

布掘りの 3 条溝 (SX 03) は，長さ 4.8 m，幅 0.6～0.8 m の溝を，約 1.5 m の間隔を開けて 3 条平行に配するもの。両端の溝は深さ約 60 cm。中央の溝は約 30 cm を測り，前者に比べやや浅い。溝壁は，ほぼ垂直に立ち上がる。弥生の住居跡 (SB 01) を切り，後述する総柱建物 (SB 05) に切られる。南側の溝底部から須恵器の提瓶口頸部が出土しており，先の切り合い関係と出土遺物からみて古墳時代後期に属することは確実である。当遺構については，類例に乏しいものの，現時点では，布掘りの掘立柱建物，あるいは高床式建物の基礎地業に関わるものと考えておく。

土器溜り (SX 04) は，多量の須恵器・土師器等の土器片とともに割石を混在する集石遺構である。掘形等は確認されず，先述した凹地状地形の堆積土上層に遺棄されたような状況を示す。

古墳時代以降の遺構としては，掘立柱建物跡 (SB 05)，柵列 (SA 01) 等がある。

SB 05 は，南北 2 間 (3.9 m)，東西 3 間 (4.1 m) の総柱建物で高床の倉庫と想定される。今回の調査地区では，多数の柱穴を検出しているが，建物としてまとめることができるのは，SB 05 1 棟のみである。しかし，調査地南半分の柱穴群や SA 01 等の柵列についても，今後の検討によっては建物になる可能性を残す。

このほか，第 9 トレンチでは，後世の耕作土により攪乱が著しいが，一辺 1.8 m，深さ92

cm を測る奈良時代の方形土坑や，多数の掘立柱柱穴が検出されている。

## 5. 出 土 遺 物（第12図）

今回出土した遺物は，整理用コンテナで約30箱程ある。土器類が主であるが，石器類・鉄器・土錘等の土製品も少量含み，時代別には，縄文時代から中世に及んでいる。

縄文時代のものとしては，図示した石鏃の他に，切目石錘・打製石斧・磨石などの石器類がある。石鏃のうち(2)は凹基，(3)は有茎の凸基式のもの。石材はいずれもチャートである。また，弥生時代に属する石器類には，石包丁(1)の他に石剣片が見られる。弥生土器については図示していないが，大略，中期後半（第Ⅲ様式新～第Ⅳ様式）のものが主体となる。

(4)・(5)は，土器溜り SX 04 出土の須恵器高杯及び杯身で，6 世紀後半～末葉のもの。SX 04では，これらの須恵器類のほかに，杯・甕・竈等の各種土師器類が出土している。

(6)は，奈良時代のもので，このほか，平安～鎌倉以降の輸入陶磁器・黒色土器・瓦器等がみられる。遺物の大半は包含層中からの出土であり，遺構に伴うものは少ない。

## 6. ま と め

味方遺跡については，これまで広範な遺物散布地として知られて来たが，その実体については不明な部分が多かった。今回の発掘調査は，路線内という限られた部分の調査であったが，多くの知見を得ることができた。その詳細については，来年度予定している本調査の結果と今後の整理作業の進展をまって改めて報告することとして，ここでは，今回調査の成果と今後の課題について要点のみを列記し，まとめにかえたい。

(1) 石器のみであるが縄文時代の遺物が出土した。これまでの採集資料と合わせ，綾部市内では数少ない縄文時代から始まる遺跡であることが裏付けられた。

(2) 弥生時代については，今回住居跡が 2 基確認され，集落跡の存在が明確になった。区画溝や埋葬用と思われる土坑等の存在することにより，大規模な集落跡に発展する可能性もある。これまで，青野町周辺でしか調査例のなかった当時期の集落跡の解明に貴重な資料となろう。

(3) 方形竪穴式住居跡や掘立柱建物跡など，古墳時代後期から奈良時代の遺構群については，青野町周辺の遺跡群のあり方と類似しており，今回はさらに青野型住居跡の新例を加えることができた。青野型住居跡については，本文中でも述べたように 7 世紀前半に盛行するものであり，本例は初源的なものとなる。古墳時代の集落全体に関しても青野町周辺の同時代集落跡群に比べやや古い段階に成立するもようであり，今後周辺地域との綿密な比較検討

の必要がある。

(4) 最後に，今回は線的な調査であったが，遺跡の南北方向の広がりが把握できた。すなわち，由良川の自然堤防状地形を中心に約 100 m 前後の幅をもつものと推定される。

当地より上流の由良川流域部においては，大規模な集落の立地に必要な平坦部を確保することは困難であり，山間部と盆地平野部との接点に位置する当遺跡は，その占地上からも今後重要視されるものである。 (辻本和美)

注1 調査補助員
岩崎裕隆・黒田康夫・能勢重人
調査作業員
井田愛治郎・井田宗一・井田 隆・井田通枝・梅原 勲・梅原幹夫・梅原美代・太田綱雄・大槻幸作・川戸とよ子・木下元枝・久下晴美・四方和子・四方輝彦・四方久子・四方正之・新田千栄野・西川勇夫・西村あさの

注2 山下潔巳・川端二三三郎・中村孝行・鈴木忠司・釋 龍雄「青野遺跡A地点発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』第2集青野遺跡調査報告書刊行会) 1976
増田信武・中谷雅治かほ「青野遺跡第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第3集 綾部市教育委員会) 1977
増田信武・中谷雅治ほか「青野遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第4集 綾部市教育委員会) 1978
中村孝行「青野遺跡第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981
中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
辻本和美・増田孝彦・小山雅人「青野遺跡第6・7次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
中村孝行「青野・綾中地区遺跡群の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第3号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982. 3

注3 小山雅人「青野遺跡第8次」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982. 12
小山雅人「青野西遺跡の発掘調査について」(『京都府埋蔵文化財情報』第9号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983. 9
小山雅人「青野遺跡第8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊) 1983

注4 中村孝行「青野遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
中村孝行「青野南遺跡第3次・第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第10集 綾部市教育委員会) 1983

注5 中村孝行・小山雅人「綾中廃寺第1次・第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981
中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
中村孝行「綾中廃寺第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第10集 綾部市教育委員会) 1983

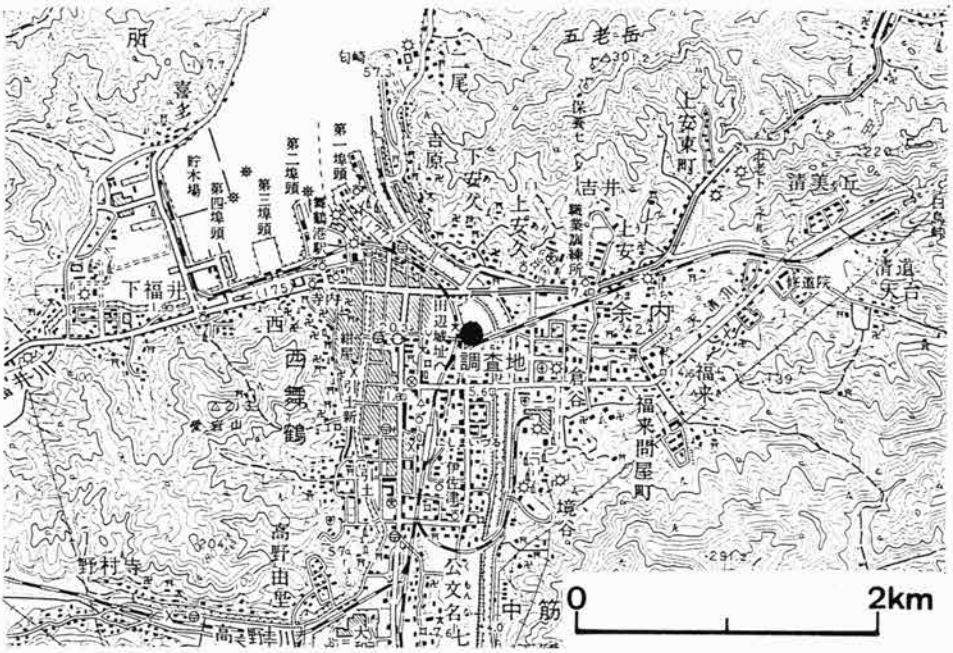
注6 綾部市史編さん委員会『綾部市史』上巻 1976

# 4. 田辺城跡第6次発掘調査概要

## 1. はじめに

田辺城(別名舞鶴城)は,安土,桃山時代に,織田信長から丹後国を給された細川藤孝(幽斎)が築城した平城である。城が完成したのは,天正10～13年(1582～1585年)頃と言われており,当時の城は,大手を南側に持ち,また西側の搦手には城下町を配していたとされる。関ケ原の合戦(慶長5年1600年)の戦功で細川氏は,豊前国に転封され,かわって京極高知が,丹後一円の城主となり,田辺城に入城する。高知の死後丹後国は三分割(田辺・宮津・峰山)され,田辺藩は加佐郡一円をその領地とすることになる。その後京極氏にかわって牧野氏が入封し,明治維新までの200余年間田辺藩の城主として領内支配を続ける。このように田辺城は,明治になり取り壊されるまでの約280年間,細川氏一京極氏一牧野氏の代々の居城として栄えるが,田辺城の存する舞鶴の地は,北に舞鶴湾,南に沼沢地が広がり,それらが自然の要害を形成するとともに,幾度かの修築,整備によって三重の堀をめぐらす城郭となったのである。

田辺城は,市街地でそのほとんどが取り壊されてしまっているが,現在までに計8回の発掘調査が実施され,本丸・二ノ丸の堀,二ノ丸侍屋敷などの遺構が検出されており,地下に




第13図　調査地位置図

埋れた田辺城の姿が徐々に復元され始めている。

今回の調査は，府立盲聾学校舞鶴分校の寄宿舎改築工事に先立って行なったものである。調査地は，舞鶴市大字南田辺小字大内口下83にあり，国鉄西舞鶴駅の北東約800 mの平地に位置する。田辺城復元図によれば，当城郭の北東隅にあたり，三ノ丸堀が推定される地であった。

現地調査は，当調査研究センター調査課主任調査員 辻本和美・同調査員 山下正が担当した。調査期間は，立会調査も含めて昭和59年10月11日～11月7日までの間行なったが，その間舞鶴市教育委員会・京都府教育委員会の諸機関の協力を得た。また府立盲聾学校舞鶴分校の方々には調査期間中を通じ多大の迷惑をおかけした。記して謝意を表したい。(注1)

## 2. 調査の概要

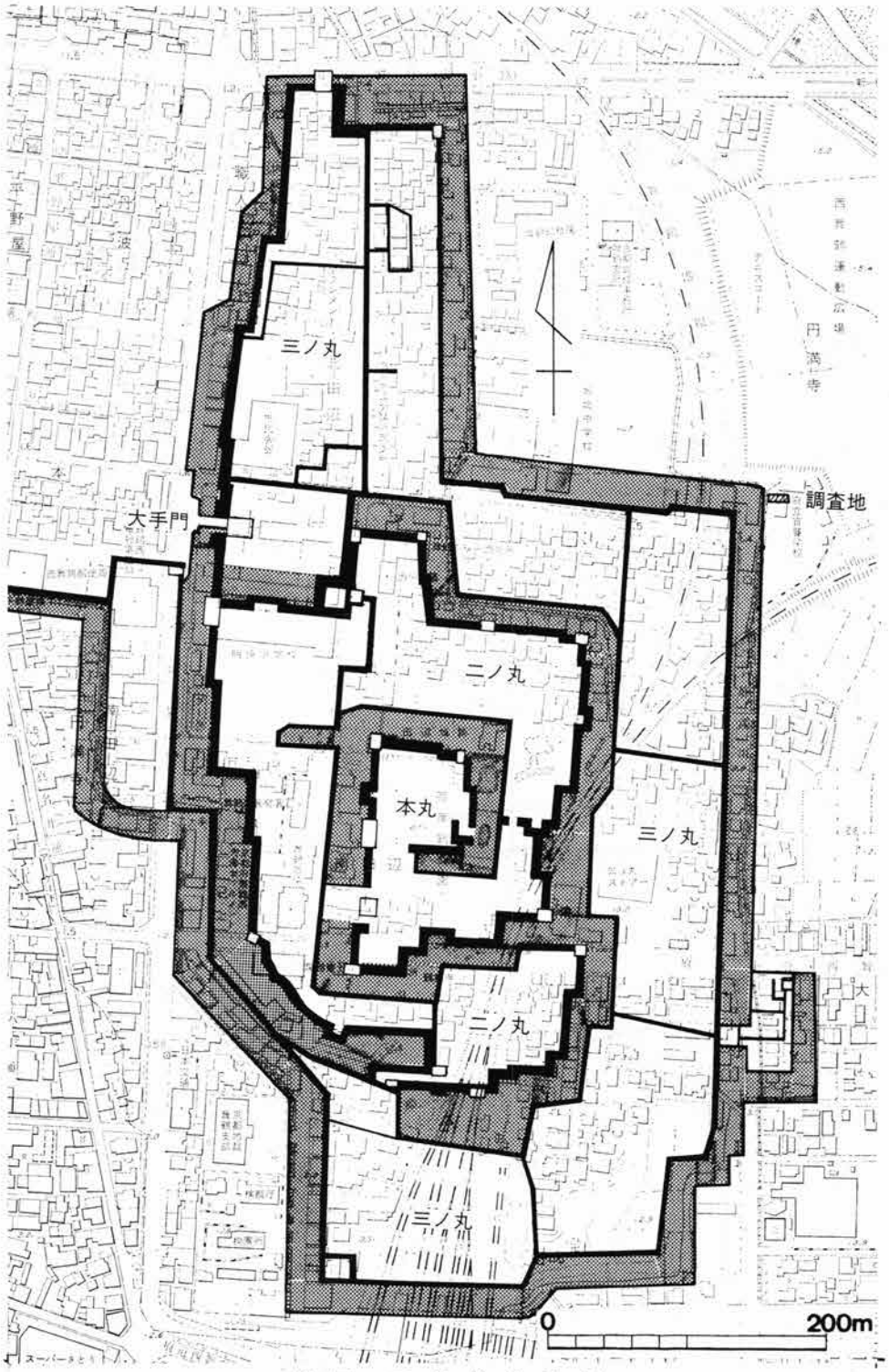
調査地の西を南北方向に流れる用水路は，田辺城復元図やこれまでの発掘調査の成果から，三ノ丸堀の名残りと推定されていた。そのため今回の調査では，この用水路にギリギリ接近させて，それに直交するトレンチ(南北 5 m×東西 12.5 m)を設定し，堀跡に関わる遺構の検出に努めた。また建物の基礎工事，浄化槽等の深掘りの部分に関しては，工事の際に立会調査を行なった。

調査は，まず重機によって造成時の盛土・旧耕作土・床土を除去した後，人力によって掘削を行なった。その結果床土直下で溝3本を検出した。溝 SD 01・SD 02 は，いずれも栗石を入れ，シダ等の植物でその上をおおう暗渠溝で，平行して走る。いずれも溝 SD 03 に流れ込むものと思われる。SD 03 は，杭や板によって護岸を行なう幅40 cmの溝である。これらの溝からは，遺物は出土していないが，近代以降の耕作に伴う溝と思われる。溝の面をとばし，さらに掘り下げたが，遺構を検出することはできなかった。遺物は，上記の溝を形成する面やその下層に，須恵器，土師器，陶磁器，漆器(椀？)，木製品，銭貨(寛永通宝)が少量あるのみである。いずれも遺構に伴うものではなく，上流から流されてきたものであろう。

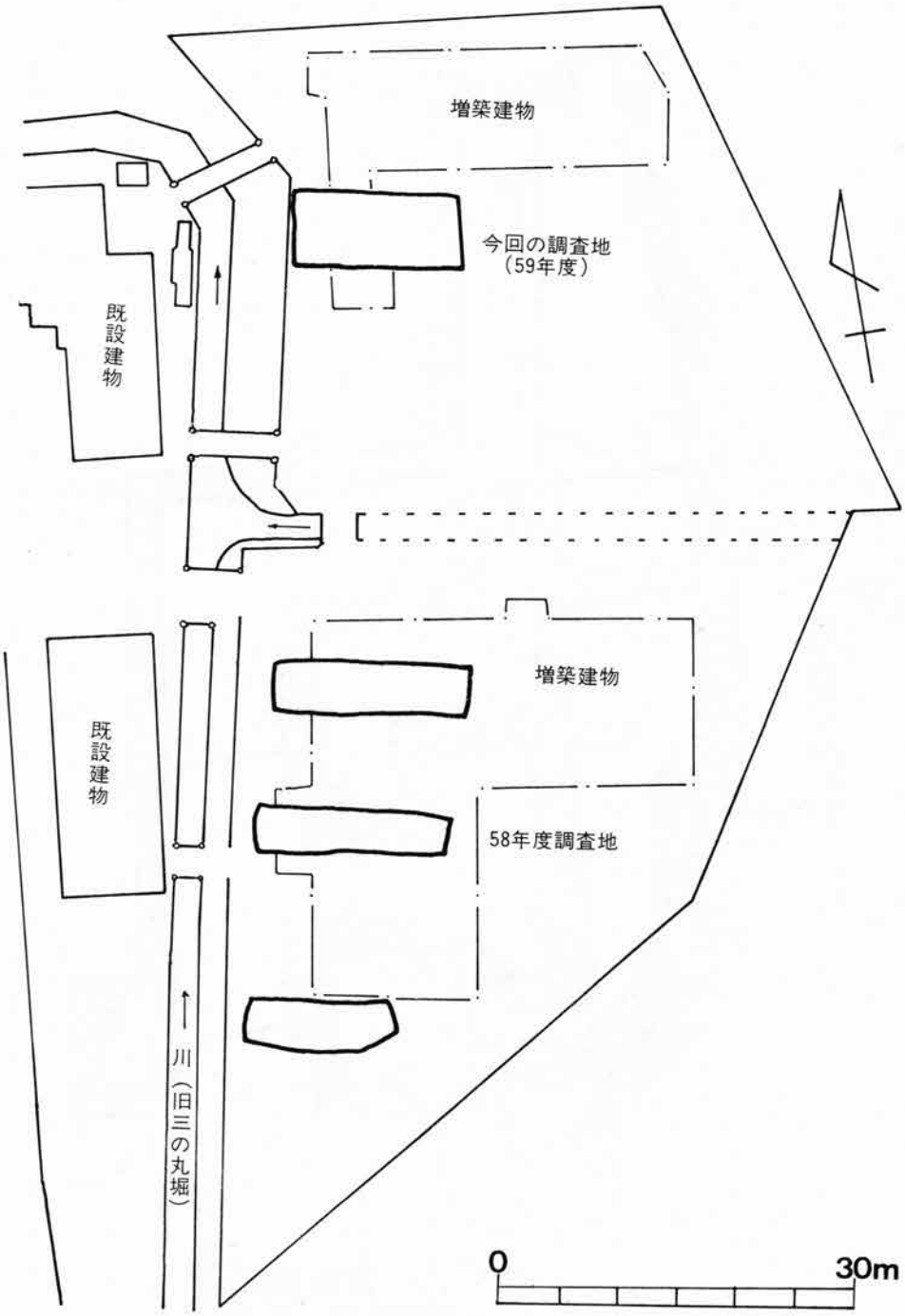
## 3. まとめ

今回の調査では，当初期待された田辺城に関わる遺構，とりわけ三ノ丸堀を検出することはできなかった。検出した溝は，すべて耕作に関わるもので，近代以降の所産であろう。一部深掘りを行なった際に観察した土層の堆積状態から考えて，溝が作られる以前の当地は，沼沢地であった可能性が指摘でき，このことは，田辺城の北東部における土地の利用状況を知る上で興味深い資料と言えよう。

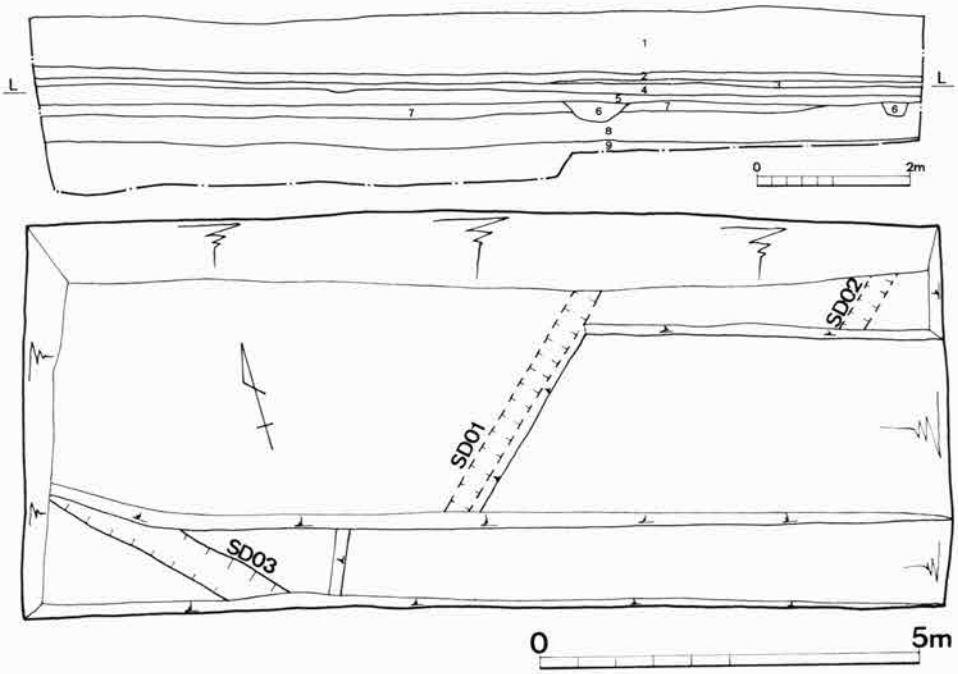
(山下　正)




第14図　田 辺 城 復 元 図




第15図　トレンチ配置図




第16図　調 査 地 平 面 図

1. 置土(学校造成時)　2. 暗灰褐色粘質土(耕作土)　3. 暗褐色粘質土(耕作土)
4. 暗茶褐色粘質土(床土)　5. 茶褐色粘質土　6. 黒褐色土 (SD 01・SD 02 の埋土)
7. 暗茶褐色シルト　8. 暗灰褐色土　9. 黒褐色砂質土 (L＝0.500 m)

注1　以下の方々には現地で作業員としてお世話になった。
木嶋亀吉・磯井　知・樋口健市・村尾明美・堀江キヨ子（敬称略・順不同）

# 5. 宮福線関係遺跡昭和59年度発掘調査概要

## はじめに

京都府の北部，日本海側に面する宮津市と内陸側の福知山市とを結ぶ新たな交通輸送機関としての鉄道建設計画は，去る昭和55年に宮津市・大江町河守区間でまず工事が完工し，開通に向け大きく前進した。

この建設工事に先立ち，昭和44年に当該路線内にかかる埋蔵文化財の分布調査が行われ，翌45年には，京都府教育委員会によりそれらの遺跡についての事前発掘調査が実施された。(注1) その後の工事計画については諸般の事情により一時中断していたが，昭和57年に至り，第三セクター方式という新たな運営組織により再開されることになった。

工事再開に伴い，再度延長計画路線内の遺跡分布調査が行われた結果，大江町河守～福知山市域間において新たに3か所の遺跡が存在することが確認された。内訳は，大江町内1か所(河守遺跡)，福知山市内2か所(石本遺跡・波江古墳群)である。

路線予定地内に含まれるこれら遺跡の取り扱いについて，工事主体者の日本鉄道建設公団大阪支社と京都府教育委員会とで協議が重ねられた。その結果，遺跡の詳しい内容等を把握するため，事前に発掘調査を実施する必要があるということで合意に達し，その実施方について当財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターに依頼された。

現地調査の実施にあたっては，昭和58年度にまず石本遺跡の試掘調査から着手することにしたが，この調査の結果，当初の予想を上回る遺構・遺物等が検出されるに至った。このため，翌59年度は，引き続き石本遺跡の残余部分の試掘調査と，試掘の結果を基にした本調査を実施し，同じく波江古墳群の3・4・5号墳について発掘調査を行った。

各遺跡の調査期間については，下記の通りである。(注2)

石本遺跡　　昭和58年3月10日～昭和59年9月30日

波江古墳群　昭和59年10月29日～昭和60年3月18日

現地調査は，調査課主任調査員辻本和美，同調査員竹原一彦が担当した。

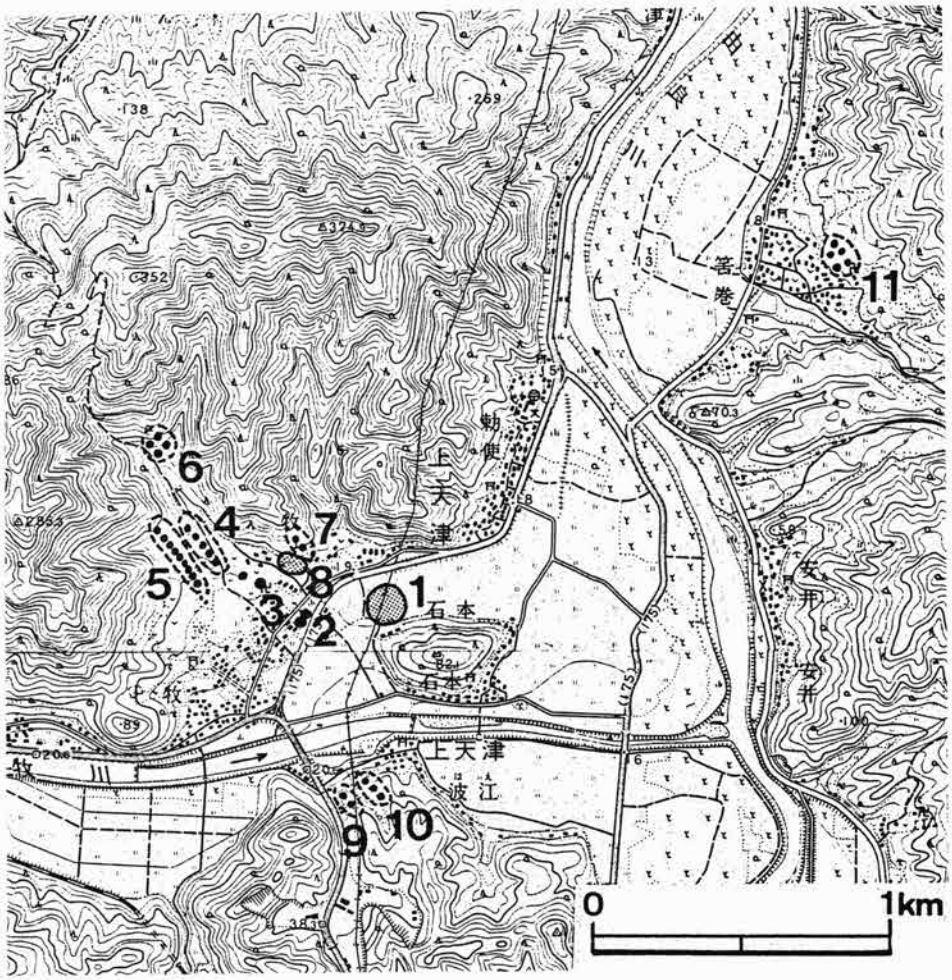
本概要報告は，(1)石本遺跡の項を辻本が，(2)波江(3・4・5号墳)古墳群の項を竹原が分担して執筆した。

調査にあたっては，日本鉄道建設公団大阪支社，福知山市教育委員会・同市史編さん室・同企画調整室・同土地開発公社・同文化資料館・福知山史談会，中川淳美氏・衣川栄一氏等の諸機関および諸氏から多大の協力・助言を得た。また，牧自治会長高橋良男氏をはじめ，

各地区の区長方には調査全般にわたって格別の御高配を得た。厚く謝意を表したい。

なお，現地の発掘作業については，各大学の学生諸氏，および牧・石本・波江の各地区の有志の方々の参加協力があった(注3)。酷寒酷暑の下，困難な作業に従事していただいた労苦に対し，末筆ながら厚くお礼申し上げたい。

（辻本和美）




第17図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

1. 石本遺跡　2. 牧正一古墳　3. 弁財古墳　4. 道勘山古墳群　5. 樋ノ口古墳群　6. 平石古墳群　7. 岩田古墳群　8. 薬師遺跡　9・10. 波江古墳群　11. 狐塔古墳群

## (1) 石　本　遺　跡

### 1. 位置と歴史的環境

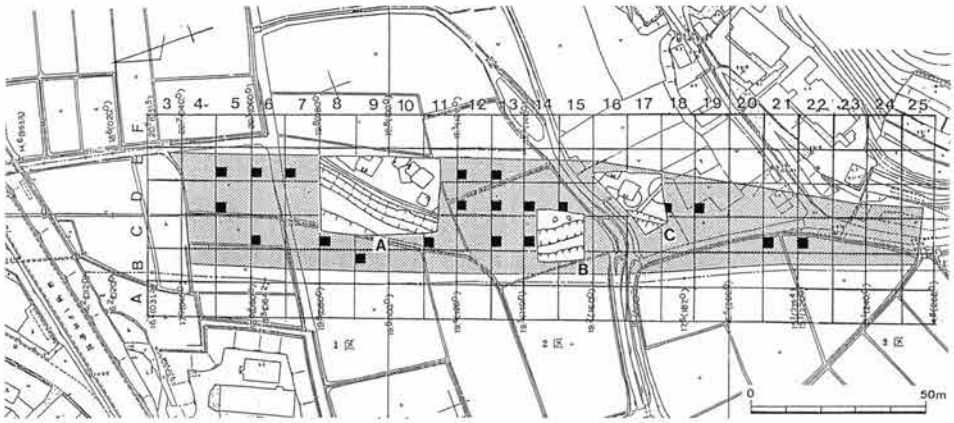
石本遺跡は，福知山市大字牧および石本の両地区にまたがって所在する。

当地域は，府北部第一の河川である由良川と，その一支流である牧川との合流部に位置しており，また，由良川中流域を構成する福知山盆地と狭隘な河川平野の連続する下流域との変換点に当る。当地は，その地形からもうかがえるように，現在に至るまで幾度となく洪水の被害を受けたことが知られているが，また一方では，由良川本流や各支流の形成した谷筋を利用した水陸の交通路によって周辺各地と結ばれ，特に兵庫県の但馬や日本海側の若狭湾方面への交通の要衝として重要な位置を占めている。(注4)

周辺に分布する遺跡の中で，これまで著名なものとしては牧集落背後の丘陵上に分布する牧古墳群(注5)が知られている。総数30基前後からなる古墳時代後期の群集墳で，5ないし6の支群で構成され，群中最高所に位置する不明確な一群を除いて，主に横穴式石室を内部主体とする。これまで偶然の機会に行われた調査による資料から6世紀後半から7世紀前半にわたって築造されたものと想定されているが，不明瞭な部分が多い。群中の1基，牧正一古墳は，大正14年に古墳の北側を通る道路の拡幅工事によって2つの横穴式石室の奥壁部が露出したため若干の調査が行われ，その結果，墳丘東側に位置する石室内から馬具類や須恵器装飾付壺など豊富な副葬品の一部が出土した。また当古墳は変形が著しいが，外形の特徴から全長35m程度の双円墳または，前方後円墳の可能性が考えられており，その立地上からも，今回調査を行った石本遺跡と密接な関係が想定される。同じく群中の弁財1号墳からは，四神四獣八鈴鏡や金銅製馬具類等が，また群中最大規模の石室を持つ道勘山1号墳からは，金銅装大刀2振の出土が伝えられるなど，当古墳成立の要因等については，牧川周辺という限られた地域の問題としてではなく，より広い地域との交渉を考慮に入れたうえで解明されるべきであろう。

このほか，牧古墳群が立地する丘陵の下方に広がる段丘状の平坦地には，多量の土錘等が出土する薬師遺跡(注6)をはじめ，弥生土器，土師器片の散布地が知られているが，いずれも未調査であり，詳しい内容等は明らかでない。

当地域は，前面を上述の両河川が画し，背後に丘陵を負うというように地理的にも一つのまとまりを持つ単元を構成しており，遺跡相互間の有機的な関連を考察する上で恰好のフィールドとなり得るものと思われる。




第18図　調 査 地 位 置 図

## 2. 調 査 の 概 要

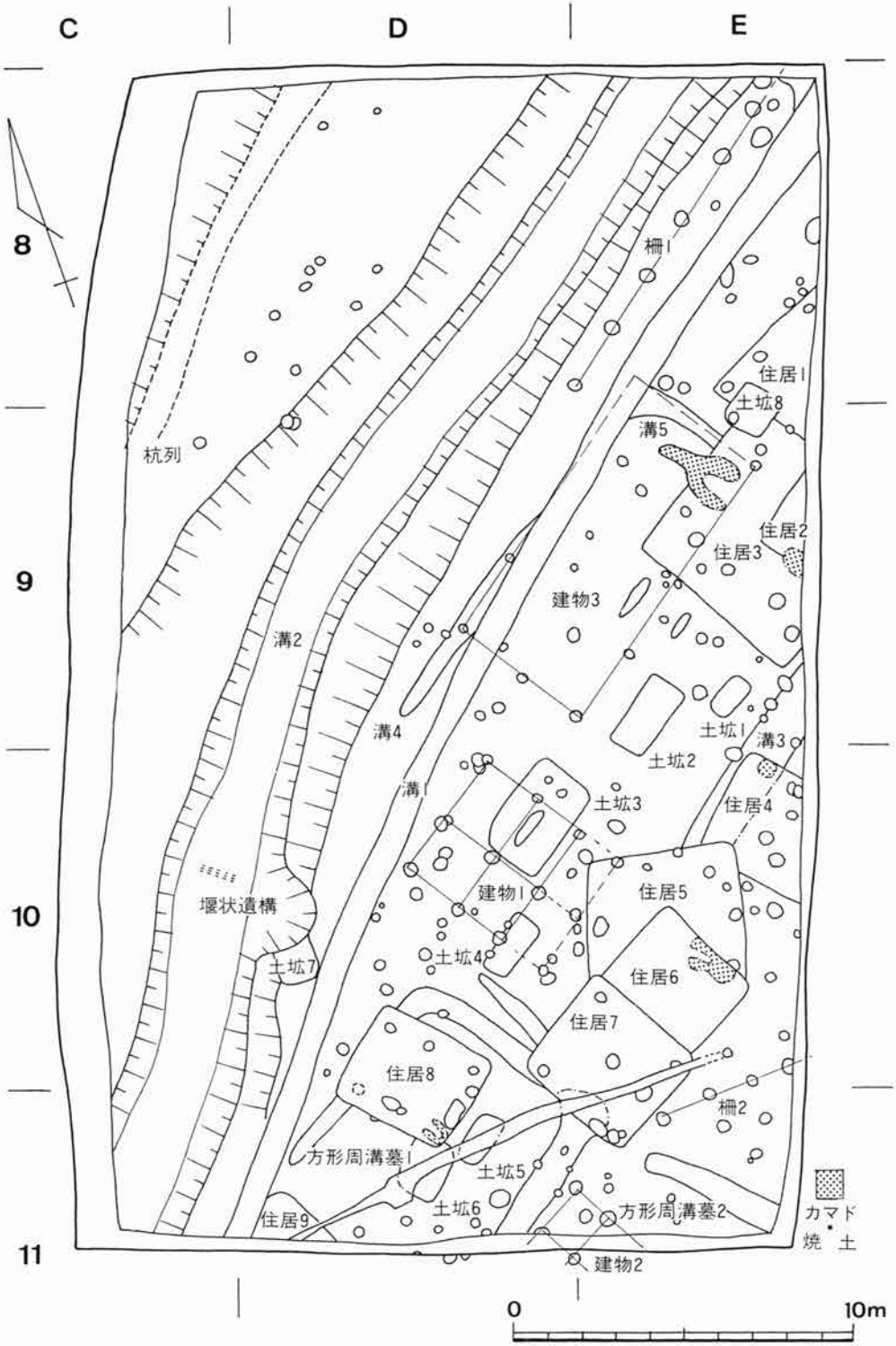
先に述べたように，当遺跡は宮福線鉄道建設に伴う予定路線内の分布調査によってはじめて確認された遺跡である。まず，延長約220m・最大幅40mの路線予定地を対象に試掘調査を実施した。

調査の実施に際しては，鉄道建設用の路線のセンター杭を利用し調査地全域を10mの方眼に区画したのち，南北軸を数字，東西軸をアルファベットで割り付け，この両方の記号の組み合せによって調査地点を呼称するという方法をとった。また，実際の掘削に際しては，この10m方眼の基本区画毎に一辺３m四方の試掘グリッドを最低１か所ずつ開けていくことにした。なお，昭和58年度は府北部の記録的な豪雪のため，現地着手が大幅に遅れ，翌年度に一部の試掘調査を持ち越すことになった。試掘調査で開掘したグリッド数は，合計35か所である。

この試掘調査の結果，北からA・B・Cと呼ぶ各地区を中心にして，現水田面下平均70～80 cm の部分から遺構と思われる土色の変化および遺物等を検出した。基本的な層序は，上から耕作土・床土・黒褐色粘質土層(遺物包含)・暗褐色粘質土層(遺構面)の順である。

また，試掘調査の結果，地区割りのBラインより以西および６ラインより以北については，水田床土直下で青灰色粘質または灰褐色の砂礫層が確認され，池あるいは沼沢状の低湿地が広がっていたことが確認された。この状況は，水田畦畔や現地形上に段差として残る牧川旧河道と推測される範囲に一致しており，今回の調査地は，南東に位置する地光寺山から舌状に張り出す自然堤防状微高地の先端部分に位置することが明らかになった。

当遺跡の立地する地点の標高は，約13.7mを測る。なお，今回の調査面積は約1,600m$^2$である。




第19図　A 地 区 遺 構 配 置 図

## 3. 検 出 遺 構

A・B・Cの各調査区で検出された遺構群は，大きくみて3時期に分類できる。第1期は弥生時代，第2期は古墳時代後期，第3期は奈良時代及びそれ以降の時代である。

今回の調査地からは，縄文時代後期に比定される土器片が数点出土しているが，それらに伴う遺構等は確認されていない。由良川下流域の縄文時代の遺跡の立地の状況からみて，当遺跡周辺部に同時代遺跡の存在する可能性が大きい。

各検出遺構の詳細については後日に期すことにし，ここでは各時期ごとに概略を記しておきたい。

〔第1期〕

弥生時代中期を中心とするが，同後期末葉～古墳時代初頭の時期を一部含んでいる。

当期に所属する遺構としては，A・B両地区の方形周溝墓状遺構・大型土坑(墓)群および溝状遺構等がある。方形周溝墓は，溝一辺約7mの規模を有し，平面形態の明らかなA地区の例では隣接する他の周溝墓と溝の一辺を共有する。墓域中央部分に埋葬のための土坑を穿つが，棺の痕跡等は検出できなかった。B地区の周溝墓では壺形土器の供献がみられた。A地区中央部やや東寄りに，長軸を北東～南西方向に置く平面隅丸方形土坑が4基並ぶ。その内最大の土坑3は，長辺約3.4m・短辺1.7mを測る。棺等の痕跡は不明であるが，土坑埋土から弥生土器の小片が出土した。また，この土坑群を囲むように，北，西および東辺から断面U字形を呈する幅60～150cmの溝が部分的に確認されている。後世の遺構と重複しており不明な点は否めないが，先述した土坑群を画する墓域の溝としての性格を持つものと思われる。以上の遺構等については，伴出する土器から畿内第Ⅲ・Ⅳ様式に併行することが考えられる。

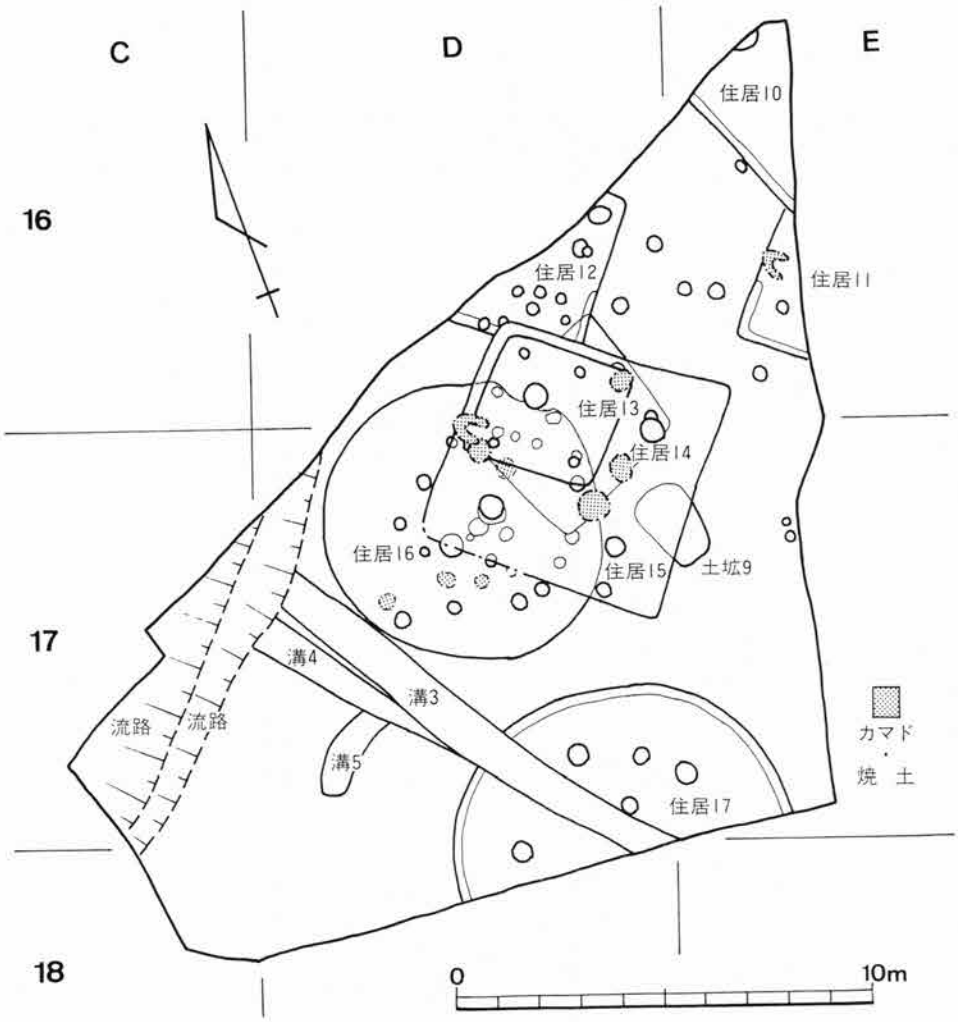
墓域を呈するA・B両区に対し，C地区から2基の円形竪穴式住居が検出された。ただし，今回確認された住居跡は，床面から出土した甕形土器の口縁部に擬凹線を施すものがみられ，その所属時期は弥生時代末葉(庄内期)から古墳時代初頭と考えられる。16号住居跡は，直径約7m，壁残存高30cmを測り，床面中央部に炉を付設する。なお，当住居跡からノミまたはヤリガンナと思われる棒状の鉄製品が3点出土している。

〔第2期〕

調査地のほぼ全域にわたって当期の遺構・遺物を検出しており，今回調査の主体をなす。

当時期の遺構には，方形竪穴式住居(16基以上)，溝(4条)および土坑・多数のピット群があり，古墳時代後期の集落跡を構成する。

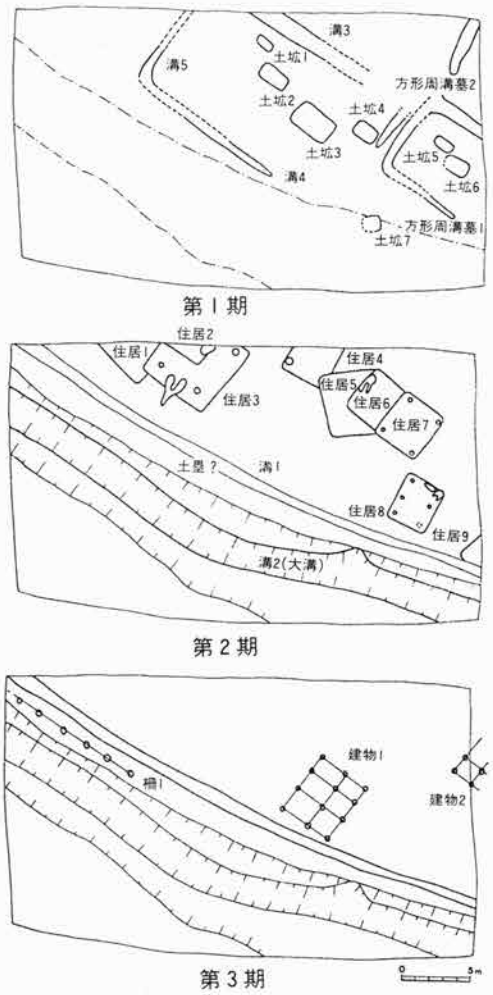
住居跡は，最も規模の大きいもの(15号住居跡)で一辺約5.6m，小さなもの(8号住居跡)で約3.1mを測る。壁一辺の中央に馬蹄形の作り付けカマドを付設するものと，コーナー部




第20図　C地区遺構配置図

に置くものがみられる。また他の施設として，張り床・貯蔵穴・炉・置石等をもつ。建て替えには，少しずつ位置をずらして一定方向に移動するA地区の一群(4～7号住居跡)と，同じ場所で規模の拡充をはかっていくC地区の一群(12～15号住居跡)の2つのタイプが認められる。住居跡から出土する遺物は比較的少ないが，その中で特記されるものとして，3号住居跡の平根式鉄鏃，6号住居跡の匙形土製品と鉢形土器，9号住居跡の滑石製臼玉等があげられる。いずれも住居内における祭祀にかかわるものであろう。

A地区では，これらの住居跡群の西側に大小2条の溝がある。溝は，微高地の縁辺に沿って，約3mの間隔を保ちながら南西から北東の方向に向って外側に緩やかな弧を描くように走る。溝1は，最大幅3m・深さ1.2mで断面逆台形状，溝2は，幅0.8m・深さ0.6mのU




第21図　A地区遺構変遷図

字形断面を呈する。2つの溝，特に溝1からは，コンテナ100箱以上にのぼる土器片と多数の木製品等が出土した。溝1の中央南寄りでは，板材や杭，人頭大の石材を組み合せた井堰状の遺構の一部が残存する。なお，溝内に多数転落する石塊の状態から，この2つの溝の間隙部に土塁状の施設が付設されていた可能性がある。これらの溝は，C地区で検出した溝3・4とともに古墳時代集落の成立に伴って開削されたもので，村落経営に不可欠のさまざまな役割を果していたものと想定される。しかしながら，次の第3期には，ほとんど埋没しており，その機能を消失する。この他，当時期に属する遺構としては，移動式カマド破片を出土するC地区の土坑や，多数の柱穴状ピットなどがある。

当時期の集落跡は，先に述べたように，背後の丘陵上に分布する牧古墳群の形成時期とほぼ重複することがうかがわれ，村落とその墳墓地という関係が想定される。

〔第3期〕

当時期は，第2期の竪穴式住居消失以降に比定され，今回検出遺構としては，多数の柱穴状ピットが挙げられる。調査地の全域にみられるが，そのうち建物としてまとめることができるのは，現在のところA地区の2棟である。建物1は，桁行3間，梁間2間の総柱の掘立柱建物で，その北側にある建物2も，ほぼ同様なものであろう。建物以外には，柵列状に並ぶものもあるが明らかでない。前代に開削された大溝(溝2)は，大半が埋没しながらも，当時期まで凹地状の地形として残っていたものと考えられる。溝最上層の埋土から瓦器片が出土しているので，溝が完全に埋没するのは中世頃であろう。

当時期は全体にみて，ピット群等の検出遺構の多さに比べ，それらに伴う出土遺物は極め

て少なく，遺構相互の関連等について把握することは難しい。

第3期以降のものとしては，平安時代の掘立柱建物(建物3)，中世溝，中・近世の杭列等の水路護岸施設がみられる。

## 4. 出 土 遺 物

調査で出土した遺物は，土器類だけで整理用コンテナで約150箱に達し，他に木器類・石製品・鉄製品・自然遺物等，多種多量にのぼる。特に，木製品はこれまで由良川流域部では出土例が少なく，また調査例の比較的少ない古墳時代後期集落に伴う点は重要な意義をもち，今回調査の最大の成果である。出土遺物については，現在整理中であり，ここでは簡単に紹介するにとどめておきたい。

土器類は，縄文時代後期から中世に至る各時期のものが含まれるが，その中でも古墳時代後期に属するものが圧倒的に多く，そのほとんどがA地区大溝埋土出土のもので占められる。

大溝出土の土器類は，須恵器・土師器で他に若干の弥生土器片を含む。須恵器には，杯・高杯類のほか，甕・壺・提瓶・横瓶・大小の甕類まで豊富な器種がそろっており，総数300点以上に達する。土師器は，甕・椀類が多いが，甑・移動式カマド(韓竈)等の点数も目立つ。須恵器・土師器の出土比率は，やや土師器が多いと思えるものの伯仲しており，今後集落内での土器のあり方について興味深い問題を提示している。

木器類は，すべてA地区大溝から出土した。総数182点に及ぶ。用途別に列記すると，農具(鋤・田下駄・横槌・竪杵・木錘)，工具(柄)，武器(弓筈)，馬具(鞍)，服飾具(横櫛・下駄)，祭祀具(刀子形・船形・二叉状木器)，火鑽臼などがあり，他に建築材の一部や杭，組合部材の一部など用途が特定できないものも含まれる。この内，鞍は破損品であるが，全面に黒漆を塗布しており，出土品としては類例の少いものである。

上記以外の遺物としては，鉄製品(U字形刃先・鎌・平根式鏃)，石製品(砥石・滑石製紡錘車・管玉・臼玉・舌等)，土製品(椀，匙形の手捏土器・土玉・紡錘車・土錘等)，ガラス製小玉，鹿角製彫骨器等が主要なものである。このほか，自然遺物関係のものとして，ウマ・ウシ・鹿・イノシシ等の歯牙・骨角等の動物遺存体や，桃核等の果実の種子が含まれるが，これらについては，すべて木器類と同様，A地区の大溝より出土したものである。

## 5. ま と め

今回の調査は，路線内という限られた部分にとどまったが，予想を越える多くの成果を得た。今回ふれることのできなかった各遺構・遺物等の詳細については，現在進みつつある整

理作業の結果をまって，改めて報告することとして，ここでは，今回調査の簡単なまとめと今後の課題等について箇条書で要点を記しておきたい。

1) 前述したように，今回の主要な検出遺構はおよそ3時期に分類することができ，それぞれ当遺跡の変遷上での大きな画期となる。

2) 第1期は，A・Bの両地区では墓域，C地区では居住区を構成する。しかし，両者間には伴出土器等により時間的な差が認められており，各々が，集落全体の中でどのような位置を占めていたのかは，今回の調査範囲の中では明らかにすることはできなかった。由良川下流域では，舞鶴市志高遺跡において多数の方形周溝墓が調査されている。今回の検出例も当地域における弥生時代の墓制を考えるうえに貴重な資料となろう。

3) 古墳時代後期の集落跡を構成する第2期については，遺構・遺物の密度が高く，当遺跡が最も盛んになる時期である。当集落の存続時期は，住居跡群の西辺を画す大溝から出土した須恵器の年代から，6世紀中葉～7世紀前半代に置くことができるが，土器型式の推移からみると，6世紀後半代が中心となる。同時代の集落研究は，古墳等に比べ，あまり行われておらず不明な部分が多い。今回調査のような，器種構成の豊富な土器類や祭祀遺物，多量の木製品，有機質遺存体などの遺例は，当地域における古墳時代集落の具体的な姿を知るうえに恰好の資料を提供するものと思われる。

4) 第2期以降の当遺跡の様相については，現段階ではあまり明らかではない。竪穴式住居から掘立柱建物への移行の時期，建物のもつ性格等，今後解明すべき点は多い。

5) 今回のような低湿地における発掘調査については，遺跡の立地や周辺の自然環境の変遷，動・植物遺体の遺存の可能性を含め，自然科学的な研究方法の必要性を改めて痛感した。今後の整理作業にあたっても，各関連分野と連携を保ちながら進めて行きたい。

（辻本和美）

## (2) 波 江 古 墳 群 (3・4・5号墳)

### 1. 遺 跡 の 立 地

波江古墳群は，由良川と牧川の合流部にほど近い低位丘陵上にある。調査地は，牧川右岸にあたり，姫髪山より西北方向に延びる山地の先端を占める。波江集落背後では標高約60m前後のなだらかな丘陵をもつ。古墳は北方に向けて舌状に張り出したいくつかの狭長な丘陵上に造られている。国道9号線牧川橋南詰東側の丘陵先端部に波江1号墳・2号墳が存在し，東隣の丘陵上に波江3号墳～5号墳が連続して存在している。今回は3～5号墳を対象として発掘調査を実施した。

波江古墳群の存在する丘陵の牧川をはさむ対岸部には，横穴式石室墳からなる30基前後の牧古墳群が存在する。それらの古墳は牧集落内および背後の丘陵部に存在し，石室構造・出土遺物の内容等からみて，当地域の首長墳群と推察される。この牧古墳群の形成時期は古墳時代後期とみられており，ほぼ同一時期と判断される波江古墳群とどのような関係をもっていたのか興味が持たれる。

### 2. 調 査 経 過

波江3号墳～5号墳は，狭長な尾根上にある。古墳は，尾根の先端部に近い標高約30～40m付近に位置している。分布調査の段階では古墳とみられるテラスが3か所確認されていたが，樹木伐採後の地形測量の結果，テラスは4か所存在することが判明した。丘陵部の地形測量の後，4か所のテラスを縦断する幅1mのトレンチを尾根の頂部に設定し，昭和59年11月6日から掘り下げを開始した。地表下約20～30cmで地山(黄色・暗褐色の岩礫層)に達した。各テラス部分では埋葬主体部とみられる土坑と溝の一部を検出したことから，各遺構の全容をつかむため11月7日から尾根の頂部全域の掘り下げを開始した。

尾根頂部の表土を除去した結果，尾根上の4か所のテラス部では埋葬主体部とみられる土坑を確認した。4か所のテラス部分のうち3か所が古墳と判明し，残り1か所のテラスは1基の古墳に付属する小さなテラスであることが確認できた。調査地西隣の丘陵上には波江1号墳・2号墳が存在することから，今回確認した古墳は丘陵先端近くの古墳より3号墳・4号墳・5号墳と命名した。

3号墳は，墳丘の東南部に溝をもち，埋葬主体部と土坑それぞれ1基，さらに墳丘東側斜面から埋葬主体部1基を検出した。

4号墳は，墳丘の東南部に溝をもち，埋葬主体部3基・中世墓1基，土坑1基を検出した。

墳丘の西北斜面部分に小テラスを設け，テラス部分で埋葬主体部１基を検出した。

５号墳は，墳丘の西北部に溝をもち，埋葬主体部２基，土坑１基を検出した。

３月14日に関係者等現地調査説明会，３月18日に航空機による写真撮影を実施した，同日現地調査を終了した。

## 3. 検　出　遺　構

丘陵尾根上に存在する３基の古墳から，古墳に伴う埋葬主体部および土坑・墳丘周辺埋葬主体部・丘陵切断の溝・中世墓等の各遺構を検出した。

①　波江３号墳（第23図）

狭長な尾根の先端部に近い，標高32m付近に位置する古墳である。調査前の地形測量段階では，顕著な墳丘は認められなかった。

この３号墳は，西北方向に下降する尾根の基部側(東南方向)を削り，さらに溝を設けて墳丘部分を削り出し，厚さ約30cm程度の盛土を行って墳丘を形成していた。墳丘の北および南側は急な下り傾斜の自然地形を残し，西北部墳丘盛土は下方に流失していた。現在，３号墳の墳丘は東北から西南方向に長い楕円形に近い形状を呈している。墳丘の成形は地形的制約を受けたとみられ，古墳築造当初から墳丘の形状は楕円形に近い状態であったと推察する。現在の墳丘規模は長軸方向約８m・短軸方向約4.8m・墳丘高約0.4mを測る。

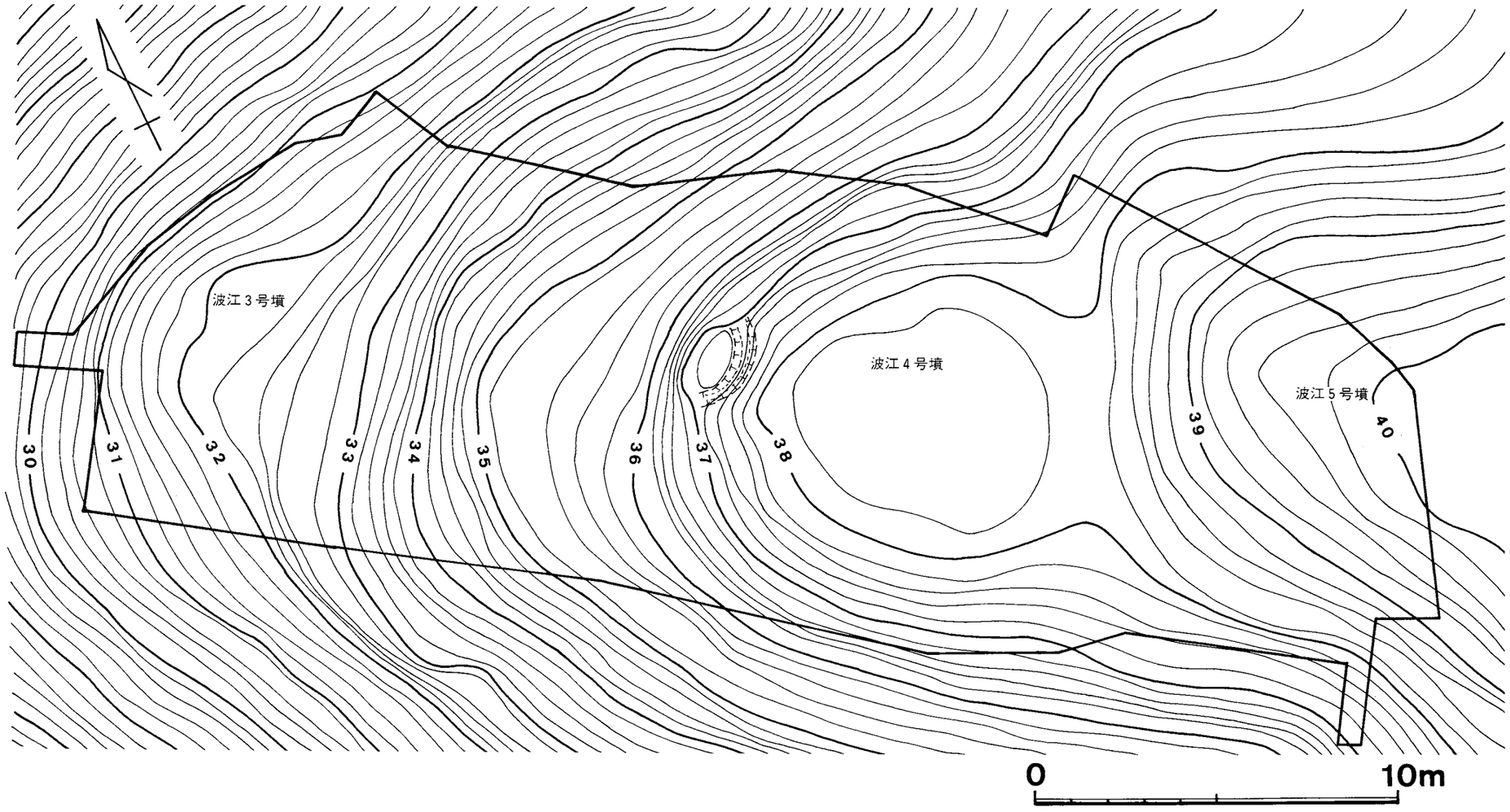
３号墳の墳丘の東南部には幅約1.3m・深さ約20cmの比較的浅い溝をもつ。溝は地山を掘り込み，緩やかな円弧を描いて尾根頂部を横断している。溝中には，３号墳に伴うとみられる須恵器の有蓋高杯と蓋が認められた。

３号墳の墳丘部分には埋葬主体部１基・供献用とみられる土坑１基が存在した。

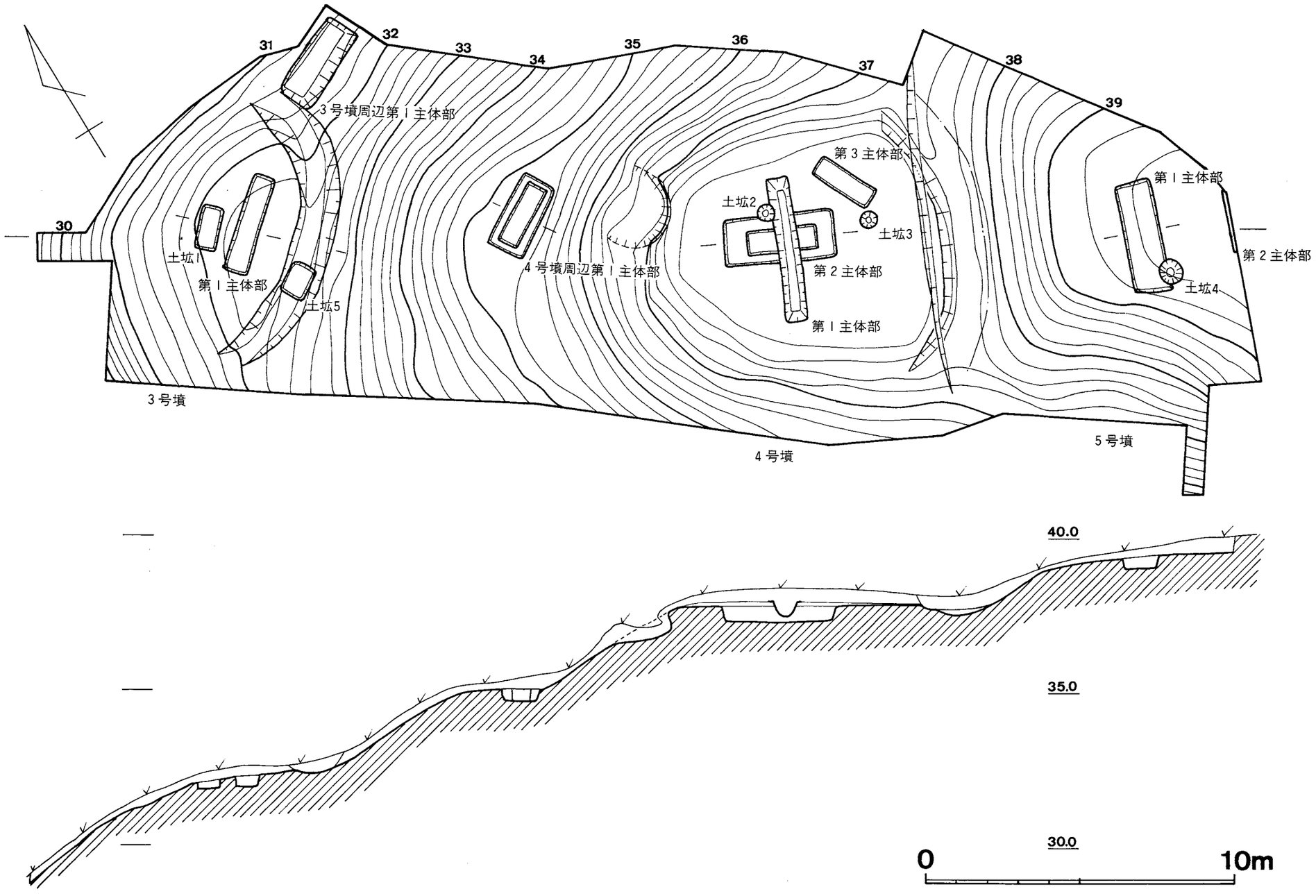
第１主体部（第24図１）　墳丘頂部の中央やや東南寄りで検出した。墓坑は盛土部分から地山面に達する掘り込みをもち，長さ約3.25m・幅約0.8m・深さ約30cmの規模で，平面形は長方形を呈する。墓坑底は東北方向に下り傾斜をもつ。墓坑内に副葬品等の遺物は認められない。木棺直葬とみられる。

土坑１（第24図２）　墳丘頂部の中央西南寄りで第１主体部に並列して存在する。土坑の規模は長さ約1.45m・幅約0.75m・深さ約50cmであり，平面形は長方形を呈する。土坑内から須恵器(壺・提瓶・横瓶)・土師器(椀)が出土した。このうち土師器椀は須恵器壺の内部に納められていた形跡が認められた。この土坑は埋葬主体部とは考えられず，第１主体部に付随する供献物埋納用土坑と考えられる。

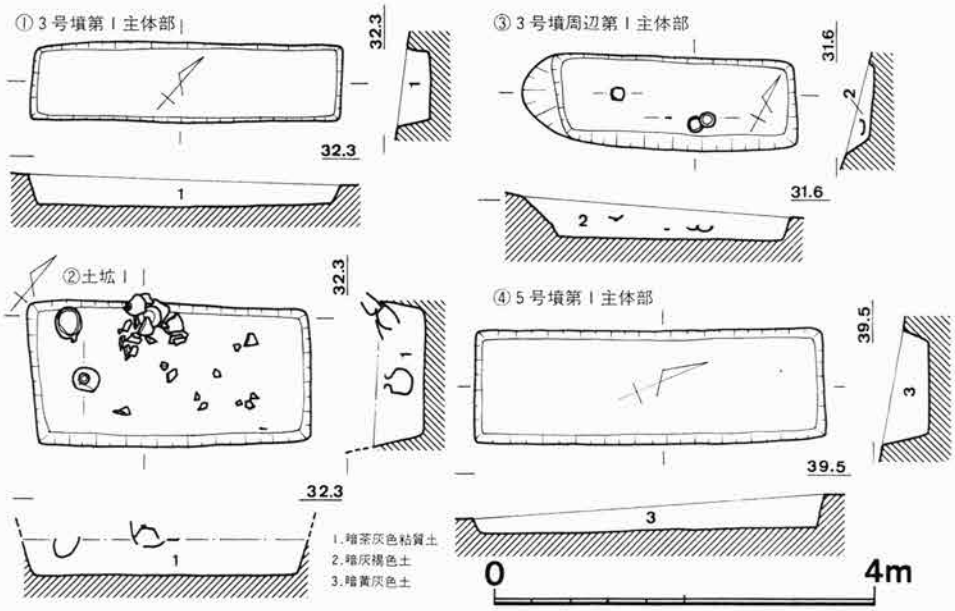
３号墳周辺第１主体部（第24図３）　３号墳の溝外部の東側，尾根の斜面部で検出した埋




第 22 図　地　形　測　量　図（調査前）




第23図　地　形　測　量　図（調査後）




第24図　波江3号墳・5号墳埋葬主体部実測図

葬主体部である。3号墳の築造に伴ってできた小規模なテラス部分に主体部は設けられていた。墓坑は長方形を呈し，長さ約2.5m・上部の幅約1m・墓坑底部幅約0.8m・深さ約0.2mの規模をもつ。埋葬形態は木棺直葬である。墓坑底の中央やや東南隅で須恵器杯身2点(第27図13・14)・鉄製刀子(第28図2)が出土したほか，墓坑西南部から須恵器有蓋高杯蓋(第27図12)が出土した。この有蓋高杯蓋は流れ込みによるものと判断される。

土坑5（第26図）　3号墳の東南側の溝部分で検出した土坑である。この土坑は3号墳の溝がほぼ埋まった段階で，その上面より坑を掘っている。土坑は方形を呈し，一辺約1.4m・深さ約30cmの規模をもつ。坑壁はほぼ垂直に近い状態を示し，坑底も水平に近い。土坑の内壁の一部は火を受けた痕跡があり，部分的に暗褐色に変色していた。土坑内には3号墳に伴うとみられる須恵器片が若干出土したほかには，何ら遺物の出土は認められない。埋土には若干の炭と灰がみられた。

② 波江4号墳（第23図）

調査地の中央部，3号墳と5号墳の中間，標高約37m付近にある。東南方向から緩い傾斜で下がってきた尾根は，4号墳の墳丘を最後に西北方向(3号墳)に急角度をもって下る。

墳丘は尾根を利用して築かれており，墳丘の東側は尾根上を横断する溝により画されている。溝は幅約1.3m・深さ約20cmであるが，溝上部は5号墳に伴う溝により切られている。もともと4号墳築造時点では1m前後の深さをもつ溝であったとみられる。溝の両端部は西

方へやや内湾し，全体にゆるやかな弧を描いている。4号墳の墳丘はほぼ方形に近く，東西約8.5m・南北約9.5mの規模をもつ。

4号墳の墳丘部分には古墳時代の埋葬主体部3基と，鎌倉時代の火葬墓とみられる土坑1基の他，もう1基の土坑が存在した。

第1主体部（第25図）　4号墳の墳丘上中央部で検出した埋葬主体部である。主体部は全長約4.9m・幅約0.9mの規模をもつ。墓坑は約40cmの深さをもち，断面形はU字形を呈する。主体部は尾根の主軸に直交する方向に設けられ，直下に存在する第2主体部の上部を切っている。出土遺物は認められない。主体部を検出した段階で精査を行ったが，掘形内の埋土は暗灰褐色土であり，顕著な木棺の痕跡は認められなかった。

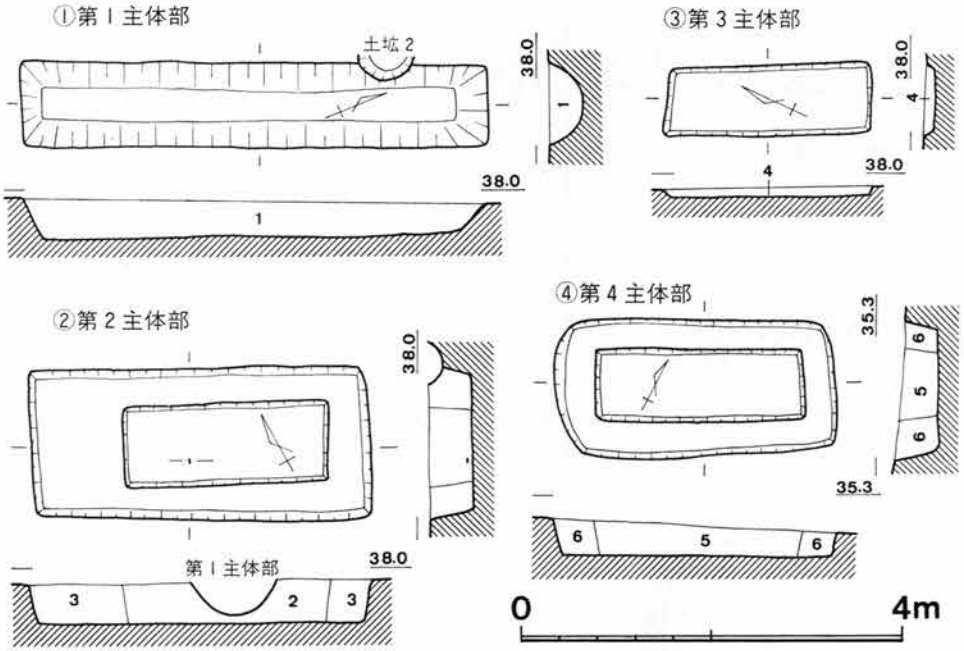
第2主体部（第25図）　4号墳の墳丘上中央部で検出した埋葬主体部である。第2主体部の主軸は尾根と平行するが，第1主体部の主軸とは直交する。主体部のほぼ中央部分の上部は第1主体部により一部が切られている。

主体部は長方形を呈し，全長約3.6m・幅約1.6m・深さ約40cmの規模をもつ。掘形内の中央部で，若干東に片寄った地点で木棺の痕跡を認めた。木棺は全長約2.15m・幅約0.75mの規模をもつ，墓坑は盛土部分より掘り込まれ，墓坑東部は地山の礫層を掘り込んでいる。墓坑底はほぼ水平である。

木棺主体部の中より鉄鏃1点が出土した(第28図3)。鉄鏃は棺部分の中央やや西側，棺底部より出土した。鉄鏃の他に出土遺物は認められない。

第3主体部（第25図）　4号墳の墳丘上東端付近で検出した埋葬主体部である。今回検出した主体部の中で最も小規模であり，全長約2.2m・幅約0.75m・深さ約10cmの規模をもつ。墓坑は墳丘盛土部分より掘り込まれていたとみられるが，地山部分の精査により確認した主体部である。主体部は長方形を呈し，墓坑底は水平を保っている。遺物の出土は認められない。

土坑2（第26図）　4号墳の墳丘上，中央部のやや北側地点で検出した集石をもつ土坑である。土坑は墳丘の盛土上面から地山を掘り込み，下部に存在した第1主体部の西壁の一部を切っている。土坑掘形の平面形は円形を呈し，上部直径約85cm・下部直径約50cm・深さ約50cmの規模をもつ。土坑の内部には中央部分に須恵器の甕(第29図2)を置き，上部には須恵器の片口鉢(第29図1)を用いて蓋としていた。土坑と埋納した須恵器の上部には，拳大～人頭大の河原石が積み上げられていた。積石は，最下部の石を蓋の周囲に設置し，土坑を覆うように直径約1m前後の範囲に認められた。須恵器甕の内部には土師器皿の小破片が納められていたほかには，何ら遺物等の存在は認められなかった。この遺構は，立地および




1.暗茶灰色粘質土　3.暗褐色土　5.暗灰褐色土
2.暗茶褐色土　4.暗黄褐色粘質土　6.暗灰褐色粘性土

第25図　波江４号墳埋葬主体部実測図

検出状況等から火葬墓と判断される。火葬骨の出土はみられないが，土坑内に納められていた須恵器の甕と鉢は，蔵骨器とみられる。

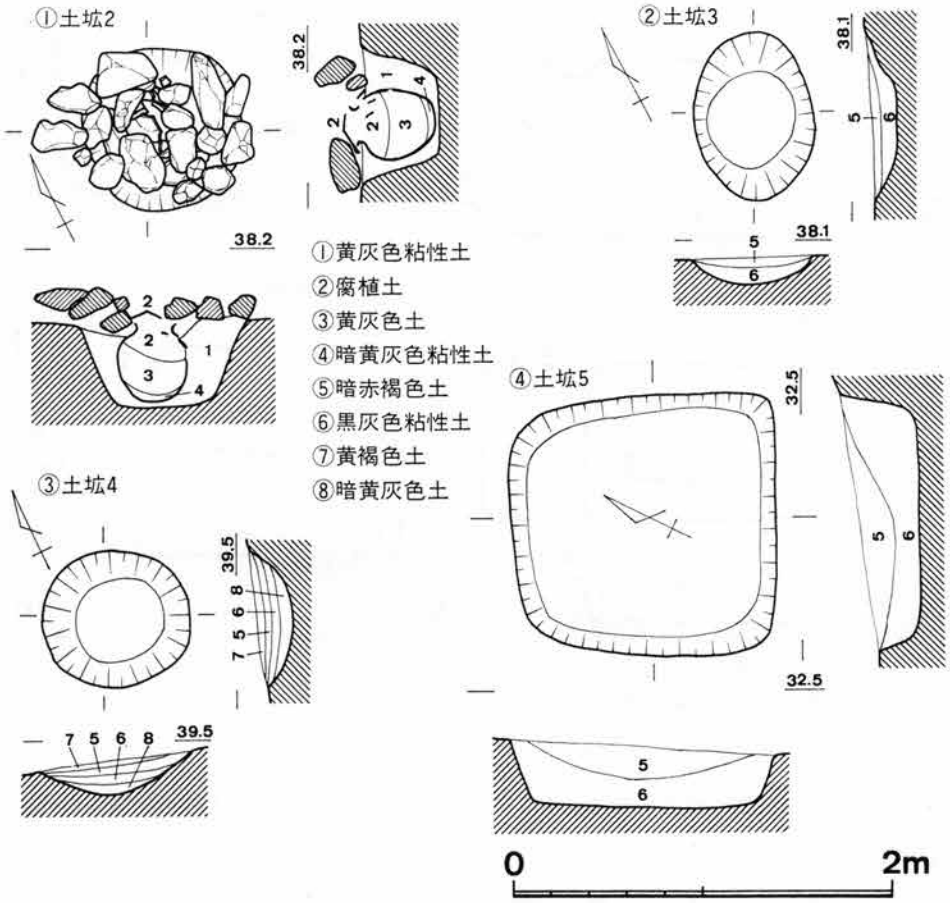
土坑３（第26図２）　４号墳の墳丘上中央東部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し，長径約90cm・短径約65cm・深さ約15cmの規模をもつ。この土坑内には土坑２にみられた集石および遺物は認められない。

４号墳周辺第１主体部（第25図４）　４号墳の西北方向墳丘外，標高35m付近において検出した。全長約６m・最大幅約２mの規模で半円形にテラスを削り出し，そこに埋葬主体部を設けている。テラスの基部(東南部)にテラスを画する溝等の施設は設けられていない。

主体部掘形は長方形を呈し，全長約3.0m・幅約1.5m・深さ約40cmの規模をもつ。掘形中央部に存在した主体部は，全長約2.2m・幅約0.8mの規模をもつ。主体部および掘形内からの遺物の出土はみられない。

③　波江５号墳（第23図）

調査地東南端，波江４号墳に隣接した標高約39m付近に存在する。墳丘は，東方の調査地の外に延びており，今回調査を実施できたのは墳丘の約２分の１の範囲であった。この５号墳は一辺約12m前後の方墳と推定される。墳丘の西側には尾根を直線的に横断する溝をもつ。




第26図　土　坑　実　測　図

溝は幅約３m・深さ約40 cmの規模をもち，溝の西岸部は一部４号墳の墳丘を削る。

５号墳の墳丘上からは古墳時代の埋葬主体部２基と時期不明の土坑１基を検出した。古墳時代の埋葬主体部のうち１基(第２主体部)は一部分を検出しただけであった。

第１主体部（第24図４）　５号墳の墳丘上中央やや西部で検出した埋葬主体部である。主体部掘形は全長約3.7m・幅約1.2m・深さ約30cmの規模をもつ。平面形は長方形を呈し，坑底はほぼ水平を保つ。主体部の規模は不明であり，遺物等の出土も認められない。

第２主体部（第23図）　第１主体部の東隣に並列して存在する，やや小型の埋葬主体部である。主体部掘形の西端部約10cm程度が調査地内で検出された。主体部掘形の規模等の全容は不明である。残存長は約2.1cmの規模をもつことが判明している。今回工事による削平が主体部にほとんどおよばないため，調査地の拡張・発掘を実施しなかった。

土坑４（第26図３）　５号墳と墳丘南部，第１主体部の東南隅部を切って土坑が存在する。

平面形は円形に近く，直径約75cm前後・深さ約20cmである。出土遺物は認められない。

## 4. 出 土 遺 物

波江３号墳～５号墳の出土遺物には，須恵器・土師器のほか，銀鏃・刀子・銀環がある。遺物総数は完形品を含めて整理用コンテナに約５箱分である。大多数の遺物は，埋葬主体部および溝等の遺構に伴う出土である。古墳に伴う遺物は古墳時代後期に属する。また，波江４号墳の墳丘上より中世墓に伴う蔵骨器(甕・鉢)なども出土した。

以下，主要な出土遺物についての概要を述べる。

波江３号墳・４号墳出土遺物（第27図）

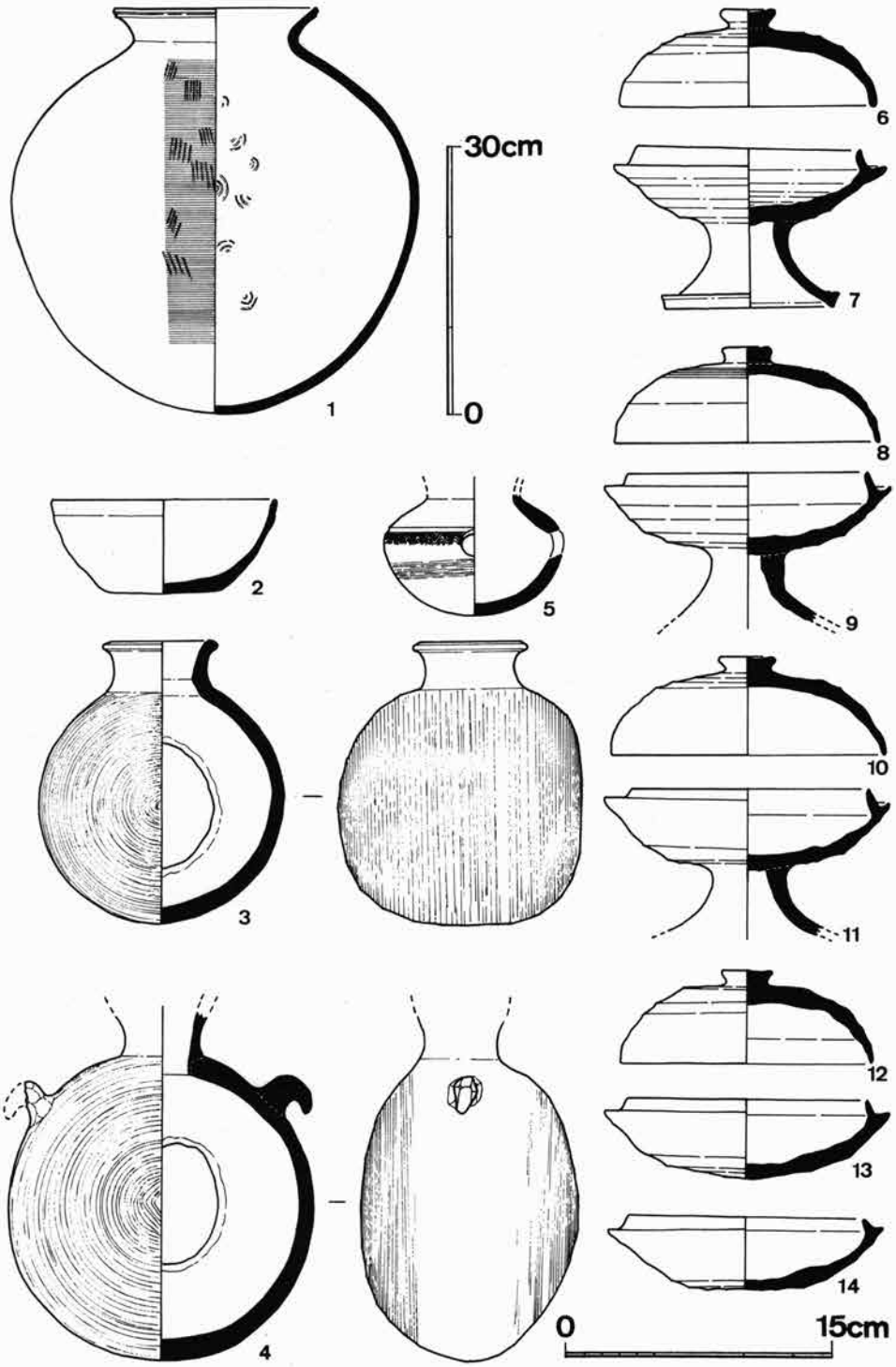
甕（１）　口径23.0cm・胴部径45.2cm・器高45.5cmを測る。口頸部は短く外反し，口縁部下端に段をもつ。体部は球形に近く，最大幅は中央やや上部に認められる。体部外面には平行タタキ目とカキ目を施している。体部内面には円弧状のタタキ目を残し，一部磨消しを行っている。焼成はやや悪く，軟質部分が残る。３号墳１土坑内より出土した。

椀（２）　口径12.6cm・器高5.3cmの土師器である。平底の底部からやや内湾ぎみに外上方へたちあがる体部をもつ。口縁端部は内湾ぎみに丸くおわる。口縁部は横ナデ，見込の中央には放射状を呈するヘラ状痕を認める。体部外面は箆削りとみられるが，遺存状態が不良で，調整は不明である。３号墳土坑１内より出土した。

横瓶（３）　口径6.5cm・最大幅13.6cm・器高15.9cmを測る。口縁部は外反し，口縁上端は面をもつ。体部表は丸く，裏は平らである。体部裏の内面には，円い粘土板をはり付けた痕跡が残る。体部外表面全体にカキ目がほどこされている。完形品であり，焼成も良好である。３号墳土坑１内より出土した。

提瓶（４）　口径不明(残存部径5.2cm)。体部径17.2cm・器高(残存部19.9cm)を測る。口縁部はやや外反ぎみにたちあがる。底部は丸味を帯びる。体部表は丸味が強いが，裏は丸味も弱くなだらかなカーブをもつ。体部の表裏面全体にカキ目がほどこされている。両肩部に認められる把手はやや退化し，カギ形の突起が付けられている。焼成は良好である。３号墳土坑１内より出土した。

甕（５）　体部のみの出土で，頸部以上を欠く。体部径10.0cm・残存器高6.7cmを測る。体部は，口頸基部よりなだらかに下り，最大径は上半部にもつ。体部には浅い沈線を１条めぐらせ，その沈線下方部分に細い波状文(１条６本)をめぐらせる。この波状文部分に直径1.6cmの円孔が，斜め上方より穿たれている。底部はやや尖りぎみであるが丸く，底部上方に一部カキ目を有する。焼成は良好である。この甕は，４号墳に伴う溝中より出土している。




第27図　出土遺物実測図 (1)

1. 甕　2. 土師器椀　3. 横瓶　4. 提瓶　5. 甑　6. 8. 10. 12. 蓋　7. 9. 11. 高杯　13. 14. 杯身

有蓋高杯蓋（6・8・10・12）　口径は14.4～15.2cm・器高5.5cm前後の蓋である。口縁部はやや開きぎみに下り，端部は丸く終る。天上部はヘラ削りがていねいに施され，中央部分に扁平なつまみを取付けている。焼成は良好である。(12)を除き3号墳に伴う溝中の出土である。

有蓋高杯（7・9・11）　口径は12.5～13.5cm，器高は9cm前後とみられる。口縁部立ち上がりは短かく，やや内傾する。脚の基部は太くラッパ状に外反し，脚端上部は上方へつまみ上げる。脚は短く，スカシは伴わない。いずれも3号墳に伴う溝中よりの出土である。

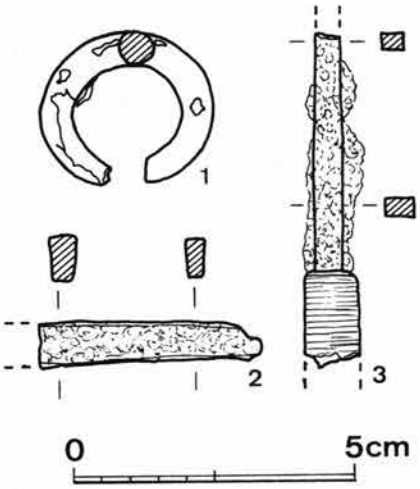
杯身（13・14）　口径13.5cm・器高4.1～4.4cmを測る。口縁部たちあがりは短く，やや内傾する。受け部は短く，水平につき出す。体部と底部の境あたりで篦削りによる明確な稜をもつ。焼成は(14)のみ不良で，軟質である。いずれも3号墳周辺第1主体部内の出土である。

金属器（第28図）　金属器としては，4号墳の第2主体部から鉄鏃1点，同じく周辺第1主体部から銀環1点，3号墳周辺第1主体部より刀子1点の合計3点が出土している。

銀環（1）　主体部内上部より出土。銅芯銀張で正円形に近い。断面もほぼ円形を呈する。直径3.1cm・厚さ0.5cmを測る。銹化が進み，銀張り部分の一部は剝落が著しい。

刀子（2）　刀身は欠落し，茎部のみ出土。現存長4.0cm・最大幅0.8cm・最大厚0.5cmを測る。

鉄鏃（3）　鏃身部は欠落しており，茎部のみが残存していた。矢柄の木質部が銹着してい




第28図　出土遺物実測図(2)
1. 銀環　2. 刀子　3. 鉄鏃

第29図　出土遺物実測図(3)

る。残存長6.0cm, 茎幅0.3～0.5cm, 茎厚0.3cm:矢柄径1.0cmを測る。長茎尖根式鉄鏃とみられる。主体部内底部において，主軸に直交する状態で検出した。

その他の中世遺物（第29図）

古墳時代以外の遺物としては，4号墳の墳丘上に設けられた火葬墓中より検出した，火葬骨を納めたとみられる蔵骨器がある。

片口鉢（1）　口径21.3cm, 器高7.5cmを測る。体部はやや内湾ぎみに立ち上がり，中央部付近から外反しながら口縁部に続く。口縁の端部下方は丸く納め，上方にややつまみ出す。底部は平底で回転糸切り痕を残す。(2)の甕とセットで，蓋として使用されていた。須恵質である。

甕（2）　口径17.4cm, 器高29.8cm, 体部幅28.9cmを測る。頸部から短く外反する口縁部は面をもち，端部は上方にややつまみ上げる。体部は長胴形で，上部に最大幅をもつ。底部は丸底である。胴部外面は平行条線のタタキ目，頸部は横ナデを行うが，タタキ目が残る。内面はナデ消し後も同心円のタタキ目を一部残す。須恵質である。

## 5. ま　と　め

今回調査を実施した波江古墳群の全体的な特色は，狭小な尾根上に立地し、なおかつ急傾斜をもつ斜面に墳丘の裾を接する状態で連続して古墳が存在する点にある。いずれの古墳も石室を築いてはおらず，木棺を埋葬主体とするものである。また，古墳の墳丘外の尾根斜面にも小規模なテラスを削り出し，その場に埋葬主体部を設けている。

発掘調査を実施した3基の古墳のうち，3号墳・4号墳は丘陵尾根の基部側(東南部分)に，尾根を横断する浅い溝をもつ。古墳の墳丘裾を形成するこの溝は，3号墳では大きな円弧を描き，4号墳においては「〕」状の弧を描いている。方墳である5号墳は，墳丘の西北側(4号墳溝の上部)に尾根に直交する溝を設け，墳丘の一辺を削り出している。未発掘部分の墳丘東北側にも，尾根に直交する溝が同様に設けられているものとみられる。

各古墳の墳形は，それぞれが若干の差異をもっている。墳形は各古墳に伴う溝の形状によって異なる。3号墳は円墳・5号墳は方墳であり，中間に立地している4号墳は方墳の四隅を面取りした形状から，円墳と方墳の中間形態とみることができる。

3号墳～5号墳はいずれも6世紀末～7世紀初頭にかけて築かれたことが,出土した遺物の年代からみてとれる。ただ，5号墳に伴う出土遺物が認められないことから，5号墳の築造年代は若干下がる可能性も残る。

各墳丘の築造は，基本的には丘陵を横断する溝と地山の削り出しによって墳丘を整えた後，

わずかな盛土を行って墳丘を築いている。墳丘は傾斜地に立地するため，墳丘の盛土は下り傾斜の強い西北部分に厚く盛られる傾向がある。

傾斜面を利用する古墳は円墳に，丘陵鞍部の平坦部では方墳といった，各墳丘の形態差と墳丘の築造方法は，丘陵尾根上という立地条件の差によるものと考えられる。

波江古墳群は，由良川の支流である牧川の下流部右岸丘陵上に位置している。牧川はその流域内に広い平野部を形成せず，ただ，上流部の上夜久野付近に小規模な盆地が認められるだけで，大部分は狭小な河谷平地が続いている。この牧川流域には，縄文時代早期以後より各時代の遺跡が点在している。なかでも古墳時代の遺跡は数多く知られており，横穴式石室を内部主体とする後期の群集墳が卓越している。各群集墳は牧川上流部の上夜久野盆地と下流部の由良川合流部付近に集中的に分布している。

下流域においては，福知山市牧地区に総数30基前後の横穴式石室墳からなる牧古墳群が存在している。この牧古墳群は牧川をはさんで波江古墳群と相対し，両古墳群は直線距離にして約700mと近接している。牧古墳群はいくつかの支群に分かれ，その中心的位置を占めているのは，群集墳中で唯一の前方後円墳とみられる牧正一古墳である。このほか，道勘山1号墳・弁財1号墳などは，石室構造・出土品の内容等からみて，群形成の核となる首長墳と推察されている。

牧正一古墳は台地の先端に立地し，牧古墳群中最も平野部に近接している。築造時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられている。玄室の一部の調査ではあるが,鉄器・馬具・須恵器・土師器等，豊富な遺物が出土している。弁財1号墳は6世紀後葉を遡らない時期の築造と考えられ，牧正一古墳に続いて築造されたとみられる。出土遺物には鉄器・馬具・鏡・須恵器等があり，牧正一古墳と同様に豊富な遺物が認められる。道勘山1号墳は6世紀末～7世紀初頭に位置づけられており，金銅装大刀・玉類・須恵器等の出土が伝えられている。牧古墳群は6支群によりなりたち，一部不明なものもあるがほとんどは横穴式石室とみられる。調査が実施された古墳はわずかであるが，石室は大形・小形の石材を利用して築かれている。牧古墳群の東南側平野部には牧古墳群と密接なつながりをもつと考えられる石本遺跡が存在する。石本遺跡は縄文時代後期～鎌倉時代にかけての集落跡であるが，なかでも古墳時代後期の時期に盛行する遺跡である。出土した遺物量も豊富であり，漆塗りの木製鞍・鉄器・玉類および多量の須恵器の出土をみている。石本遺跡の性格および内容等，また牧古墳群の構成等からみて，現在の牧集落一帯は当地域における一つの中心的地域であったとみられる。

この地に文化の中心地が存在したのは，由良川における水上交通・福知山盆地と但馬地方とを結ぶ陸上交通の接点にあたる要衝の地に位置していたからであろう。好適な立地条件を

もっていたため畿内地域との交流が進み，先進文化が早くから当地に根づいたとみられる。

石本遺跡と波江古墳群の間には牧川が流れ，両遺跡は地形的に大きく寸断されている。このため石本遺跡と波江古墳群は直接結びつく可能性は少なく，波江古墳群を形成した人々は石本遺跡とは別の共同体であったとみることができよう。牧古墳群を形成したとみられる石本遺跡は，当時この地域の中核を占めていたものと考えられる。おそらく波江地区周辺もその影響下にあったと判断される。墓制においては牧古墳群にみられる横穴式石室墳と，波江古墳群にみられる木棺直葬墳を主流とする2形態が存在する。このことは牧古墳群を形成した共同体は早くから畿内地域の墓制を取り入れ，一方波江古墳群を形成した共同体は古くからの墓制を守り，引き継いでいたものとみられる。同じ文化圏内においても各共同体間では，この墓制等にみられるように，各共同体ごとに若干の文化的差異をもっていたものと判断され，それぞれの共同体の個性をあらわすものとして注目されよう。　　（竹原一彦）

注1　中嶋利雄・杉原和雄・林　和廣・堤圭三郎「宮守線路線地域内発掘調査概報」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）1971

注2　調査期間中の昭和59年8月4日には石本遺跡の，昭和60年3月14日には波江古墳群の現地説明会を実施した。

注3　調査補助員　川吉謙二・小橋拓司・佐藤達幸・藤田公徳・細見成喜・牧　正博
作　業　員　金田正男・金田和則・桐村英一・木崎嘉一・木崎久一郎・高木弥太郎・牧　鋼助
牧　治司・和久徳重・和久寅一・和久治男・松井信治郎・小笠原守・奥村重男
高尾浩徳・中井八郎・川口うたの・高橋登美栄・牧順子・片岡あや子・足立初子
梅垣ひとみ・白波瀬光代・福居敏子・八野美津子（順不同・敬称略）

注4　由良川下流谷平野の人文地理的な研究報告については，籠瀬良明「京都府由良川下流谷平野―地形・洪水・集落移転および土地利用―」（『横浜市立大学紀要』No. 134）1962

注5　牧古墳群について触れたものとしては，次の文献がある。

1. 梅原末治「牧の石室古墳」（『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第20冊　京都府）1940
2. 『新たに国の保有になった埋蔵文化財特別陳列目録』東京国立博物館 1965
3. 海老瀬敏正・笠井敏光「福知山地方の横穴式石室」（『京都考古』16　京都考古刊行会）1975
4. 新納　泉「京都府下出土の装飾付大刀」（『京都考古』26 京都考古刊行会）1982
5. 村川俊明「福知山市牧正一古墳測量調査略報」（『京都考古』27 京都考古刊行会）1982
6. 西岡巧次・村川俊蔵「牧古墳群」（『丹波の古墳Ⅰ―由良川流域の古墳―』山城考古学研究会）1983

注6　福知山市史編さん委員会編『福知山市史』第1巻 1976

# 6. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 昭和59年度発掘調査概要

## はじめに

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の京都府における発掘調査は，昭和54年度から福知山市大内山田から同長田に至る約15kmの区間にわたって開始された。昭和54・55年度の調査は，日本道路公団大阪建設局の委託により，京都府教育委員会が事業主体となって実施したが，昭和56年度以降は，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが継続して行っている。

昭和53年に行われた分布調査によって9遺跡が確認されていたが，その後発掘調査の進行につれて新たな遺跡が発見された。これらの遺跡の分布状況は，第30図のとおりである。

今年度は，これらの遺跡のうち奥谷西遺跡，多保市(とおのいち)城跡(踏査の結果A～D地点と呼ぶことにした)，薬王寺古墳群(旧名岩崎古墳)，薬王寺古墓(旧名岩崎古墓)の発掘調査を実施した。また，道路建設工事の進捗にあわせて，すでに発掘調査を終了した大内城跡，宮遺跡などの立会調査をあわせて実施した。それぞれの遺跡の現地発掘調査期間は，下記のとおりである。

奥谷西遺跡　昭和58年12月12日～昭和60年3月15日

薬王寺古墳群　昭和59年3月6日～昭和60年3月31日

薬王寺古墓　昭和59年10月22日～昭和59年10月29日

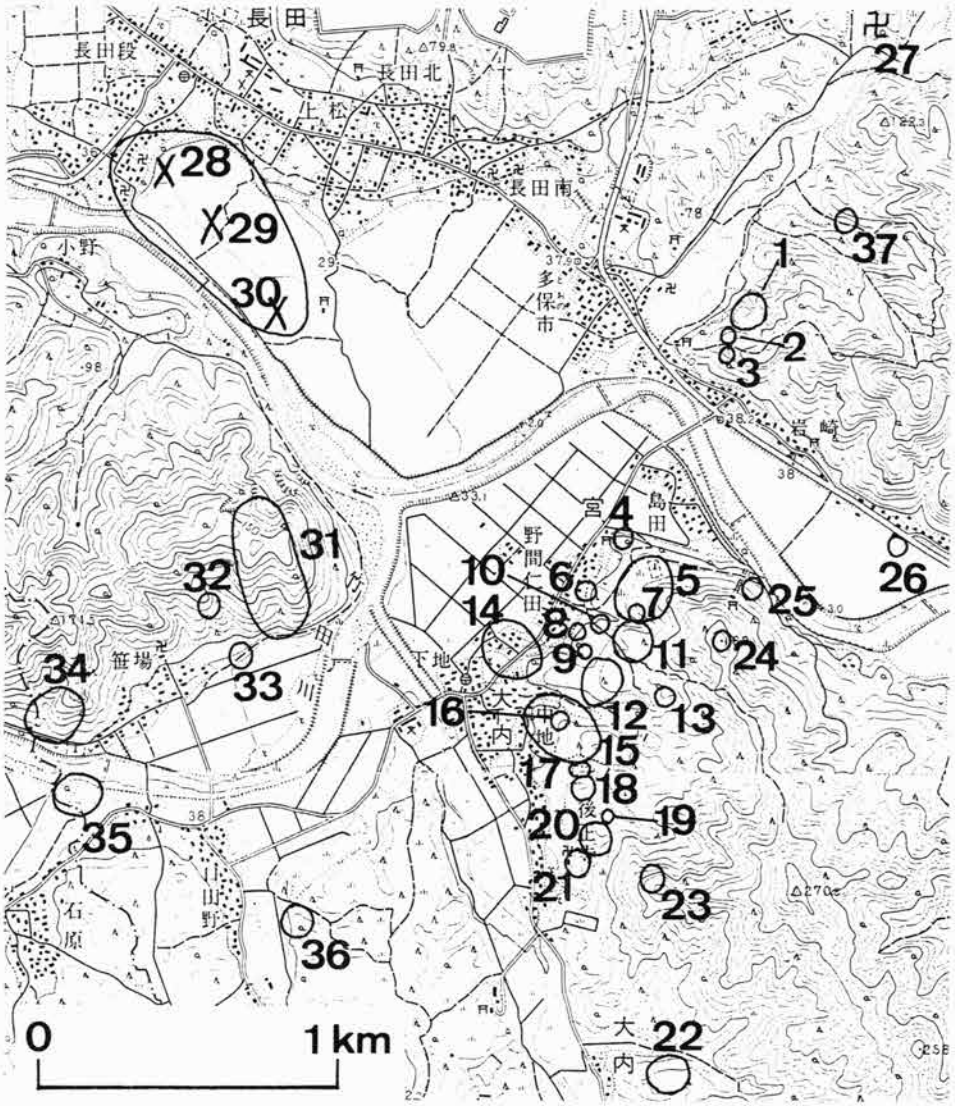
多保市城跡　昭和59年5月7日～昭和60年3月30日

現地調査は，調査課主任調査員辻本和美，同調査員伊野近富・小山雅人・藤原敏晃・山下正が担当した。調査に際しては，日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・福知山市教育委員会社会教育課・同市史編さん室・同企画調整室・福知山史談会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局等の諸機関の協力を得た。また，地元大内・多保市地区の方々には酷暑，極寒の季節を通じて熱心に作業に従事していただいた。(注1) さらに，有志学生諸君には，補助員や整理員として協力をいただいた。(注2)

(伊野近富)

付表 1　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 年代 | 所在地 | 調査年度 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 多保市城跡 | 城跡 | 中世 | 福知山市字多保市 | 59 | 藤井善布「中世の城址」(『福知山市史』第二巻，福知山市役所) 1982 |
| 2 | 薬王寺古墳 | 古墳 | 古墳時代後期 | 多保市 | 58・59 | 小山雅人「薬王寺古墳」(『京都府埋蔵文化財情報』第12号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984 |
| 3 | 薬王寺古墓 | 古墓 | | 多保市 | 59 | 本概報所収 |
| 4 | 城ノ尾城館跡 | 集落跡<br>城館跡 | 弥生～中世 | 宮小字城ノ尾 | 57 | 小山雅人「城ノ尾城館跡」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983 |
| 5 | 宮遺跡 | 集落跡<br>古墓 | 弥生～中世 | 宮　城ノ尾ほか | 54・55・56 | 辻本和美ほか「宮遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報 (1981-2)』京都府教育委員会) 1981 |
| 6 | 城ノ尾古墳 | 古墳 | 古墳時代後期 | 宮　城ノ尾 | 54・55・56 | 辻本和美ほか「城ノ尾古墳」(『埋蔵文化財発掘調査概報 (1981-2)』京都府教育委員会) 1981 |
| 7 | 宮遺跡古墓群 | 古墓 | 中世 | 宮　城ノ尾 | 56 | 辻本和美「宮遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982 |
| 8 | ケシケ谷遺跡 | 集落跡 | 弥生～中世 | 宮　ケシケ谷 | 57・58 | 岩松　保・藤原敏晃「ケシケ谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984 |
| 9 | 奥谷西遺跡 | 集落跡 | 弥生～中世 | 大内　奥谷 | 58・59 | 藤原敏晃「奥谷西遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第12号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984 |
| 10 | 大内城跡 | 城館跡 | 弥生～中世 | 大内　平城 | 55・56 | 伊野近富「大内城跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982 ほか |
| 11 | 大内城跡墳墓 | 古墓 | 中世 | 大内　平城 | 57 | 伊野近富「大内城跡墳墓」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983 |
| 12 | 後正寺古墓 | 古墓 | 中世・近世 | 大内　後正寺 | 57 | 岩松　保「後正寺古墳・小屋ケ谷古墳」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983 |
| | 小屋ケ谷古墳 | 古墳 | 古墳時代後期 | | | |
| 13 | 後青寺跡 | 城館跡 | 弥生～中世 | 大内　後正寺 | 56 | 辻本和美「後青寺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982 |
| | 後青寺古墳 | 古墳 | 古墳時代 | | | |
| 14 | 洞楽寺北遺跡 | 集落跡か | 不明 | 大内　坪田 | 57・58 | 岩松　保「洞楽寺北遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983 |
| 15 | 洞楽寺遺跡 | 集落 | 古墳時代後期 | 大内　坪田 | 57・58 | 同　上 |
| 16 | 洞楽寺古墳 | 古墳 | 古墳時代後期 | 大内　坪田 | 57 | 伊野近富「洞楽寺古墳」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983 |
| 17 | 山田館跡 | 古墓 | 中世 | 大内　大内山田 | 57 | 岩松　保「山田館跡」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983 |




第 30 図　調 査 地 位 置 図（及び周辺遺跡分布図）

1. 多保市城跡　2. 薬王寺古墳群　3. 薬王寺古墓　4. 城ノ尾城館跡　5. 宮遺跡　6. 仁田城跡　7. 城ノ尾古墳　8. 姫塚古墳　9. 墳墓　10. 男塚古墳　11. ケシケ谷遺跡　12. 奥谷西遺跡　13. 奥谷遺跡　14. 散布地　15. 大内城跡　16. 中地古墳　17. 後正寺古墓・小屋ケ谷古墳　18. 後青寺跡・後青寺古墳　19. 洞楽寺北遺跡　20. 洞楽寺遺跡　21. 洞楽寺古墳　22. 山田館跡　23・24・25. 古墳　26. みこし塚古墳　27. 多保市廃寺　28. 和田賀遺跡　29. 前ケ嶋遺跡　30. 仲堤遺跡　31. 庵戸山古墳群　32. 庵戸山古墳　33. 庵戸古墳　34. 境谷古墳群　35. 田野城跡　36. 口田野古墳　37. 狐塚古墳（仮称・新発見）

## 位置と環境

今回の調査対象地は，国鉄福知山駅から南東へ約 7kmの位置にある。由良川の一支流である土師川が，兵庫県側から流れる竹田川と合流する付近に発達した平野を臨む丘陵上に立地する。歴史的な環境については、前年度までの報告で何度か触れているので、今回は，今年度の調査結果を概観する中で，この地域の歴史的な姿を見たい。

調査地は，大内地区と多保市地区に分かれる。大内地区の奥谷西遺跡は，標高約77mの広大な台地上に立地する弥生時代中・後期、古墳時代後期の集落跡であることがわかった。特に弥生時代中期の集落は、竪穴式住居(３棟)と溝によって構成されていたが，もっとも特徴的なことは，台地の南西端に幅３m・深さ1.5mの大溝を設けていたことであった。同時期の集落は、当遺跡の北にあるケシケ谷・宮両遺跡で発見されており、同様の立地を示す。発掘調査が丘陵・台地に集中しており、そのため低地の様相はほとんど明らかではないが、居住地を台地上に営むという現象は，その選地を条件づけるような要因が存在した結果かも知れない。

多保市地区の調査対象地は，土師川右岸の丘陵上にあり，その構成からA～Dの各地点に分けた。薬王寺古墳・古墓も同丘陵上にある。薬王寺古墳群は，木棺・箱式石棺を直葬する埋葬施設をもち，丘陵の稜線上に３基以上で構成されることがわかった。出土した遺物から６世紀初頭～前半に築造されたことがわかった。両河川の合流点付近の丘陵上には，前方後円墳の男塚古墳や横穴式石室墳の群集する境谷古墳群が点在するが，いずれも古墳時代後期に属する。現在までのところ最古のものは，木棺直葬墳の後青寺古墳で，６世紀初頭と考えている。同時期の集落は，奥谷西・ケシケ谷・洞楽寺の各遺跡で発見されており，その対応関係が注目される。

多保市城跡A地点は，４つの平坦地とその背後の「詰の曲輪」で構成される中世の城跡である。当地域は，土塁と空堀で囲まれた単郭の城館跡が，ほぼ現行の大字単位に１郭(ないし２郭)の割合で散在しており，これには大内城，仁田城，田野城等が知られる。今回のA地点での調査の結果，ピット列や石列等を検出したが，その性格は今ひとつ明確でない。

多保市城跡B地点では，鎌倉後期の中世墳墓群を検出した。これらは，１～２mの方形もしくは円形に礫石を並べ，その下に骨を埋納したものである。この中には，大内城跡墳墓や山田館跡墳墓で見られた，土師器鍋を蔵骨器に転用する例もあった。

D地点では，弥生時代中期から奈良時代を中心とする遺構・遺物を検出したが，現在まだ整理中のためその詳細は後日に期したい。　　(山下　正)

## (1) 奥 谷 西 遺 跡

### 1. 遺 跡 の 立 地 (第31図)

奥谷西遺跡は，福知山市大字大内小字奥谷に所在する。当地は，これまで多くの遺跡が知られていた由良川本流域とは，段丘地形からなる長田野丘陵によって画されており，また，周囲も低位丘陵に囲まれている隔絶した所に所在する。この遺跡は北西へ延びる低位丘陵東端の，小河川によって形成された台地上に位置する。前方では加古川に通じる竹田川と，由良川に通じる土師川が合流し，これらの河川を中心とした平野が広がっている。背後には南北方向へ低位丘陵尾根が走る。本遺跡が立地する平坦面は，東西80m・南北86mの範囲で，標高は77m前後である。調査地平坦部の東西の比高差は約2mを測り，南に穿たれた谷との比高差は約20mである。

周囲を見ると，狭い谷を隔てて南の同様な台地上に大内城跡(注3)，北側には若干の地形の窪みを経てケシケ谷遺跡(注4)が所在し，さらにこうした周辺の台地上や丘陵上に点々と遺跡が存在する(注5)。

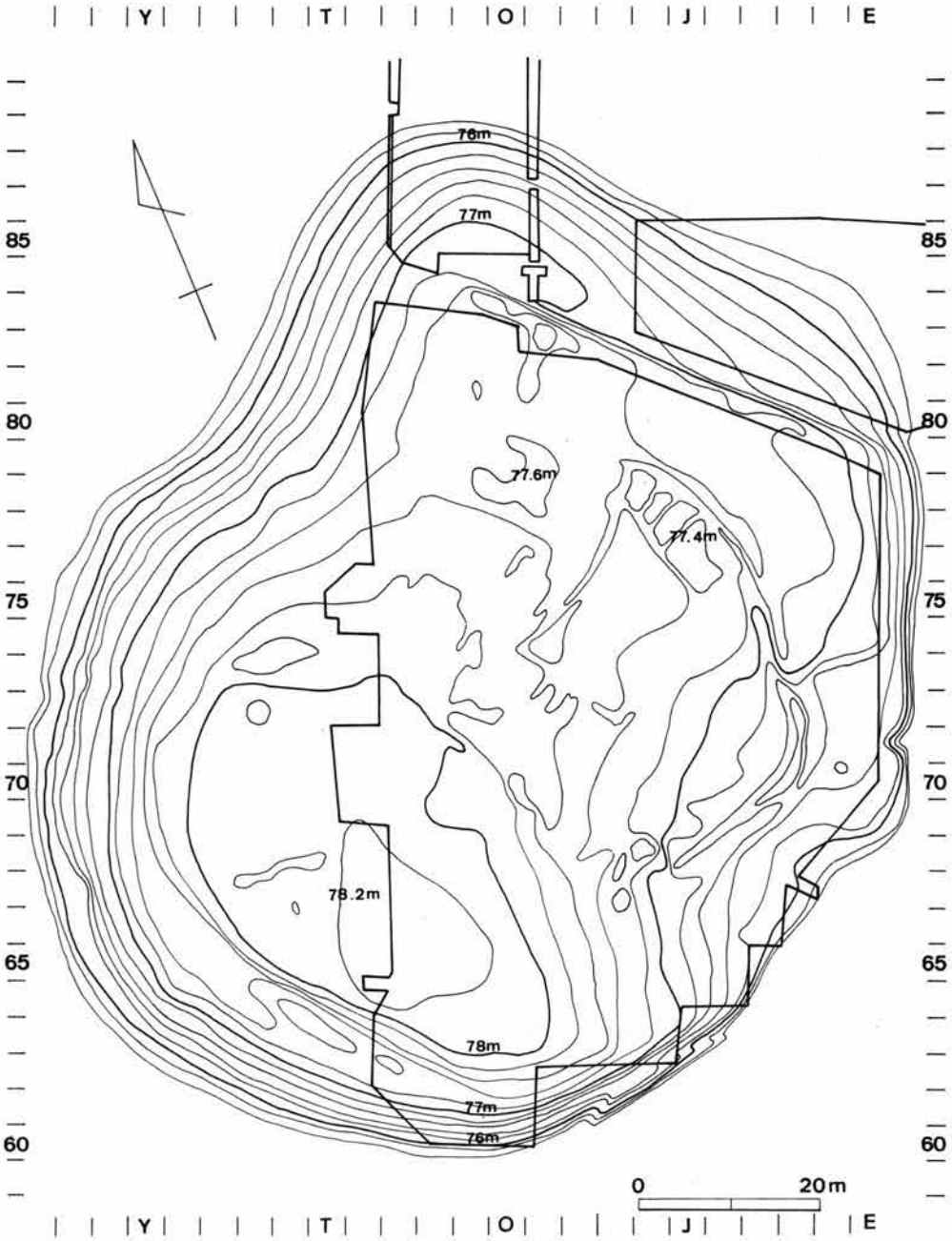
### 2. 調 査 の 経 過

奥谷西遺跡の調査は，昭和58年12月12日～昭和59年3月29日，及び昭和59年5月7日～昭和60年3月15日の2年度にわたるものとなった。

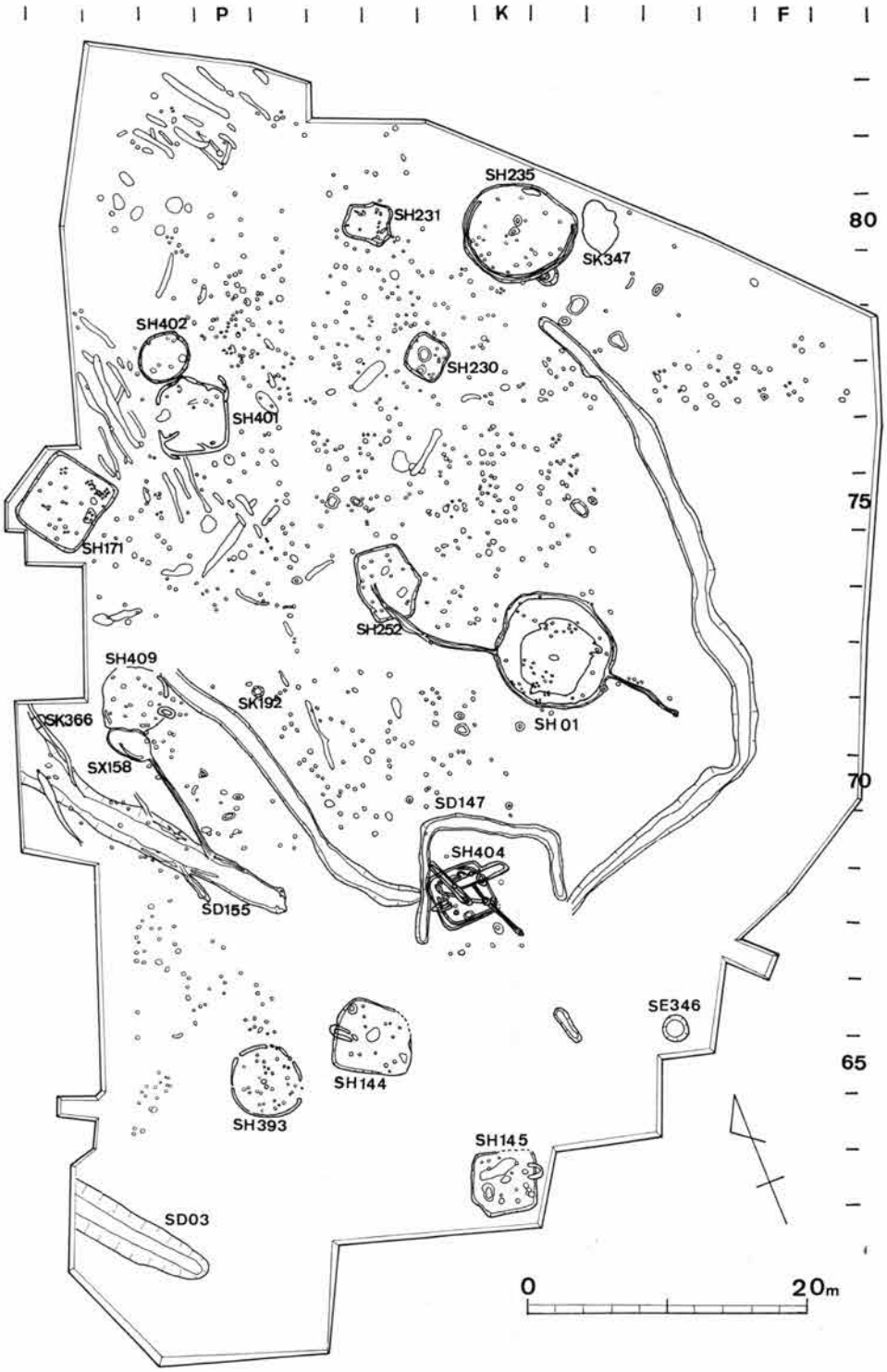
調査は，まず4mごとに地区割りをして地形測量を行った。その後，Kライン，73ラインに沿って，幅1.5mの試掘坑を設け，土層の観察，遺構・遺物の確認作業を行った。試掘の結果，表土下5～10cmの厚さで黄褐色土があり，その下に暗茶褐色土(厚さ10～15cm)，暗黄褐色土(厚さ15～20cm)と続き，黄褐色粘質土及び赤褐色粘質土の地山となることを確認した。

黄褐色土は部分的に現われる層で，時間的に新しいものと考えられる。暗茶褐色土層は弥生時代から中世にかけての遺物を包含する層である。同層上面で遺構の検出に努めたが，顕著なものは確認できず，機械及び人力で暗茶褐色土除去に移った。そして，ようやく暗黄褐色土層直上で遺構を確認するに至った。さらに下面においても遺構を確認した。

昭和58年度の段階では，弥生時代の溝(SD03)，弥生時代，古墳時代のそれぞれの住居跡など，いくつかの遺構を確認したにとどまり，全面的な調査は，59年度に実施した。その結果，多くの遺構・遺物を検出するに至った。住居跡13基のほか，溝や土坑等，弥生時代から中世～近世にわたる複合遺跡であることが判明した。遺物は，弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦器・鉄器・石器と多種多様であり，現在，整理検討中である。




第 31 図　地　形　測　量　図




第32図　奥谷西遺跡遺構配置図

### 3. 検　出　遺　構（第32図）

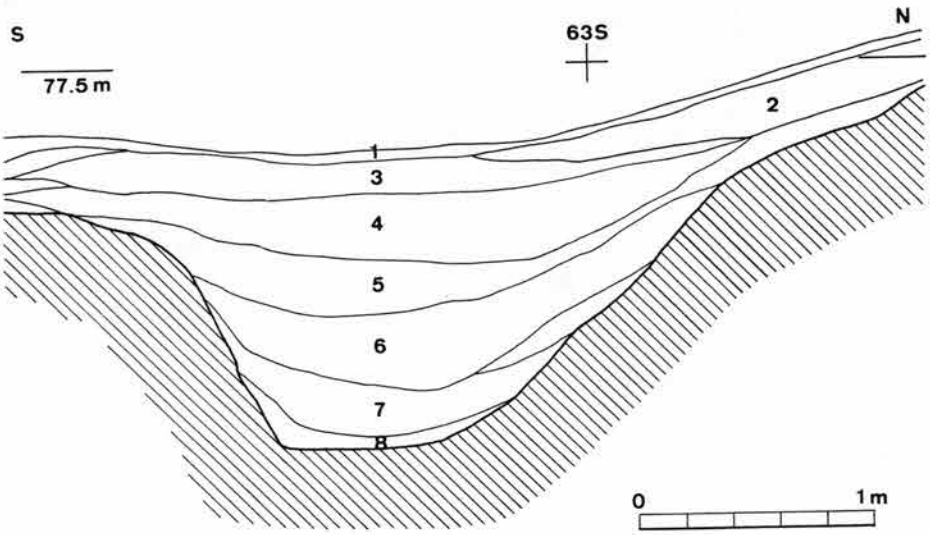
〔溝〕 溝状遺構は，弥生時代から近世に至る大小様々なものを検出したが，今回は特にSD03と称しているもののみ報告する。

〈溝SD03〉 幅約3m・深さ約1.5mを測り，断面「U」字形を呈する溝である。台地の南西端に穿たれたもので，検出長は約12mであるが，さらに調査地域外に延びていくことが地形観察により判読できる。溝東端は，台地の端まで至らず途中で終っている。おおむね77mの等高線が溝の位置である。台地の南西側から西側が比較的緩やかに下がる地形であるのに比べ，南側から東側にかけては谷が穿たれ切り立っており，このことが，南側から東側にかけて溝の掘られなかった要因とも考えられる。

出土遺物は，立派な溝であるにもかかわらず少量である。最下層から出土した遺物をみると，小片ではあるが弥生時代中期後半のものと思われ，溝も同時期に推定できる。

このほか，出土遺物では須恵器の杯蓋，土師器等が第4層(黒褐色土)等から検出されており，この層下面では比較的大きな礫も入っていた。古墳時代後期においても溝状を呈していたものと推定される。

加えて，台地の中央部やや南側に，SD155と称する同時期の溝も検出しており，溝の性格や相互の関連の検討が要される。

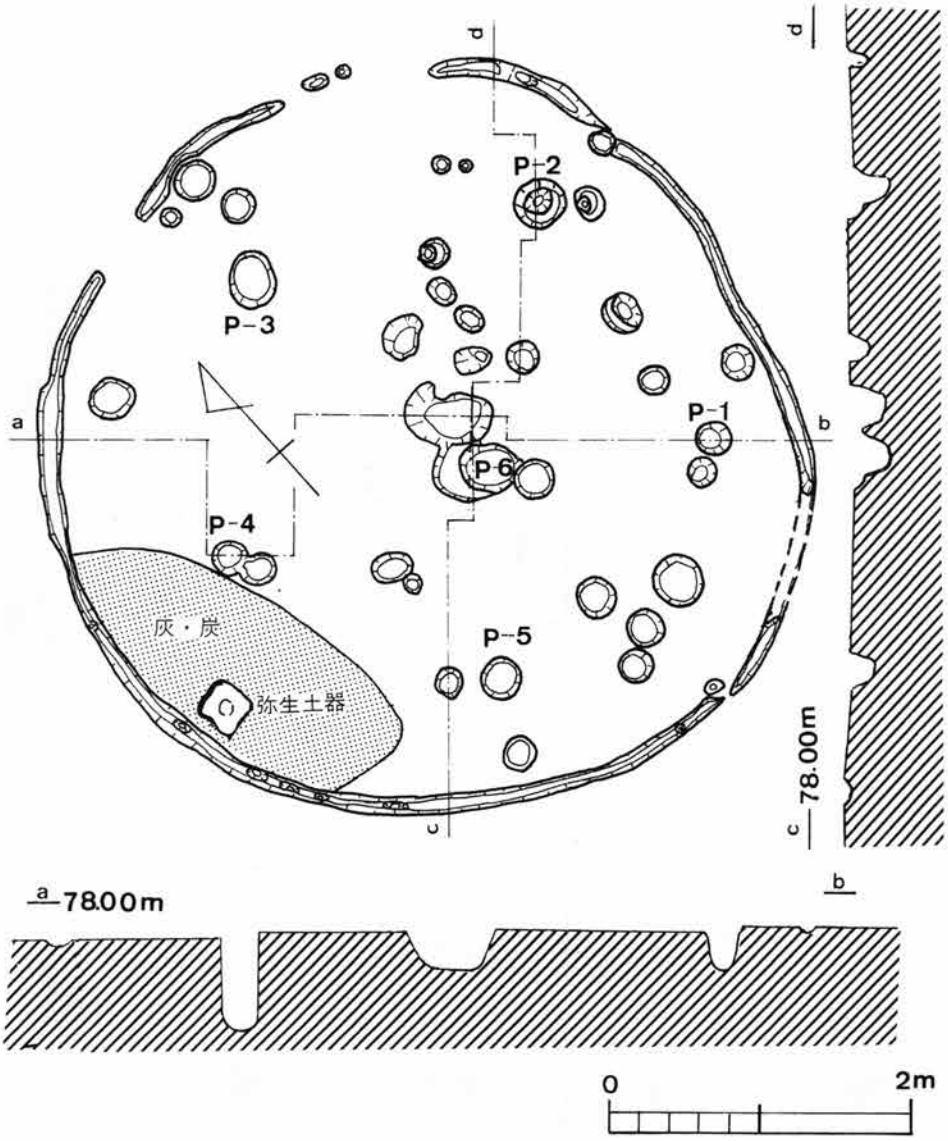



第33図　溝SD03土　層　断　面　図

1. 表土　2. 黄褐色土　3. 暗茶褐色土　4. 黒褐色土　5. 暗黄褐色土
6. 暗褐色土　7. 黒茶褐色土　8. 灰黄褐色土

〔**竪穴住居跡**〕 竪穴住居跡は，現地点では大きく3時期に分けている。すなわち弥生時代中期後半，弥生時代後期，古墳時代後期である。まだ整理中の段階で，住居跡の時期については検討を要するが，いちおう付表2のようにまとめた。以下，代表例を紹介したい。

〈竪穴住居跡SH393〉 調査地の南西部で確認した，直径約5mの円形を呈する，弥生時代中期後半の竪穴住居跡である。幅約15cm前後の周溝及び柱穴を検出したが，遺存状態は良好



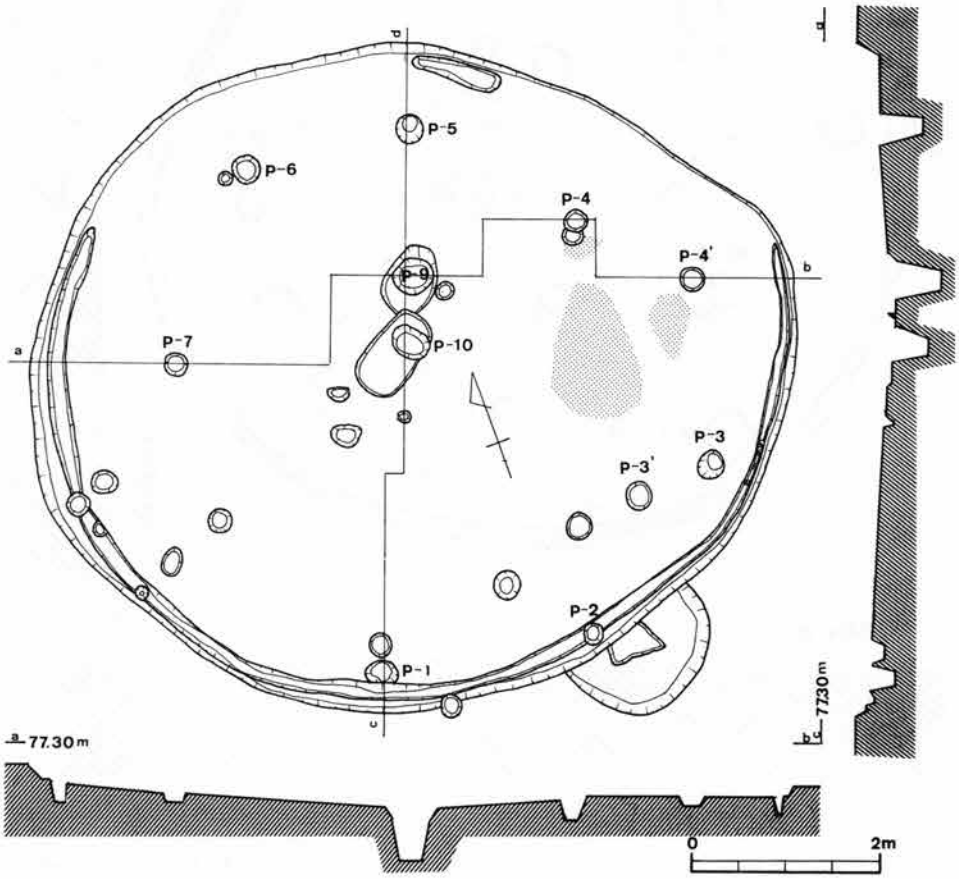

第34図　竪穴住居跡SH393実測図

とは言えない。主柱穴は5個($P_1$～$P_5$)である。直径は，約30cm前後で，深さは60～70cmを測る。中央にも土坑状を呈する遺構を検出したが，特に深いもの($P_6$)は，柱穴とも考えられる。この中に焼土はなく，埋土上部では若干の炭化物の混じる土を検出した。これは，中央のピットが埋まった後に生じたものである。住居内にも焼土部はなく，南西部で炭化物の混じる黒色土(灰・炭)の広がりを確認した。かなり広範囲に広がっていたが，性格は不明である。

床面の遺物は，弥生土器壺底部を除くと破片で，形のわかるものは少ない。その他，チャートの剥片，有孔円板などが出土した。

〈竪穴住居跡SH235〉　調査地北側中央部に位置する弥生時代後期と考えられる竪穴住居跡である。これより北側は，緩やかに下がる地形となる。そして，現在山道となっている小さな谷部を経て，再び緩やかな傾斜を約50m登るとケシケ谷遺跡(注6)に至る。

直径は，南北7.2m・東西8mで，楕円形といえる平面形を呈する。主柱穴については検討




第35図　竪穴住居跡SH235実測図

段階であり，深さ等の類似性から$P_1$～$P_8$の８本を想定できるが，P3～P4，P3′～P4′と複雑な様相であり平面形や住居構造などとともに再検討する必要がある。当然それは中央土坑（柱穴？）にも同様である。ここからは炭，焼土等は検出されていない。中央土坑は，さらに中央部に円形の柱穴状の土坑が切り込む形で掘られているのであるが，これは柱穴としての検討も要する。

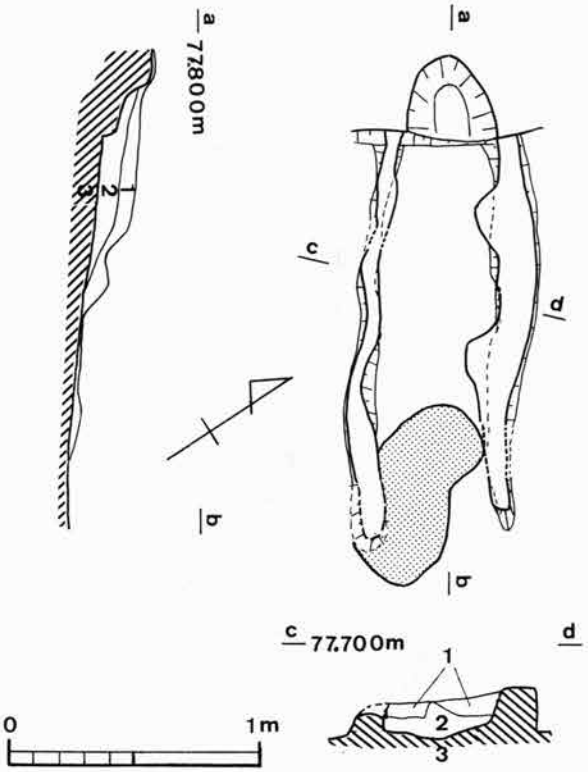
柱穴のうち$P_1$～$P_8$は，径30cm前後・深さは10～50cmを測る。中央の$P_9$・$P_{10}$は，やや大きく径約40cmで，深さ45～55cmである。焼土は，住居内東部の柱穴の間（$P_3$～$P_4$）に広がっており，炉跡と考えられる。住居跡の壁高は約30cmで，遺存状況は良好といえる。周溝は，幅20cmで，北を除く西から東にかけて検出した。

〈竪穴住居跡SH144〉　台地の南側の中央部で検出した古墳時代後期の竪穴住居跡である。一辺約５ｍを測り，ややいびつではあるが，方形を呈する。住居西側の壁高は20cmを残すが，東側にいくに従って削平が激しくなり，壁はほとんど残らなくなる。主柱穴は４個（$P_1$～$P_4$）である。直径は30cm前後・深さ25～35cmを測る。

その他，貯蔵穴等であったと思われる土坑を４つ（$K_1$～$K_4$）検出した。$K_1$は，長径約80cm・短径約60cmの楕円形で，深さは約30cmである。この中からは，須恵器の短脚高杯が出土した。$K_2$も同規模で，深さは約30cmである。$K_3$は，約40cmを測り円形を呈する。深さは約10cmである。$K_4$は，住居中央部で検出した長径約130cm・短径約80cmを測る楕円形をした土坑である。ただし，深さは約10cmと浅いものである。

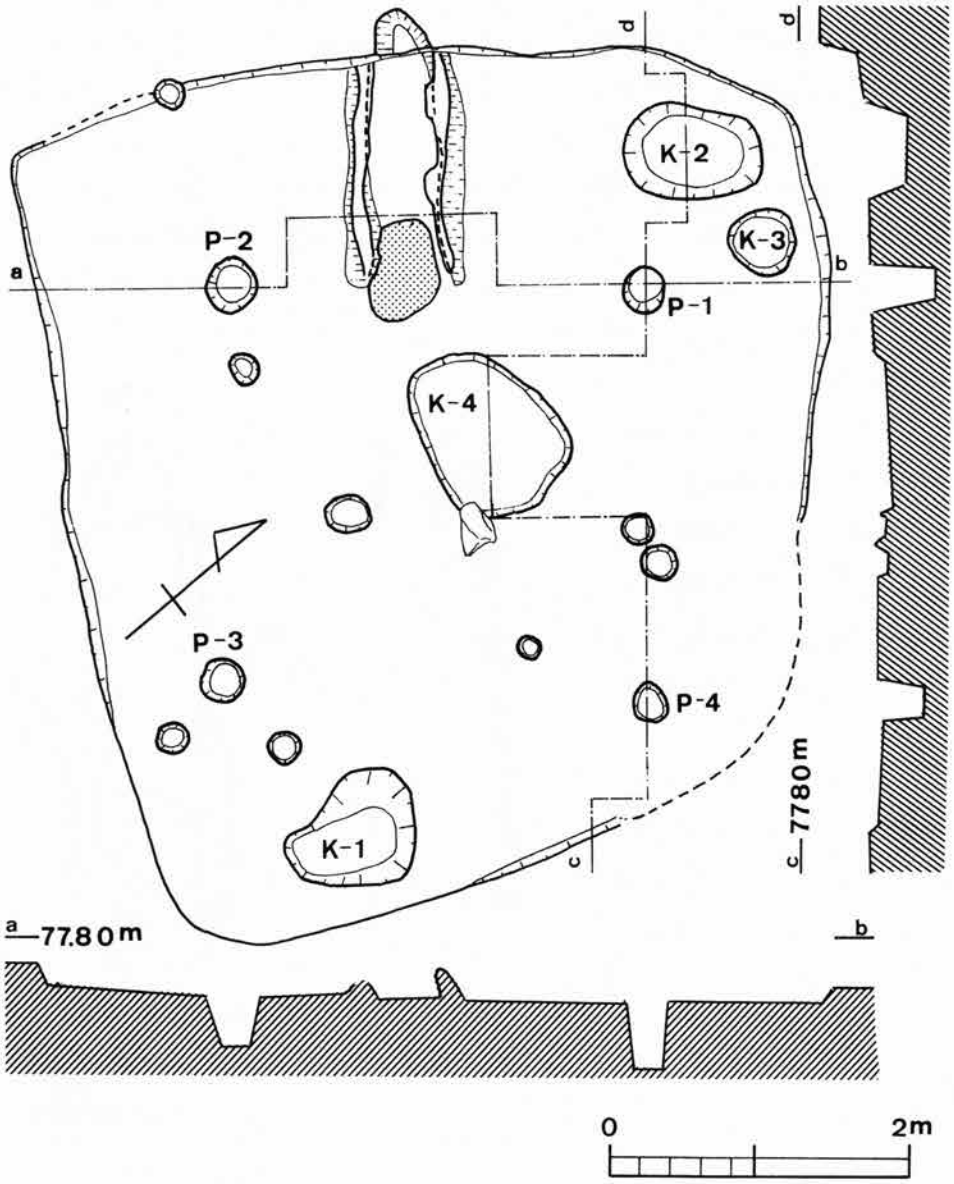
周溝については，持たなかったようである。

住居の東辺中央部には，造りつけのカマドを有していた。平面形は馬蹄形で，幅約80cm，袖部の長




第 36 図　竪穴住居跡 SH144 カマド実測図

さ約160cmを測る。天井部は崩落しており，袖部のみが残存する。煙道部は，住居壁面を切り込んで設けていた。このカマドは，一般的なカマドに比べ，ひじょうに長いのが特徴である。どういう利点があってこうした長いものを作ったかは不明で，まだ類例等の検討を加えなければならない段階である。支脚等についても不明である。




第 37 図　竪 穴 住 居 跡 SH144 実 測 図

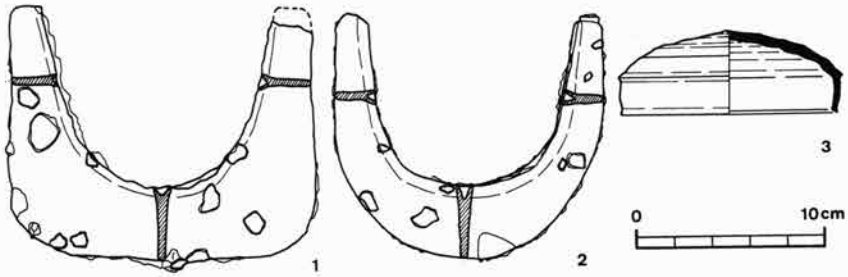
付表2　竪穴住居跡一覧表

| | 形 | 規模(cm) | | | 床面積(m²) | 周溝(cm) | | 主柱穴 | 焼土 | カマド | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長軸 | 短軸 | 壁高 | | 幅 | 深さ | | | | | |
| SH393 | 円　形 | 480 | 480 | — | 18 | 16 | 6 | 5 | — | — | 弥生中 | 中央(柱)穴？<br>炭の広がり部 |
| SH402 | 円　形 | 360 | 320 | 3 | 9 | — | — | 4 | ○ | — | 弥生？ | 炉跡？ |
| SH409 | 円　形 | 440 | — | — | 15.5 | 20 | 5 | 4 | — | — | 弥生？ | |
| SH01 | 六角形？ | 840 | 820 | 20 | 54 | 25 | 10 | 6 | — | — | 弥生後 | 中央穴幅30cmの排水溝がある<br>中央部に炭 |
| SH235 | (楕)円形 | 800 | 710 | 30 | 40.5 | 20 | 15 | 6 | ○ | — | 弥生後 | 中央(柱)穴？ |
| SH230 | 方　形 | 280 | 280 | 10 | 7.8 | — | — | — | ○ | — | 弥生？ | 中央に浅い土坑 |
| SH231 | 方　形 | 300 | 240 | 10 | 7.2 | — | — | — | — | — | 弥生？ | 中央に大きな炭の広がり |
| SH171 | 方　形 | 580 | (540) | 15 | 31 | — | — | 4？ | ○ | — | 古墳？ | 貯蔵穴　中央部に小さな焼土<br>炭の広がり |
| SH252 | 長方形 | 500 | 360 | 15 | 18 | — | — | 4 | ○ | — | 古墳？ | 南東ピット付近に焼土の広がり |
| SH401 | 方　形 | 520 | 520 | — | 27 | 16 | 5 | 4 | ○ | ？ | 古墳？ | 建て替え？　焼土の位置から<br>カマドの可能性 |
| SH144 | 方　形 | 540 | 520 | 20 | 28 | — | — | 4 | — | ○ | 古墳後 | 貯蔵穴<br>中央に浅い土坑 |
| SH145 | 方　形 | 460 | 440 | 15 | 19 | — | — | 4 | ○ | ○ | 古墳後 | 方形としたが南西隅欠く<br>中央に炉？貯蔵穴 |
| SH404 | 方　形 | 440 | 400 | 35 | 17.5 | 20 | 20 | 4 | ○ | ○ | 古墳後 | 中央に炉？貯蔵穴 |

こうしたものの一例として，京都府城陽市森山遺跡(注7)の竪穴住居跡SB24のカマドがある。これは，馬蹄形を呈するタイプで，幅80cm・長さ160cmと報告されている。図がないので不明であるが，同一例とも考えられるものである。同じく，竪穴住居跡SB18には，長さ130cmのカマドがある。

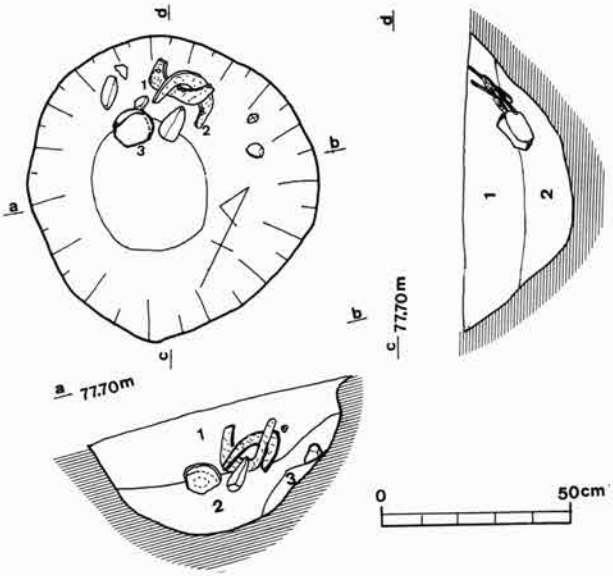
以上，竪穴住居跡3例の概略を記した。このほかに，各時代にわたる土坑・柱穴・溝など数多くの遺構を検出しているが，特に注目されるSK192と称する土坑，および集石遺構SX06の概略を記するのみに今回の報告は留めたい。

〔土坑SK192〕 台地の中央部で検出した径約75cmの円形を呈する土坑である。深さは約30cmを測る。 土坑内から6世紀前半の須恵器杯蓋とともに鉄製のU字形の鋤(鍬)先が完全な形で2個出土した。鋤(鍬)先は凹字形に近いものが刃を下にし，それにU字形のものが刃を上にした状態でかみ合わさる。つまり，北側に少し傾いていたが，立った状態であった。凹字形(第38図1)を呈するものは， 長さ12.4cm， 幅16cm， 刃幅3.8cmであった。 U字形(第38図2)を呈するものは，長さ12.9cm・幅16cm・刃幅3.8cmであった。杯蓋(第38図3)は，口径11.5cm，器高4.5cmを測る。立ち上がりは，やや内に傾き，端部は内傾する面をもち，稜線は鋭さを欠く。天井部の回転ヘラケズリは1/2程度である。




第 38 図　土 坑 SK192 出 土 遺 物 実 測 図

〔集石遺構SX06〕 竪穴住居跡SH145の上面で検出した集石遺構(注8)である。南北1m，東西4mの間に拳大の礫が広がっていたもので，礫とともに須恵器の四耳壺と蓋の組が2セット，破片となって散乱していた。第41図14・15が1セットと，さらに類似したものがもう1セットである。須恵器は破片となって散らばっていたが，それは須恵器が置かれた時点では完全な形をしていたのが割れ広がったものか，最初から割っていたのかは不明である。この遺構と関係すると思われる土坑等はない。この遺構の性格は，墓や祭祀遺構等である可能性があるが，これを積極的に肯定する根拠は得られなかった。



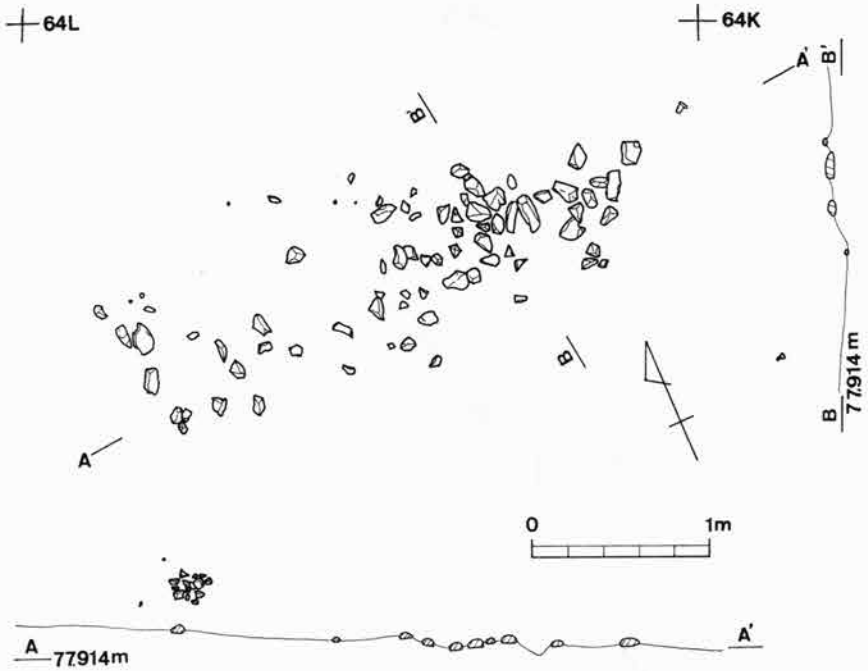

第 39 図　土 坑 SK192 実 測 図

## 4. 出 土 遺 物

今回出土した遺物は整理箱で約200箱ほどあり，弥生時代，古墳時代，奈良～平安時代，中世，近世と各時代にわたっている。これらの遺物については，現在，整理中でありすべてを報告できる段階ではないので，その一部について観察した結果を第41図及び付表3にまとめておいた。

## 5. ま と め

以上のとおり，今回は部分的な概略説明にとどまった。全体的な報告は後日に刊行する予

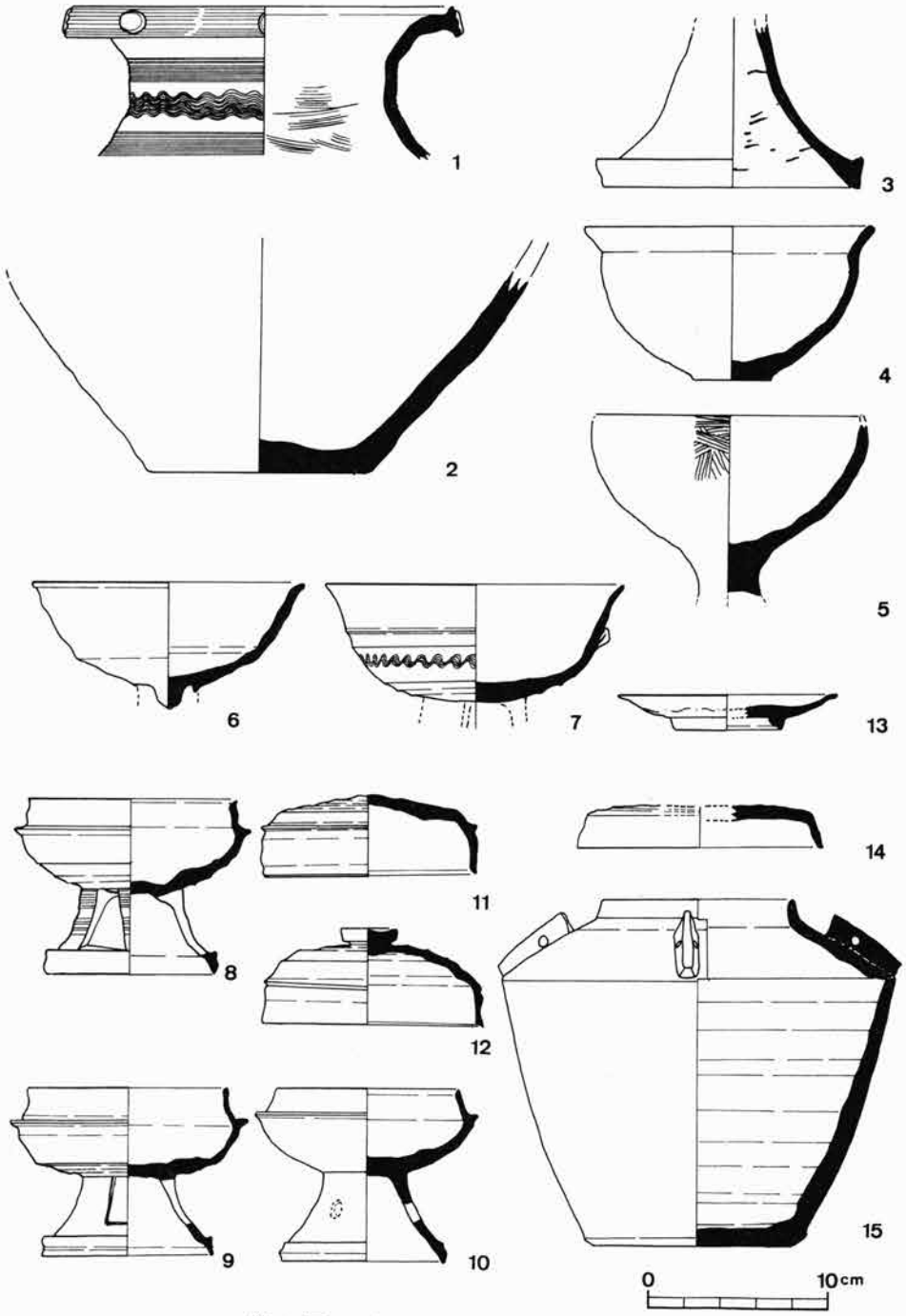



第 40 図　集 石 遺 構 SX06 実 測 図

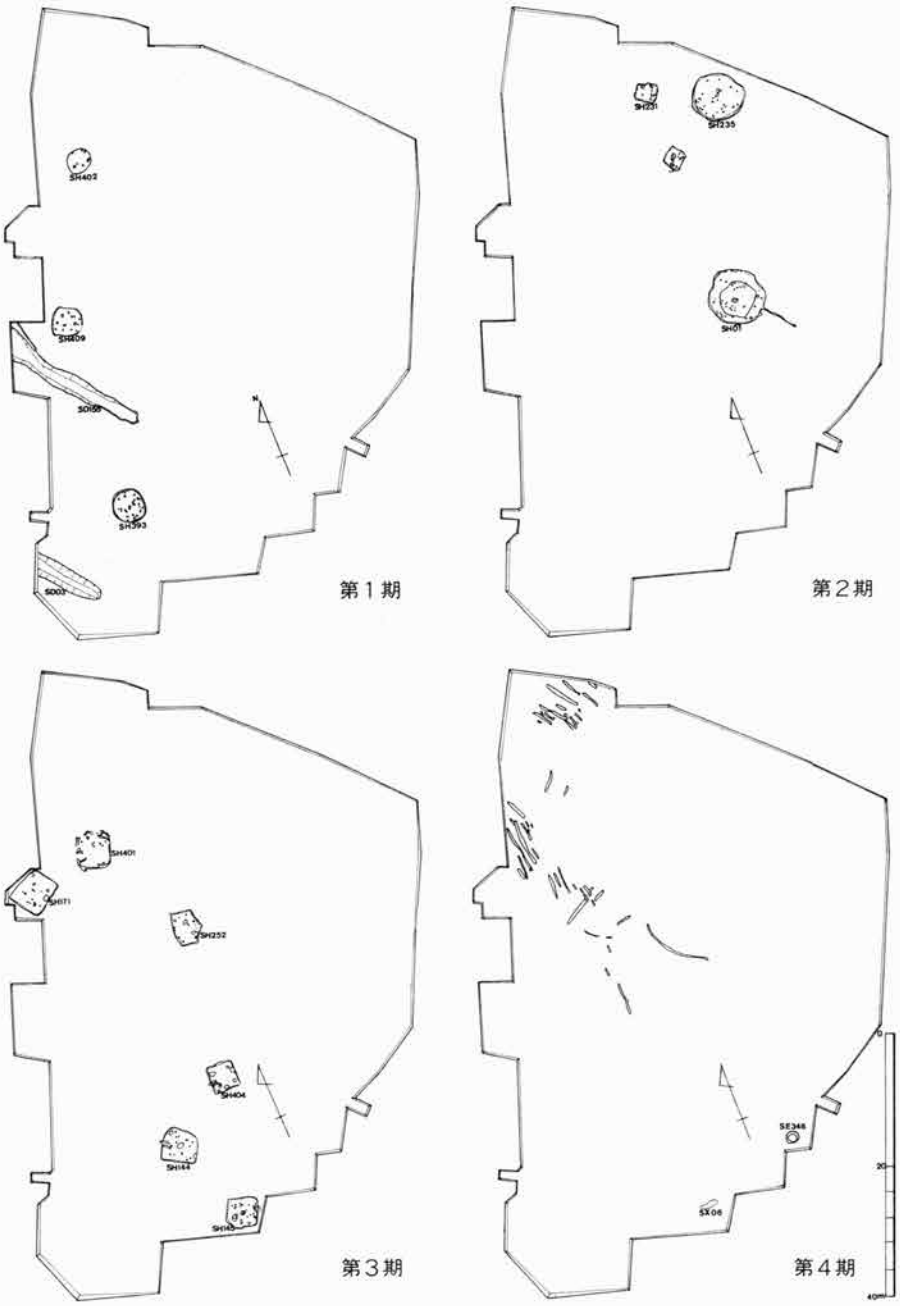
定である。ここでは大まかな要点，問題点を列記してまとめとかえたい。

① 本遺跡は弥生時代，古墳時代の居住地が中心ではあるが，中世(近世)まで何らかの形で人跡が認められる複合遺跡である。居住地という点で第42図の如く，大まかに 4 時期に当地の変遷を把えてみた。他の時期においては生産の場，また埋葬の地として利用されていたことと思われる。

② 弥生時代中期後半に当地の利用がはじまる。福知山市においては，弥生時代前期，同中期前半の遺跡，遺物は知られておらず，同中期後半になり知られるようになる。この時期の低地での住居跡は，まだ確認されていないが，近隣の春日町七日市遺跡(注9)，綾部市青野遺跡(注10)のごとく，当地域においても丘陵周辺の低地に当然存在が予想(注11)され，そうしたものと関連し，このような台地に居住地を選択したものと思われる。それは，低地の集落(拠点的集落)からの，農耕の安定，定着による人口増加，集落拡大などによる，分出・分村の結果とも捉えられる。特に，当遺跡においては，住居数からみて同時併存数は少数であることから血縁的なもので，拠点的集落と連なる一つの集団，「単位集団」が選択した居住地といえるのではないか。それと同時にこの集団が見通しのきく高地に居住地を構えた点から，拠点的な集落と関係する中で，周囲に対する「見張り」・「伝える」機能を受け持っていたと推察することも




第 41 図　出 土 遺 物 実 測 図


SH402
SH409
SD08
SH393
SD07
第1期
SH251
SH235
SH01
第2期
SH401
SH171
SH252
SH404
SH184
SH145
第3期
SE348
SX06
第4期

第 42 図　遺　構　変　遷　図

できよう。

③　弥生時代中期の２本の溝は，性格の差を推測させる。SD03は，普通居住地の端に掘られる溝と同様な性格のものと思われるが，SD155は，居住地の中央部にあり，それも途中から始まって縦断する形で延びていくものと思われ，SD03とは違った機能等の検討を要する。近隣の宮遺跡[注12]でも同様の溝が検出されており，比較検討を要する。

④　弥生時代後期においても，この居住地は利用される。拠点的集落を含め，この周辺が安定，定着して一定地域を占有していたことを物語るものであろうか。住居跡は，中期のものに比べて大型なものが出現する。遺物も他のものに比べ豊富である。それとともに，遺物が少なく推定に留まるが，同時期とした方形で小型の住居跡SH230・SH231がある。これらは，円形住居跡SH235を取り巻く形で位置するが，これを関連づけて捉え得るならば，この小型住居跡は，一集団内での一家族から分れたもの，たとえば新婚家族，成長した子供といった者が居住していたことを推定できるのではないか。

⑤　古墳時代に入ると，現在の段階では，当地の居住地としての利用が断絶するものと考える。ただし，古墳時代後期とした住居の中で，いくつかは今後整理段階で遡る可能性も否定できない。

⑥　古墳時代後期になると再び当地に住居が出現する。近畿自動車道舞鶴線関係遺跡[注13]においては，この時期の古墳や集落跡の発掘調査が何例かあり，その消長についても若干触れられている[注14]。その一連において，当遺跡は洞楽寺遺跡[注15]と相前後する時期に，同様な丘陵上に立地した点で共通している。

弥生時代中期のところで触れたように，周辺低地での調査例はなく，この居住地を選択した者をどう捉え得るかは今後の課題である。少し地域を広げてみると，当調査センターが本年度調査した福知山市の石本遺跡[注16]では，６世紀後半の住居跡が，由良川支流の牧川という河川沿いの自然堤防状の微高地で検出されている。低地と丘陵地上といった対比を含めて，様々な検討を要する。

検出した住居跡は，カマドを持つものと，持たないものがある。カマドを持たないものに関しては，時期を明確に示す遺物が不確実で，先に触れたごとく，この時期には断定できず推定に留まる。

カマドは，検出遺構で簡単に述べたが，袖部の長さ160cmを測る特異なものと，一般的に多い袖部長80cm前後のカマドを持つ（２棟）ものがある。これらのカマドの機能差，分布，系譜等の多くの検討課題があるが，さらに特異なカマドを持つ住居跡としての位置づけも検討する必要がある。

カマドを持つ住居跡は3ないし4棟であるが，住居跡の出入口は，おそらくカマドのない辺といえる。確実にカマドを持つSH144・SH404の配置と，カマドのない辺から，道の存在が予想されるのではないか。特にSH145とSH144は，カマドの取付け部が西辺と東辺で，それぞれの対辺に出入口があったとすると，この住居間に道を考えることも可能ではないか。

⑦　この調査では，溝・住居跡以外にも土坑・ピットを多く検出したことは触れた。中でも検出遺構で概略を述べたSK192は特異な例と思われる。性格については埋葬施設などが考えられるが断定できない。大阪府枚方市楠葉東遺跡で，10世紀後半とみられるU字形の鋤先を立てた特殊遺構と呼ばれるものが，瀬川芳則氏により詳述(注17)されており参考となる。

それによると，約30cm(注18)四方に木炭を敷きつめたその北辺を区割するように，U字形の鋤先が刃を上にして直立する。それは，須恵器の水瓶の肩をまたぐ形であった。中には古銭が約10枚入っていたとある。さらにこの特殊遺構の性格は，祭礼に関するもので，中でも風土記や伊勢神宮の祭事の例などから，特に「地鎮祭」遺構であるとされている。

この特殊遺構は，SK192と異なりこれ以外に遺構はない。また，時期的にもずれがあるので，単純に類例とはできないが，「スキを立てる」といった点では，ひじょうに興味深いものである。ちなみにSK192から出土した須恵器の杯蓋は，住居跡出土のものよりやや遅れるものと考えられる。

⑧　平安時代にはSX06が造られる。検出遺構で概略を述べたように，礫と土器が散乱した形で検出したものである。祭祀または埋葬に関するものと思われる。同様の四耳壺の破片が，南側の大内城跡からも出土しており，注目される。

⑨　中世，近世にかけても，遺物を含めて，ピット，溝，井戸状遺構等を検出している。ピットについては，弥生時代～中世と様々で，各時期の住居，倉庫，建物等に関係するものと思われ，慎重な検討が必要である。　（藤原敏晃）

付表3　遺　物　観　察　表

| 器種 | 器形 | 番号 | 法量 口径(cm) | 法量 高さ(cm) | 形態の特徴 | 調整技法の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 弥生土器 | 広口壺 | 1 | 20.7 | — | ◦筒状の頸部から大きく外反し上下にひらき口縁端部に至る。<br>◦端面は4条の凹線文が巡り円形浮文が並ぶ。頸部上半及び体部上半には7条の櫛描直線文が巡り，その間に同様な7条の波状文が巡る。 | ◦口縁部内はハケのちナデ調整で，頸部内面は(5本/cm)のヨコハケ。 | ◦赤褐色。<br>◦φ1～3mmの砂粒含む。<br>◦SK375出土。 |
| | 底部 | 2 | 11.8 | — | ◦平底の底部である。<br>◦壺のものと考えられる。 | ◦磨耗が激しいため不明瞭であるが，内面はケズリ，外面はミガキと思われる。 | ◦赤褐色。<br>◦φ1～5mmの砂粒含む。<br>◦SH393床面。 |
| | 脚 | 3 | 14.0 | — | ◦ラッパ状に斜下方へ大きくひらく脚部。端部は上方に拡張する。 | ◦外面はミガキのちナデ，内面はヘラケズリを回転しながら行う。<br>◦脚部端面は強くナデる。 | ◦黄褐色<br>◦φ1～3mmの砂粒含む。<br>◦SD155最下層。 |
| | 鉢 | 4 | 15.0 | 8.5 | ◦やや突出する底部から内湾しながら立ち上がる体部を経て，斜上方に外反する口縁部に至る。 | ◦磨耗が激しいため，調整は不明。 | ◦黄褐色。<br>◦φ1～4mmの長石含む。<br>◦SH235側溝。 |
| | 高杯 | 5 | (14.6) | — | ◦内湾しながら立ち上がる椀形の杯部。 | ◦外面は不定方向のハケ。1単位5本。 | ◦暗黄褐色。<br>φ1～2mmの長石。他の砂粒含む。<br>◦SH01床面。 |
| 土師器 | 高杯 | 6 | 15.0 | — | ◦斜上方へ広がる杯部はその口縁部で外反する。端部は狭い面を持ち稜を持つ。<br>◦底部中央は突起部を持つ。 | ◦内外面ヨコナデ。<br>◦ミガキについては不明であるが，平滑に仕上げてある。 | ◦赤褐色。<br>◦φ1～3mmの長石等の砂粒を含む。<br>◦SH145土坑。 |
| 須恵器 | 高杯 | 7 | 16.2 | — | ◦杯部は外反し，端部は丸くおさめる。<br>◦口縁部と底部とを分ける稜線が2本巡り，その下に7本からなる櫛描きの波状文を施す。稜線上には粘土を平板状にしたものを折り曲げて貼り付けた飾りつまみが1つ付く。<br>◦脚部はないが，長方形の透かし窓を4方に持つものである。 | ◦内面は丁寧なナデ仕上げ。<br>◦杯部の底は回転ヘラ削りである。 | ◦黒灰色<br>◦φ5mmの砂粒を含む。<br>◦SH404埋土中。 |
| | 高杯 | 8 | 11.4 | 9.6 | ◦立ち上がりはわずかに内傾する。端部は内傾する段を有する。<br>◦受け部は横にのびており，端部は丸い。体部は丸く底部は回転ヘラ削り調整。<br>◦脚部はハの字形に外反し，端部で外方に屈曲させ，さらに下方へカギ形に曲げる。端面に | ◦内面及び外面の立ち上がり，体部にかけては，回転ロクロナデ調整。<br>◦底部は回転ヘラ削りで，脚部にはカキ目がある。 | ◦青灰色。<br>◦φ1～3mmの砂粒含む。<br>◦SH144土坑。 |

| 器種 | 器形 | 番号 | 法量 口径(cm) | 法量 器高(cm) | 形態の特徴 | 調整技法の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | はわずかに凹凸がある。透かし窓は3方，三角形のものを持つ。 | | |
| | 高杯 | 9 | 10.8 | 9.3 | ◦立ち上がりは内湾してから垂直に立ち上がる。高さは2.0cm。端部はわずかに内方へ傾斜した面を持つ。<br>◦受部は水平にのび，先端は鋭く，底部は平らである。<br>◦脚はハの字形に外反し，端面はわずかに凹む。透かし窓がT字方向に三方入る。 | ◦底部は回転ヘラ削り。 | ◦青灰色<br>◦胎土中に黒雲母を多く含む。<br>◦SH144土坑内。 |
| | 高杯 | 10 | 10.1 | 9.65 | ◦立ち上がりは内傾し，端部内方へ傾斜する。受部は水平にのび先端は丸い。<br>◦体部は丸く全体に扁平である。<br>◦脚部はハの字形に外反し，そのまま端部に至っており段を作り出している。透かし窓は円形のものが3方入る。 | ◦内外面ともロクロナデ仕上げ。<br>◦底部はヘラ削りののちナデ消している。 | ◦外面黒灰色，内面青灰色。<br>◦外面には自然釉が付着。<br>◦φ1mmの砂粒が入る。<br>◦SH144中央土坑。 |
| | 杯蓋 | 11 | 11.6 | 4.5 | ◦天井部はやや丸く，体部はまっすぐのびる。長さ2.0cm。端部は内傾する面を持つ。<br>◦比較的明瞭な稜線が巡る。 | ◦天井部上半回転ヘラ削り。<br>◦他はヨコナデ。 | ◦青灰色。<br>◦φ1mmの砂粒含む。<br>◦SH145床面。 |
| | 杯蓋 | 12 | 12.2 | 5.3 | ◦天井部は丸くふくらみ，天井部中央に中くぼみのつまみが付く。稜は低く，鋭さを欠く。<br>◦体部は天井部より短く，端部は内傾する。 | ◦天井部回転ヘラ削り，下半はのちにナデ消し。<br>◦他は内外面ともヨコナデ。 | ◦青灰色。<br>◦SH144床面。 |
| 陶器 | 緑釉皿 | 13 | 11.8 | 1.9 | ◦体部は斜上方へ立ち上がり，口縁部は横に折れてのびる。端部は丸くおさめる。<br>◦高台端部は斜めに段を持つ。 | ◦緑色の釉が体部内外面の下半から高台にかけて残る。 | ◦淡灰色，釉は緑色。<br>◦包含層。<br>◦近江型。 |
| 須恵器 | 杯蓋 | 14 | 13.7 | 2.35 | ◦平らな天井部からやや斜めに体部がのびる。端部は平らに作る。 | ◦天井部ヘラ削りののち丁寧にナデ仕上げを行う。他にもナデ仕上げ。 | ◦青灰色。<br>◦φ1mmの長石含む。<br>◦SX06。 |
| | 四耳壺 | 15 | 10.6 | 19.3 | ◦平らな底から体部は斜上方に立ち上がる。肩部でくの字に屈曲する。<br>◦口縁部はまっすぐに立ち上がり，端部は丸くおさめる。<br>◦肩部には直方体の耳が4つ付く。 | ◦内外面ともにナデ。 | ◦淡青灰色 |

## (2) 薬 王 寺 古 墳 群

### 1. 遺 跡 の 立 地

薬王寺古墳群は，由良川の一支流である土師川と兵庫県側から流れる竹田川とが合流する付近の丘陵上に立地する。この古墳群は東から西へ傾斜する丘陵の，標高70～75m付近に築造されている。なお，10m下では中世墓(多保市城B地点)を検出した。

この古墳群のある丘陵からは，両河川の合流付近に発達した平野を一望することができる。特に現在の多保市・岩崎の集落への眺めが良い。

当古墳群の北西150mの位置には，中世の城跡である多保市城跡(A地点)があり，その関連施設と思われる土塁状隆起が，丘陵の傾斜方向に平行して存在していた。

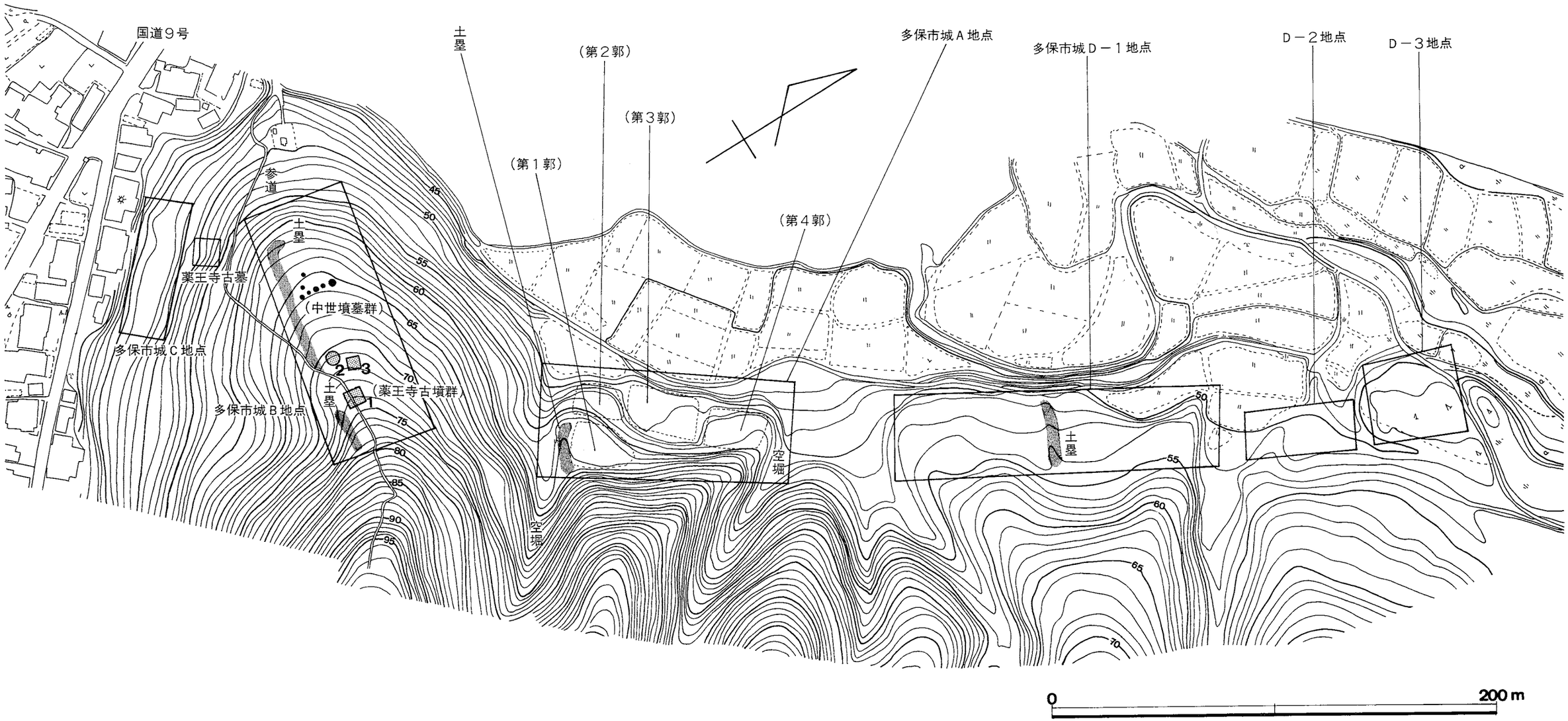
### 2. 調 査 の 経 過

調査は，樹木の伐採・撤去の後，地形測量から開始した。その際に古墳状隆起が3か所で確認されたため，古墳の存在を予想して標高の高い方から順に古墳の番号を与えた。

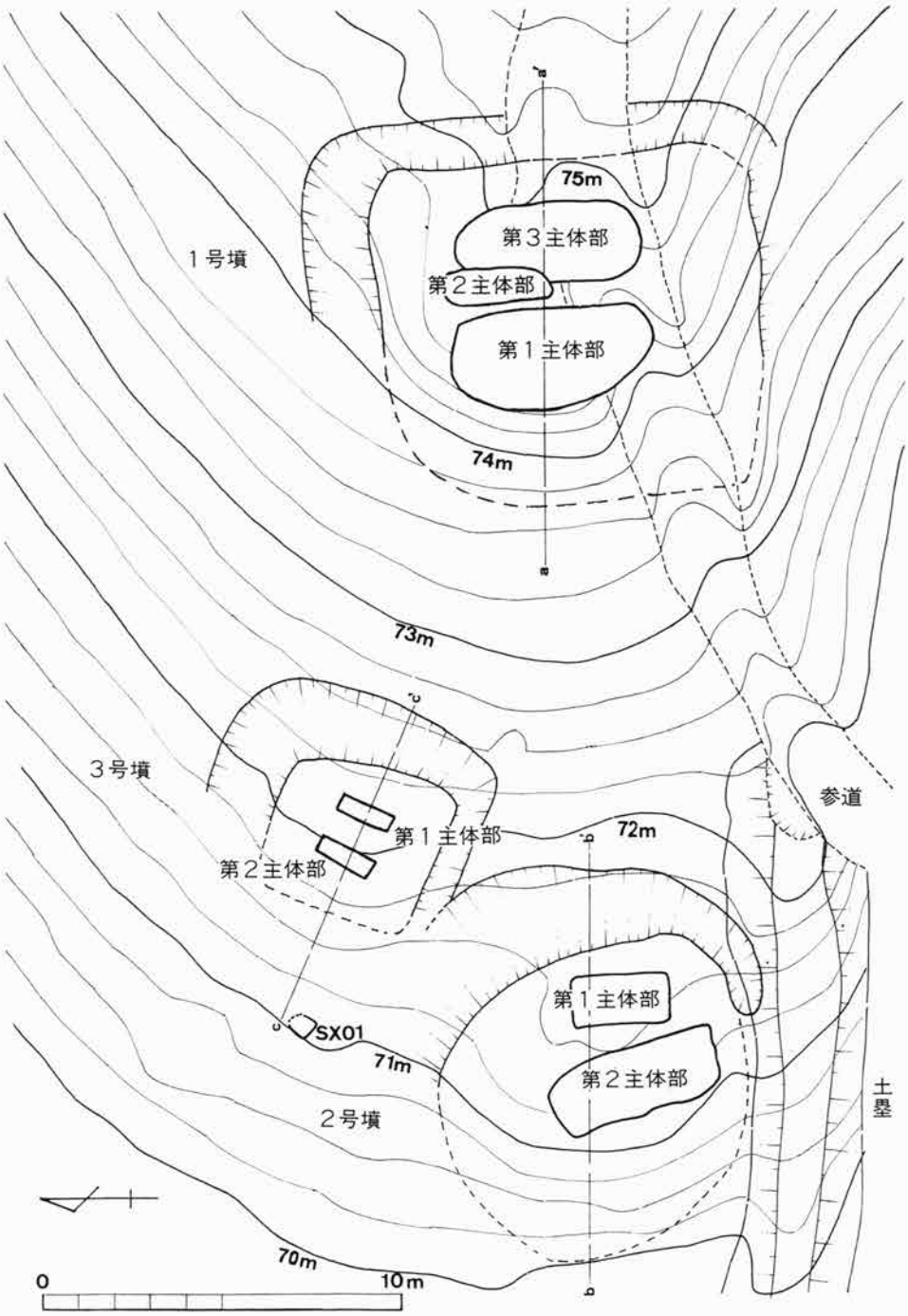
掘削は，1号墳から開始し，墳丘中央部に試掘坑を入れた。その結果，墳丘の東側で溝を，中央部西寄りで須恵器や土師器を含む土坑2つ(1×0.4m，1.5×0.6m)を検出した。当初，この2つの土坑を主体部と考えていたが，墳丘を東西・南北に断ち割ったところ，この土坑2つを含むかたちで，その下に大きな掘形が3つ存在することが，土層観察から確認された。そのためさらに平面的な追求を行った結果，南北方向に主軸をもつ主体部3基(木棺直葬)を検出した。また，墳丘の東側で検出した溝も，墳丘の周囲をめぐっていることがわかった。

2号墳は，表土を剝いだ段階で，墳丘の東側で溝，墳丘中央部に置かれた須恵器甕を確認したものの，主体部の輪郭は今一つはっきりとしなかった。そのため1号墳同様に東西・南北方向にサブトレンチを入れて土層観察を行ったところ，2つの掘形が存在することがわかった。平面的な追求の結果，南北方向に主軸をもつ主体部2基(木棺直葬)を検出した。当初確認していた須恵器甕は，この中の第2主体部を意識して置かれていることがわかった。ほかに墳丘の北裾では，中世の須恵器鉢が出土した。

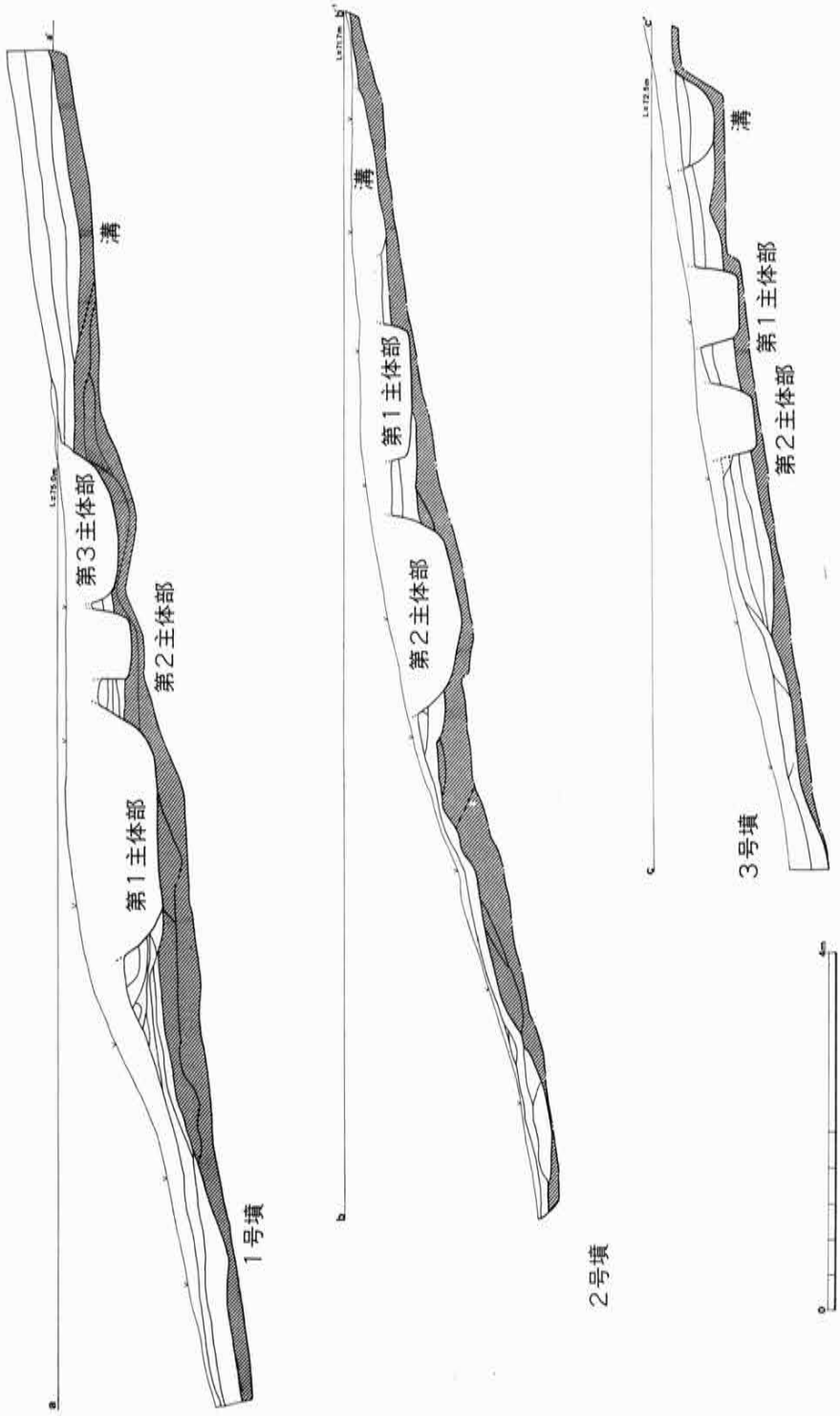
3号墳は，表土を剝いだ段階で，墳丘を画する溝と石棺2基を検出した。石棺は扁平な板石を組み合わせた箱式石棺で，墳丘の中央部に2基並んで存在した。主軸は，ともに南北方向にある。石棺は，側石・底石・蓋石から構成されるものと思われ，蓋石の大部分はすでに消失していた。遺物は，周溝内から土師器壺・椀が，墳丘西裾から須恵器甕が出土した。なお，棺内からは出土しなかった。




第 43 図　多 保 市 地 区 調 査 範 囲 図




第 44 図　薬王寺古墳群地形測量図




第45図　墳　丘　断　面　図

## 3. 検 出 遺 構

〔1号墳〕

〈墳丘〉 1号墳は，標高75m付近の緩やかな傾斜をもつ丘陵上に位置する。墳丘は，尾根の背後に溝を掘りめぐらすことによって整形しており，墳丘の南側については裾部が明確ではないが，一辺10m前後の方形を呈する古墳と考える。

〈主体部〉 主体部は，3基の木棺墓よりなる。その位置関係は，墳丘のほぼ中央に第1主体部があり，その東側に第2・第3主体部がある。いずれも南北方向に主軸をもち，尾根筋に直交する。第2主体部は，第3主体部の墓坑を削り込んで形成されており，他のものに比べ規模も小さい。

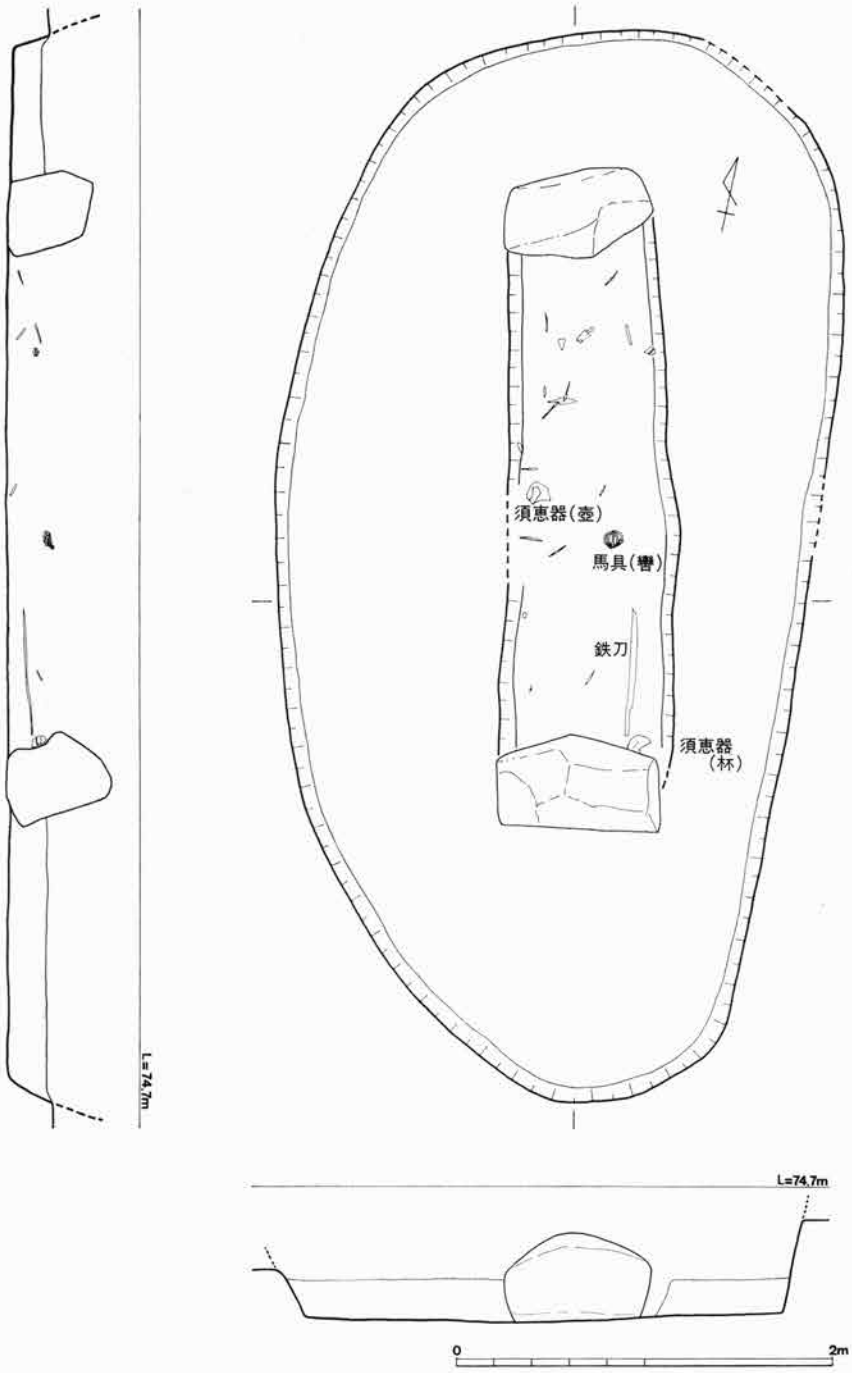
第1主体部は，長辺5.6m・短辺2.8m・深さ0.5mほどの墓坑をもち，墓坑内の棺の両木口に当る部分に礫混り粘土塊を配する。粘土塊は，土圧・自重のために両方とも北側に若干傾くが，棺の木口部にあたる部分は平坦である。そのことから両木口間は，2.6m，木口幅は，0.85mを測り，木棺も同規模と推定できる。また，墓坑床面が平坦であることから組合せ式木棺と考える。

遺物は，当初主体部と考えていた土坑および棺内から出土した。双方から出土した遺物の中には接合するものがあり，棺上あるいは墳頂部に置かれていたものが，木棺の腐朽によって落ち込んだと考える。土坑からは，須恵器杯・高杯・壺，土師器甕が出土した。棺内からは，直刀・鏃・刀子・馬具(轡)などの鉄製品が出土した。直刀は，棺内南木口付近の東寄りで出土し，刀先は北に，刃部は棺外側に向ける。棺内中央付近から北寄りにかけては，鏃・刀子・馬具が出土したが，方向やレベルがまちまちである。棺内で出土したこれらの遺物は，レベル差が最大で約20cmあり，その間に不規則に散乱しているという状況を示しており，木棺内に初めから置かれていたというよりも，棺直上に置かれていたものが落下したのかも知れない。

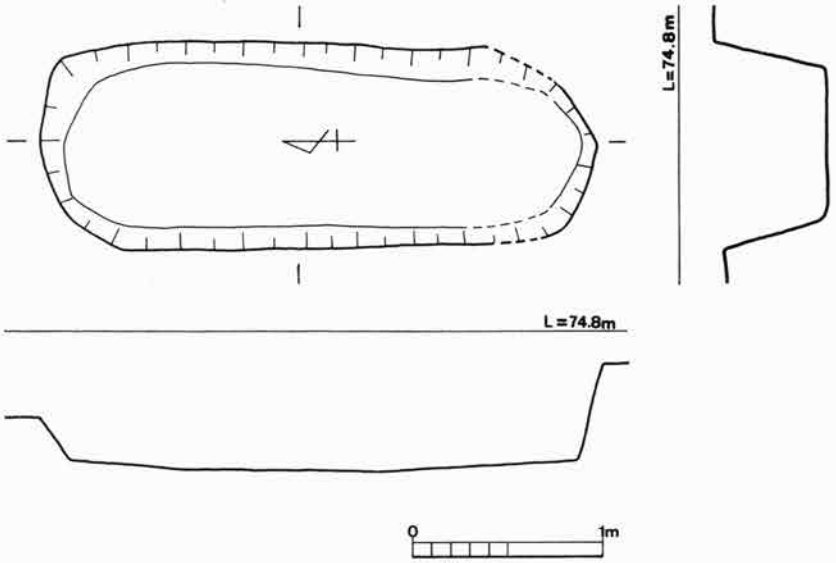
第2主体部は，素掘りの土坑で，ほぼ南北方向にその主軸をもつ。木棺の痕跡はうかがえなかった。墓坑の規模は，長辺1.45m・短辺0.55m・深さ0.3mを測る。出土遺物はなし。

第3主体部は，墳丘の東側に位置する。墓坑は2段の輪郭をもち，その規模は，一段目で長辺5.1m・短辺2.2mである。2段目は長辺3.9m・短辺1.1mを測り，検出面からの深さは0.4mを測る。墓坑の2段目に木棺を置いたものと考える。棺底が平坦なことから，組合式箱形木棺が想定される。主軸は，ほぼ南北方向にある。

遺物は，墓坑の埋土の上層で須恵器杯蓋が出土した。その出土状態から棺上に置かれていたものと思われる。墓坑の2段目(棺内)からは，須恵器杯・鉄鏃・礫が出土した。須恵器杯




第 46 図　1 号 墳 第 1 主 体 部 実 測 図




第 47 図　1 号 墳 第 2 主 体 部 実 測 図

は，棺南寄りで身と蓋がそれぞれふせた状態で2個出土した。棺底に並べた状態で置かれていたことから，枕として転用された可能性がある。鉄鏃は，棺中央部から南寄りで棺底から幾分浮いた状態で出土した。一束にかためられており，刀先は北を向く。計16本出土している。棺中央から北寄りにかけては，10～30cm前後の礫が出土しているが，平らな面を上に向けているわけでなく，用途は不明である。

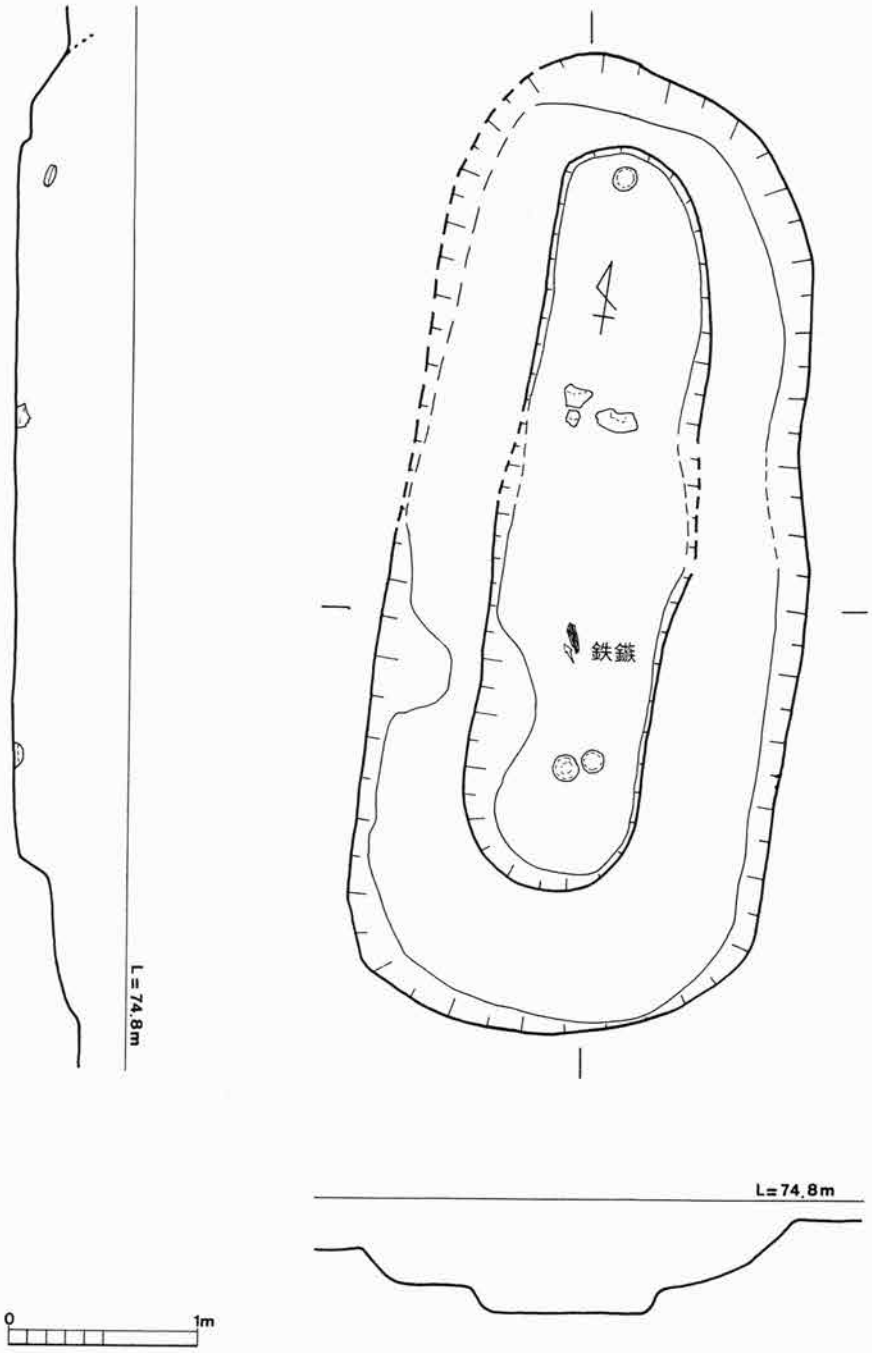
〔2号墳〕

〈墳丘〉　2号墳は，標高71m付近に位置し，その南側には多保市城跡の関連施設と考えられる土塁が認められる。墳丘は，丘尾切断の溝を周囲にめぐらせることで整形する。南側の裾が明確にできなかったが，直径8m前後の円墳と考える。

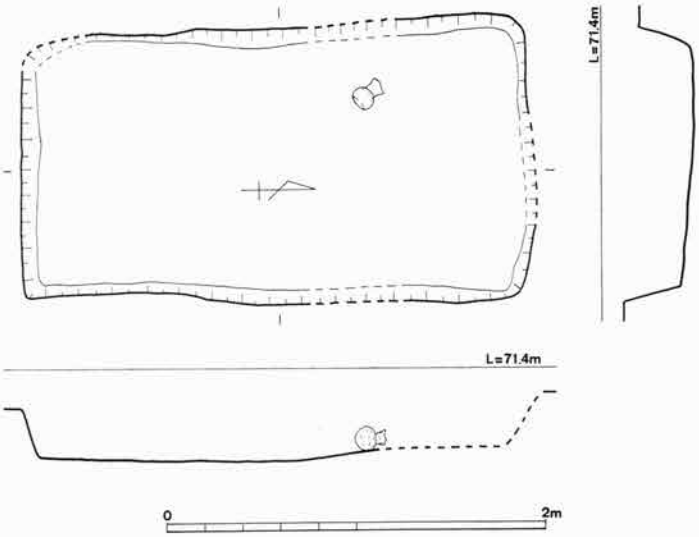
〈主体部〉　主体部は，木棺墓2基である。その位置関係は，墳丘のほぼ中央部に第2主体部があり，その東側に第1主体部がある。ともに尾根筋に直交するかたちで主体部を形成しているが，2つの主体部の主軸方向は若干異なる。

第1主体部は，墓坑が長方形を呈し，主軸は，ほぼ南北方向を指す。規模は，長辺2.65m・短辺1.45m・深さ0.3mを測る。木棺の痕跡は窺えず，その規模は不明である。墓坑の北寄り付近で，須恵器甕が横たわった状態で出土した。棺上に置かれていたものが，落ち込んだと考える。

第2主体部は，墳丘の中央部に位置する。埋葬施設は，長辺4.9m・短辺1.8m・深さ0.5




第48図　1号墳第3主体部実測図




第 49 図　2 号 墳 第 1 主 体 部

mの墓坑の中に木棺を置き，両木口部に礫混り粘土塊を配するものである。主軸は南北にあり，N32°Wである。粘土塊は，木棺の木口板があたる部分が平坦であるが，ともに棺中央に向かって内傾する。両木口間は2.6m，木口幅は北木口で0.4m，南木口で0.5mを測り，棺の規模も同様のものが想定できる。棺底が，平坦であることから組合式木棺と思われる。

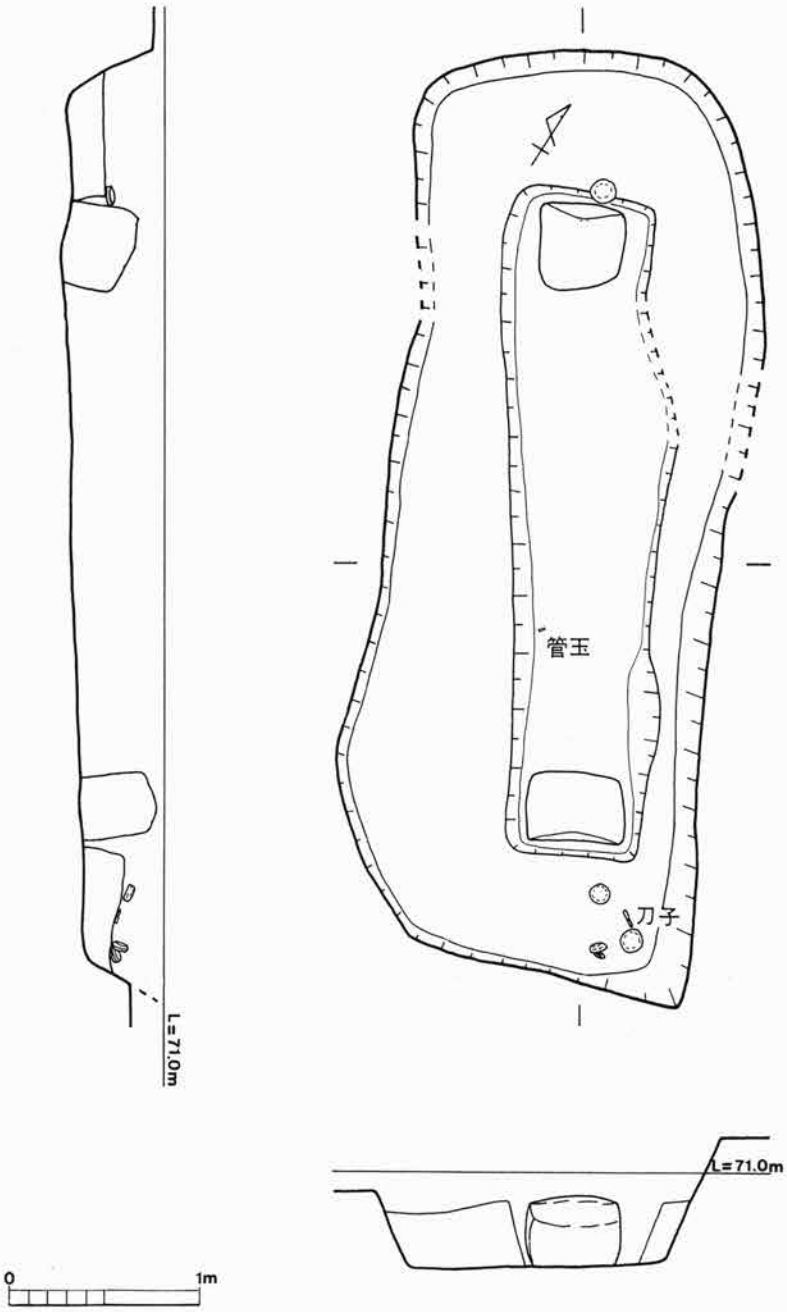
遺物は，棺上で須恵器甕が出土した。また，墓坑内からは南木口の粘土塊の南側で，須恵器杯身・蓋(3セット)，刀子(1本)が出土し，北木口の粘土塊付近では須恵器杯蓋が上を向いた状態で出土した。棺内からは，棺中央から南寄りで管玉が出土した。南木口付近の遺物群は，その出土状態から木棺の安置後に，墓坑埋土の面に置かれていたものと考える。他に墓坑を掘り下げる際にも，須恵器杯片が出土した。

〔3号墳〕

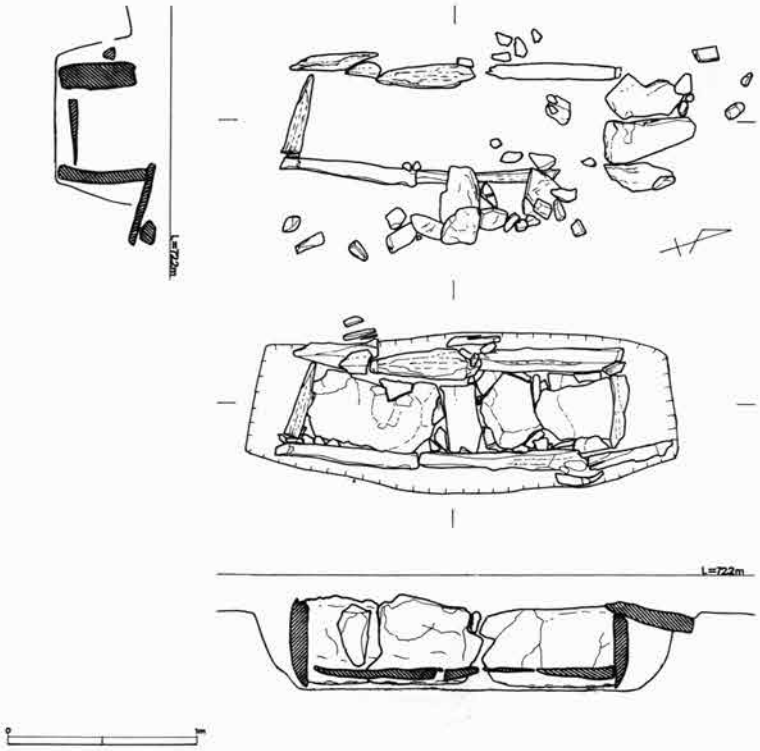
〈墳丘〉　3号墳は，標高72m付近に位置する。尾根の上方に溝を設け，墳丘を整形する。盛土はほとんど認められず，表土(腐植土と明黄褐色土)直下の黄灰色土の面から，墓坑，周溝が掘り込まれていた。墳形は方形で，一辺約5mを測る。2号墳の周溝に3号墳の周溝は切られていた。なお，墳丘西裾で須恵器甕を埋納する土坑(SX01)を検出した。

〈主体部〉　主体部は，尾根筋に直交する形で，2つの墓坑が平行してあり，埋葬施設は，組合式の箱式石棺である。両者の墓坑の切合いはない。東から第1・第2主体部と呼ぶ。

第1主体部は，墳丘中央東寄りに位置する。埋葬施設は，長辺2.2m，短辺0.6～0.7m，深さ0.4mの墓坑の中に，板石を組合せた箱式石棺を設置していた。石棺は，板石を墓坑底に直接立て並べて側壁をなし，その組合せ方は，長辺側石の内側に短辺側石をはさみ込んでいる。墓坑底には，黄褐色土を5～10cmほど入れ，その上に板石を敷いて床面を成す。蓋石は側石の一部に残るが，側石全体を構架した状態では検出できていない。側石は，長辺各3枚，




第 50 図　2 号 墳 第 2 主 体 部 実 測 図



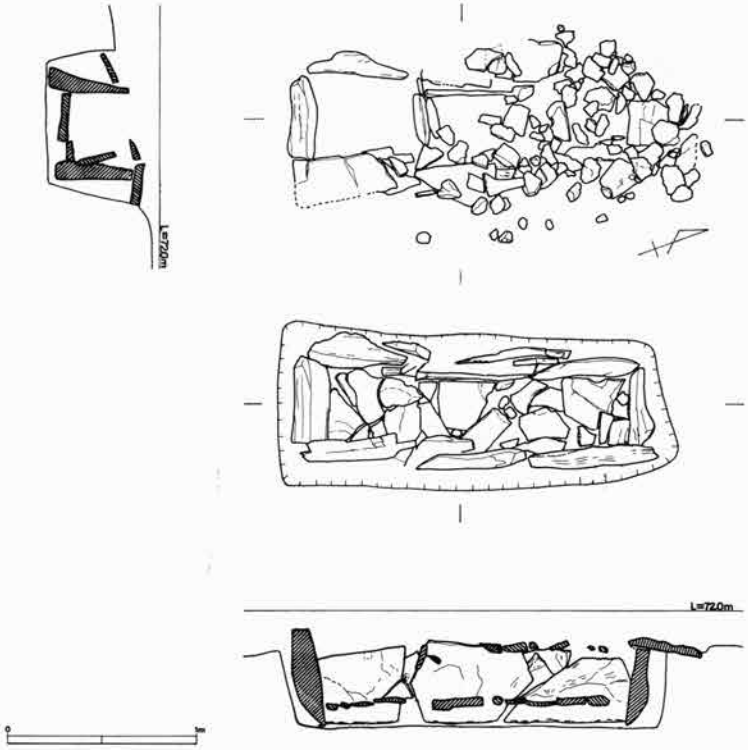

第51図　3号墳第1主体部実測図

短辺各1枚で構成されるが，底石は，大きめの板石4枚を配した後，その隙間に小さめの石を埋める。棺材の板石には，加工痕は認められず，また石棺の継ぎ目を粘土等で目貼りする工夫も窺えない。石棺の内法は，長さ1.6m・幅0.4m・北端高0.3m・南端高0.35mを測る。石棺は，南北方向に主軸をもち，N17°Eである。

遺物は，棺内，墓坑内のいずれからも出土しなかった。

第2主体部は，第1主体部の西側に平行してある。墓坑は，長辺2.1m・短辺0.7～0.9m・深さ0.5mの規模をもち，その中に箱式石棺を納める。石棺は，第1主体部と同じく蓋石・側石(長辺・短辺)・底石から構成される。側石は，長辺各3枚，短辺各1枚の板石からなり，その組み方は，第1主体部と同じで，いわゆる「H」字に組む。棺床は側石を組んだ後，黄褐色土を敷き，その上に板石を配することで形成している。底石の石材は第1主体部に比べて小さく，その数も多い。蓋石は同様に一部に残るのみである。石棺の内法は，長さ1.6m・幅0.4m・北端高0.25m・南端高0.37mを測る。

遺物は，棺内・墓坑内のいずれからも出土しなかった。




第 52 図　3 号 墳 第 2 主 体 部 実 測 図

〔土坑SX01〕 墳丘の西裾で検出した土坑である。一部にサブトレンチが入るため，その平面形ははっきりしないが，南北0.75m・東西0.65m・深さ0.3～0.35mの規模をもつ。坑底は，舟底状を呈する。坑底にほぼ接した状態で，須恵器甕が出土した。この甕は，口縁部を打ち欠いており，その出土位置から3号墳のなんらかの祭祀に使用されたと考える。

その他，3号墳の周溝内(墳丘東裾)では，土師器壺・椀(2個体)が出土した。これらの遺物は，周溝の内に一括で捨てられたものと考えられ，SX01同様3号墳の祭祀に使用されたものと思われる。

**4. 出 土 遺 物** (第53～55図)

出土遺物には次のものがある。

1号墳第1主体部

| | | | |
|---|---|---|---|
| 須恵器 | 杯身 | 2点以上 | (第54図－5，6) |
| | 杯蓋 | 2点以上 | ( 同 －3，4) |
| | 蓋 | 2点 | ( 同 －1，2) |

高杯　1点
壺　1点　（第54図—7）
土師器　甕　1点
鉄製品　直刀　1本
鏃（尖根式）[注19]　10本（第55図—1～10）
（平根式）　4本（　同　—11，13～15）
刀子　1本　（　同　—16）
馬具（轡）　1点

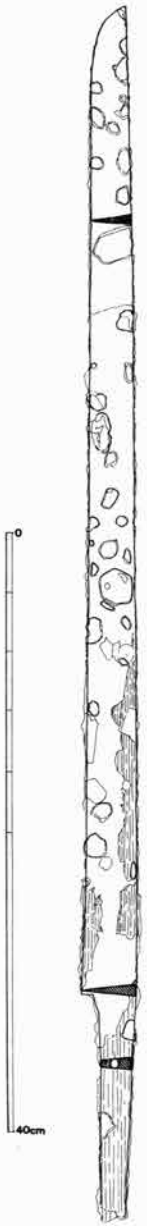
1号墳第2主体部　なし

1号墳第3主体部
須恵器　杯身　1点　（第54図—10）
杯蓋　2点　（　同　—8，9）
鉄製品　鏃（尖根式）　9本
（平根式）　1本（第55図—12）

2号墳第1主体部
須恵器　瑞　1点　（第54図—19）

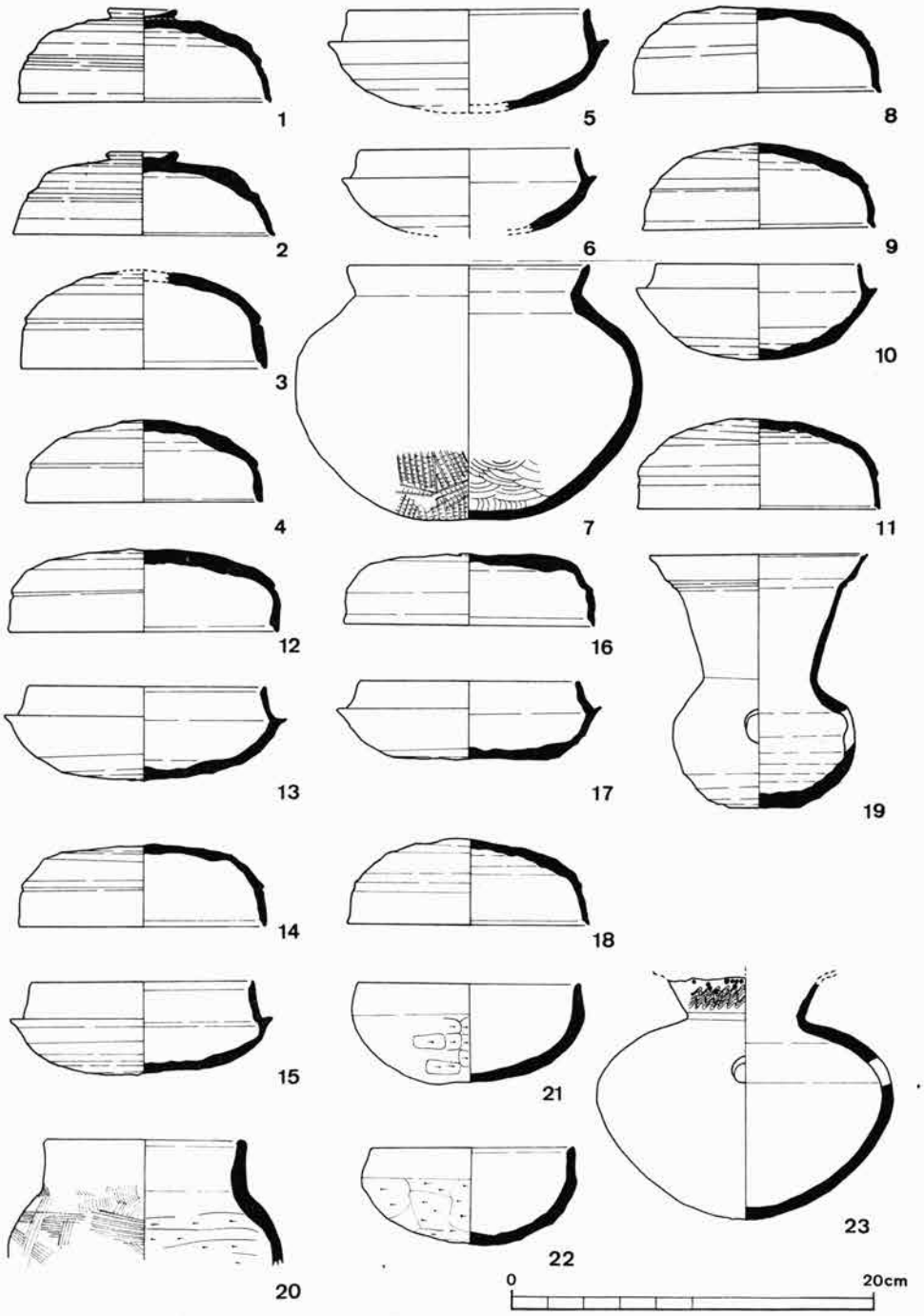
2号墳第2主体部
須恵器　杯身　3点　（第54図—13，15，17）
杯蓋　4点　（　同　—12，14，16，18）
甕　1点
鉄製品　刀子　1本　（第55図—17）
管玉　1点

3号墳
須恵器　瑞　1点　（第54図—23）
土師器　椀　2点　（　同　—21，22）
壺　1点　（　同　—20）



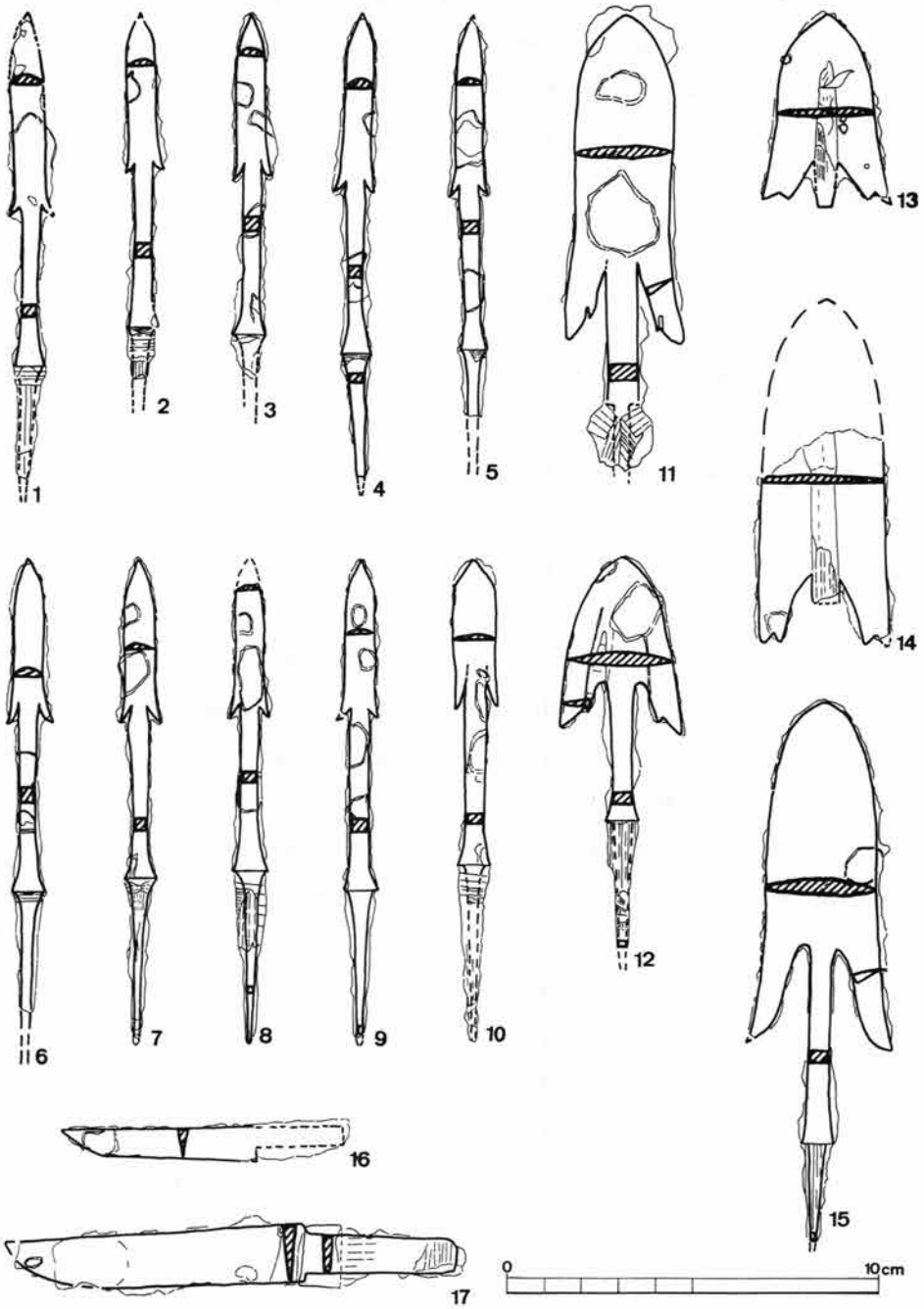
第53図
出土遺物実測図(1)

これらについて少し説明を加えると，須恵器杯身は，たちあがりは内傾気味で，底部のヘラ削りの範囲は，底部全体の1/2～2/3近くに及ぶ。杯蓋は，天井部と口縁部とを分ける稜線はにぶく，凹線を設けるものも見られる。9・10は，1号墳第3主体部棺内出土の遺物で，ともに棺底に伏せた状態で置かれていた。12～17は，2号墳第2主体部の墓坑内(南木口付近)から出土し，それぞれでセットになる。須




第 54 図　出 土 遺 物 実 測 図 (2)

1～7：1号墳第1主体部(棺上)，8：1号墳第3主体部(墓坑内)，9・10：1号墳第3主体部(棺内)，11：1号墳墳丘，12～17：2号墳第2主体部(墓坑内南木口付近一括)，18：2号墳第2主体部(墓坑内)，19：2号墳第1主体部(墓坑内)，20～22：3号墳(周溝内)，23：3号墳(SX01)




第 55 図　出 土 遺 物 実 測 図 (3)

1～11・13～16：1 号墳第 1 主体部，12(一部のみ)：1 号墳第 3 主体部，17：2 号墳第 2 主体部

恵器は，概ね田辺昭三氏の変遷観に従えば，MT15型式に対応する。ただ甕の19，23を比べた場合，明らかに型式差が認められ，23は一型式ほど古い様相を呈す。(注20) 他に鉄製品が多数出土しており，刀・馬具・鏃・刀子がある。現在整理中のため，第53・55図ではその一部のみを掲げた。これらは，改めて本報告の際に取り上げたい。

## 5. ま　と　め

薬王寺古墳群の調査の成果を簡単に整理してまとめとしたい。

①当古墳群は，3基以上の古墳から構成される。

②墳形は，方形のもの(1・3号墳)，円形のもの(2号墳)に分けられる。

③墳丘は，丘尾切断の溝をめぐらせ，若干の盛土を行うことで成形しており，その規模は6～10mと小さなものである。

④主体部は，石棺・木棺という埋葬施設は異なるものであるが，いずれも一墳丘複数埋葬である。

⑤1号墳第1主体部・2号墳第2主体部は，組合式の木棺が想定されるもので，両木口部には，礫混り粘土塊を配していた。この型式の木棺は，福知山市内では，由良川流域の稲葉山古墳群，中坂古墳群などの主体部の中に認められるものである。

⑥3号墳の主体部は，組合せ式の箱式石棺であった。棺内からは遺物が出土していないため時期が決め難いが，墳丘裾出土の須恵器(甕)は，6世紀初頭の様相をもつものである。

福知山市内での箱式石棺は，稲葉山9号墳，八ケ谷古墳，宝蔵山4号墳(第3主体部)で知られているが，いずれも4世紀末から5世紀前半代と古い時期のものである。京都府北部で同様の時期の箱式石棺として知られているものには，網野町岡3・4号墳，同勝山古墳，同新浜2・3号墳がある。

⑦墳丘の規模・立地，副葬品の量・質から1号墳第1主体部の優位性がうかがえる。当主体部には，多数の土器類とともに鉄製馬具・直刀・鏃・刀子が副葬されていた。

⑧当古墳群は，出土した遺物から6世紀初頭から前半代に築造されたものと思われ，主体部では石棺→木棺，墳形では方形→円形という推移が認められる。　　(山下　正)

## (3) 薬 王 寺 古 墓

### 1. 遺跡の立地

薬王寺古墓は，土師川を見下ろすことのできる丘陵地の腹部にあり，この下には多保市城跡C地点，また上には多保市城跡B地点，薬王寺古墳群などが点在する。調査前の形状は，丘陵腹部に約10mの平坦面が続いており，その一部に角礫で構成された径6m・高さ約1mの高まりがあった。このすぐ横には，江戸時代の年号もみえる数基の墓があったので，あるいは墓標をもたない古墓ではないかとの疑いがもたれ，調査を実施することとなった。

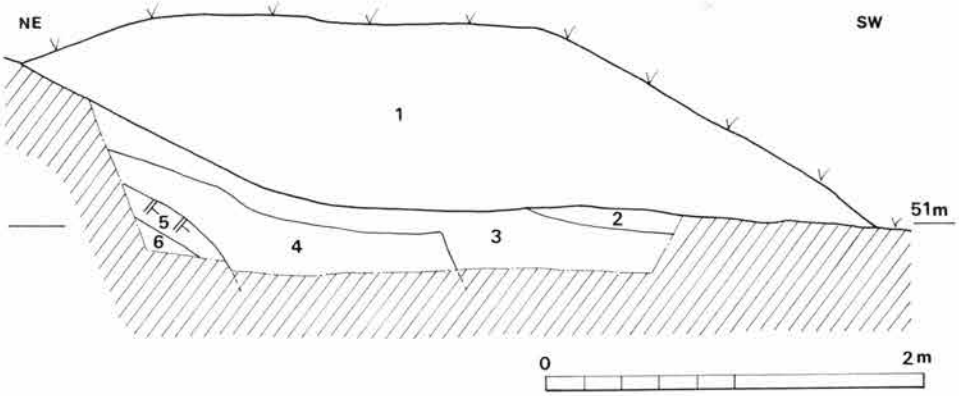
### 2. 調査概要

調査は，まず現状写真を撮影し，平板測量を行なった後，掘削にとりかかった。腐植土を除去し，西部が一部分墓地移転の際の掘削で壊されていたので，ここから少しずつ角礫を取り除いていった。西半分を旧地表面まで下げたが，角礫のあり方に規則性はなく，古墓の可能性は低くなった。次に旧地表面を掘り下げ，下部に遺構がないか確認を急いだが，その結果，人為による穴を発見することができた。

しかし，その穴に堆積した土を観察したところ，ごく近い時代に埋没したことが読みとれた。おそらく穴も角礫の堆積も近代以降の作業であったと思われる。

調査地近辺には，岩が露出している所があり，石を切り出した痕もあることから，あるいは，これらの遺構はその作業に関連したものかも知れない。今回の調査の結果，分布調査によって，薬王寺古墓と名付けられたこの地点は，古墓としての性格が認められないことが判明した。

(伊野近富)




第56図 土 層 断 面 図

1. 角礫 2. 黄褐色土 3. 暗褐色土 4. 黄褐色砂質土 5. 黄褐色土
6. 黄褐色粘質土(地山)

## (4) 多 保 市 城 跡

### 1. 遺 跡 の 立 地

多保市城跡は，福知山市多保市打越ほか，にある中世の城跡である。竹田川と土師川が合流する地点を見下す絶好の地にあり，川を挟んだ対岸には，鎌倉時代の建物跡が発見された城ノ尾城館跡や，その西には同時期の墳墓(宮遺跡)があり，さらに西には平安時代末から室町時代まで使用された大内城跡などがあり，中世の遺跡が密集した地帯といえる。

城跡の本体部分は，上記二河川によって形成された平野に口を開けた谷に面している。特に，田畑を隔てた向いには大池があり，水を牛耳ろうとした豪族の意図を知ることができる。江戸時代中期に編纂された『丹波志』には，「一古城　打越山ト云　多保市村　大池谷奥也古城主大槻阿多之助子孫有(以下省略)」とあり，かつては，大槻氏の居城であったようである。

現在，確認できる城跡は，大きく２つに分けることができる。ひとつは高所にある詰城で，今ひとつは低所にある居館である。詰城は，居館から約100ｍほど上がった丘陵尾根上にあり，２郭によって構成されている。後ろには高さ２～３ｍの土塁があり，さらに後ろには丘陵を切断した幅約３ｍの空堀がある。郭は10×15ｍぐらいの狭いもので，戦乱の際の逃げ城としてのみ使用されたと思われる。居館は，現田畑より５～10ｍほど上がった台地上にあり，４郭が集合した中心部分と，この両側にそれぞれ土塁のある平坦地とによって構成されている。今回発掘調査の対象となったのは，この居館部分である。まず，中心部分をＡ地点と仮称し，その南西にあるもっとも見晴らしの良い部分をＢ地点とし，このＢ地点から土師川方面へ降りた所にある平坦地をＣ地点とした。そして，Ａ地点の北東にある広い台地部分をＤ地点とした。

### 2. 調 査 経 過

発掘調査は，路線内部分のみ実施した。調査方法としては，便宜的にＡ・Ｄ地点は道路公団の中心杭STA385＋20を基準とし，磁北に合わせた後４ｍ方眼で割り付けた。Ｂ・Ｃ地点は，薬王寺古墳の調査杭を援用して全体を４ｍ方眼で割り付けた。その後，各地点で試掘調査をした結果，Ａ地点は全面調査，Ｂ地点は平坦地を中心に，Ｃ地点は平坦地の半分を，Ｄ地点はほぼ平坦地全面を調査することにした。調査地の基本的層序は，腐植土・黄褐色土・黄褐色粘質や礫質の地山となっている。ほとんどの場合，地表面から10～20cmぐらいで遺構面及び地山に到達したが，Ａ地点では腐植土直下の場合や，反対に盛土のため１ｍ以上掘っても地山に到達しないところもあった。発掘作業は，ほとんど人力によったが，Ｄ地点では

遺構面まで土木機械を使用した。

遺構面を精査した結果，A地点では建物跡を検出した。また，先に少し触れたように，大規模な切土と盛土作業が行われていたことが判明した。遺物は少量であったが，14～15世紀のものが主流であった。B地点は調査前の状況では平坦地にいくつかの土饅頭を認めることができたが，腐植土を除くと礫石で上部を被った墓であることが判明した。最終的には14基の墓を確認した。遺物は僅少であったが，13世紀後半から14世紀にかけてのものが出土した。C地点は，もっとも土師川寄りに造成した郭と推定していたが，結局，これを積極的に肯定する成果は得られなかった。しかし，A地点と同様に切土と盛土作業が行われていたことが判明したので，城の一部と思われる。D地点は，小さな谷水田によって台地が三か所に分割されており，南から北へD－1，D－2.，D－3地点とそれぞれ仮称することにした。

D－1地点は，丘陵の上部をカットして平坦地を造っており，その中心部に土塁状隆起があった。さらに南側(A地点の対岸)でも土塁状の高まりがあり，A地点を中心として，B地点とD－1地点に土塁を築き，防御を固めていたと推定できる。土塁周辺の下層からは，弥生時代の住居跡や奈良時代の柱穴及び土坑を検出することができた。D－2，D－3地点からは，遺構は検出できなかったが，多量の奈良時代の土器を発見することができた。この谷の奥には同時期の多保市廃寺があり，今後新たな視点を与える結果となった。

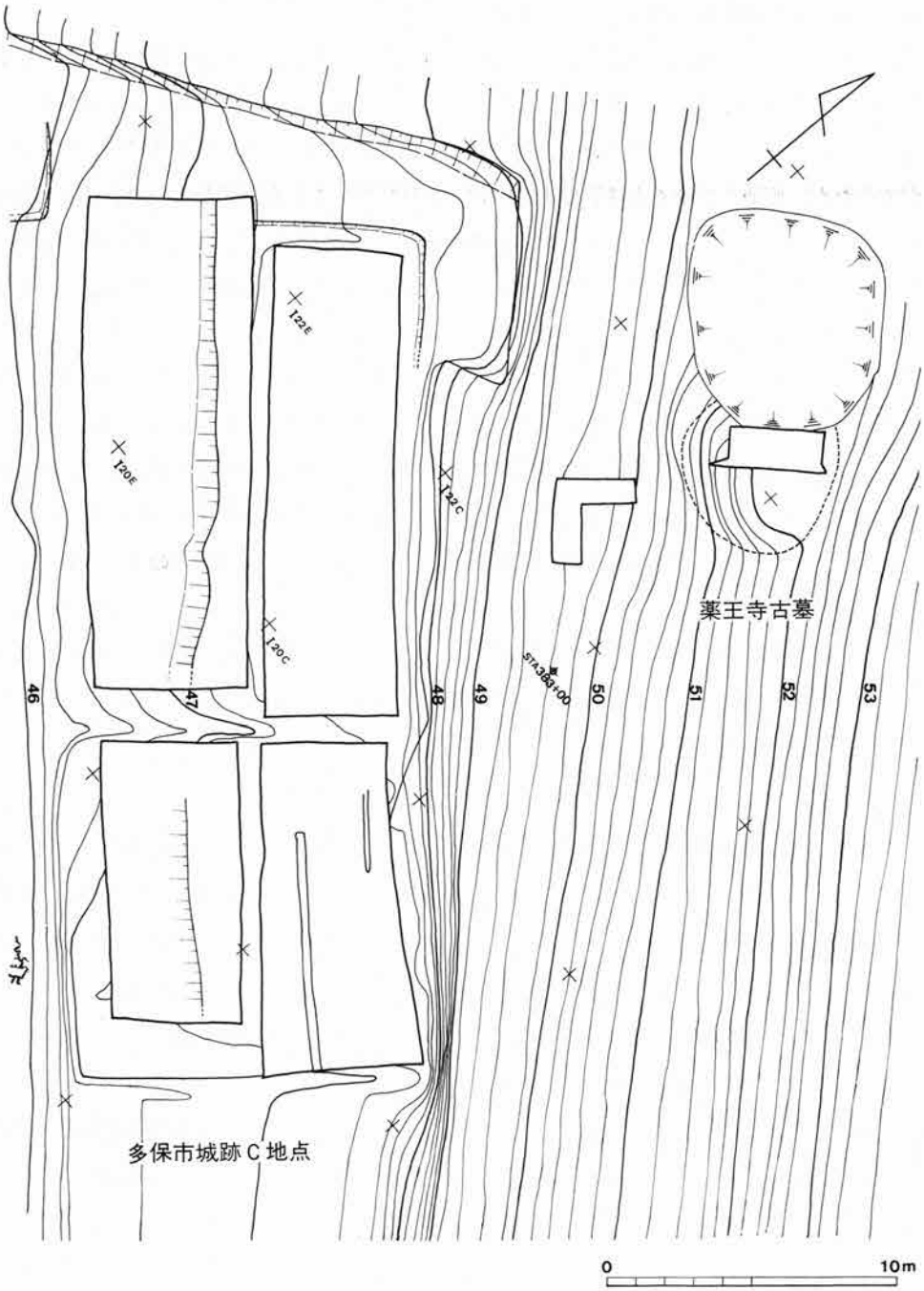
### 3. 各地点の成果

〔A地点〕

多保市城跡の居館部分であるA地点は，前述したように4郭によって構成されている。そして，郭から大池に向かって左右両側は，切り込んだ谷が自然の空堀となっており，さらに左側には土塁を築き，特に南からの攻撃に対して防御を固めている。つまり，南から北にかけての築造状況は，谷(自然の空堀)－土塁－郭－谷(自然の空堀)となっている。

郭は，もっとも高所にあるのを第1郭として，その北西にあるのを第2郭，北にあるのを第3郭，更に北を第4郭とした。

まず，第1郭についていえば，北東隅が一段高く，調査前の地上観察でも矢倉(櫓)台と推定できたが，調査によって自然石を利用した簡単な礎石建物があったことが検証できた。そして，縁辺は石を貼りつけていたことも判明した。また，平坦地部分にも建物が存在したらしいが，礎石等が動いていたため，規模は確定できない。南端には土塁が築かれており，上辺幅で約1.5m，郭内からの高さは1～2mである。この土塁は，A地点より10m以上高いB地点からの攻撃を防ぐためのもので，丘陵部から第1郭，さらには当初は第2郭までも続いていたらしい。なお，主郭の大きさは北東－南西が約30m，北西－南東が約20mで，北辺




第 57 図　　薬王寺古墓・多保市城跡Ｃ地点地形測量図

が狭い台形をしている。

第2郭は，第1郭より2mほど下がった所にあり，規模は北東一南西が約23m，北西一南東が約15mで，東辺がやや長い方形をしている。いくつかのピットは認められたが，建物として把握できるものはない。遺物は近世・近代の染付等を発見したが，これは居館が廃絶した後のものである。

第3郭は，第2郭より約2.5m下がった所にあり，規模は北東一南西が約32m，北西一南東が約19mで，長方形を呈する。遺物は僅少であり，また遺構も不明確である。しかし，その後，土層確認のための断ち割りを実施したところ，丘陵の一部を削り，その土を丘陵下部に運び埋めたてていたことが判明した。郭の北西隅で確認した埋めたては，厚さ約1.4mに及ぶ。

第4郭は，第3郭より約1.5m高い所にあり，規模は北東一南西が約22m，北西一南東が約14mで長方形を呈する。郭の中央部から南部にかけてピットを検出した。およそ，南北方向に7間(柱間2～2.1m)，東西方向は4間分検出した。掘立柱建物を構成するかどうかは不明確である。ピット内の埋土は茶褐色混礫土で，瓦器片や鉄釘などが出土した。

〔B地点〕

B地点は，今回調査した多保市城跡の中で，もっとも眺望の利く位置にある。土師川を見下ろす位置にある土塁は，幅3m・高さ1mあり，その形状はD－1地点や，川を隔てた宮遺跡などの土塁と類似している。これは，低い土塁である点と，断面を観察すると黄褐色砂質土のほぼ単一層によって形成されている点を挙げて指摘することができる。この遺構の年代を示す遺物は出土していないが，近辺で出土する遺物の主たる年代は，13～14世紀のものであり，一時期に構築された可能性が高い。

B地点で発見された墳墓は，10～30cm大の円礫（河原石）を方形に並べ，高さ20～30cmにしたもので，表面観察では2～3基を確認しただけであった。ところが，腐植土を取り除いた所14基を確認するに至った。これらは，3グループにまとめることができる。主に位置関係から分類したものであるが，今，仮にA～Cグループと呼称して，以下記述を進める。

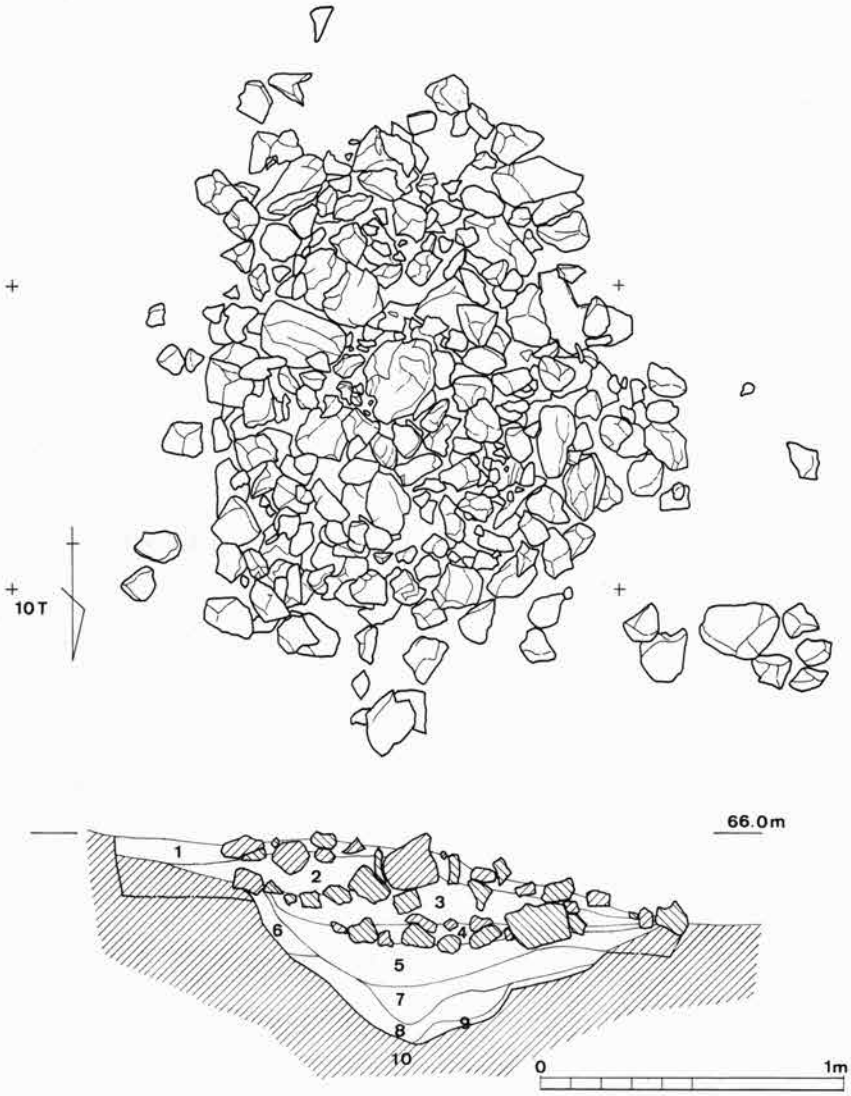
Aグループは，SX01・02・03・04・06・07の6基で，この内，前4基が南北方向に一列に並んで築かれている。平面規模は，もっとも小さいSX02で一辺約90cmであり，もっとも大きいSX03で一辺約240cmである。SX06・07は，それぞれSX01・03の北西に築かれており，規模も小さく従属的である。

Bグループは，SX09の単独墳墓だけで，Aグループとは8mほど離れているが，延長線上にある。

Cグループは，SX05・08・12の3基で構成されている。Aグループの西6～12mの地点に

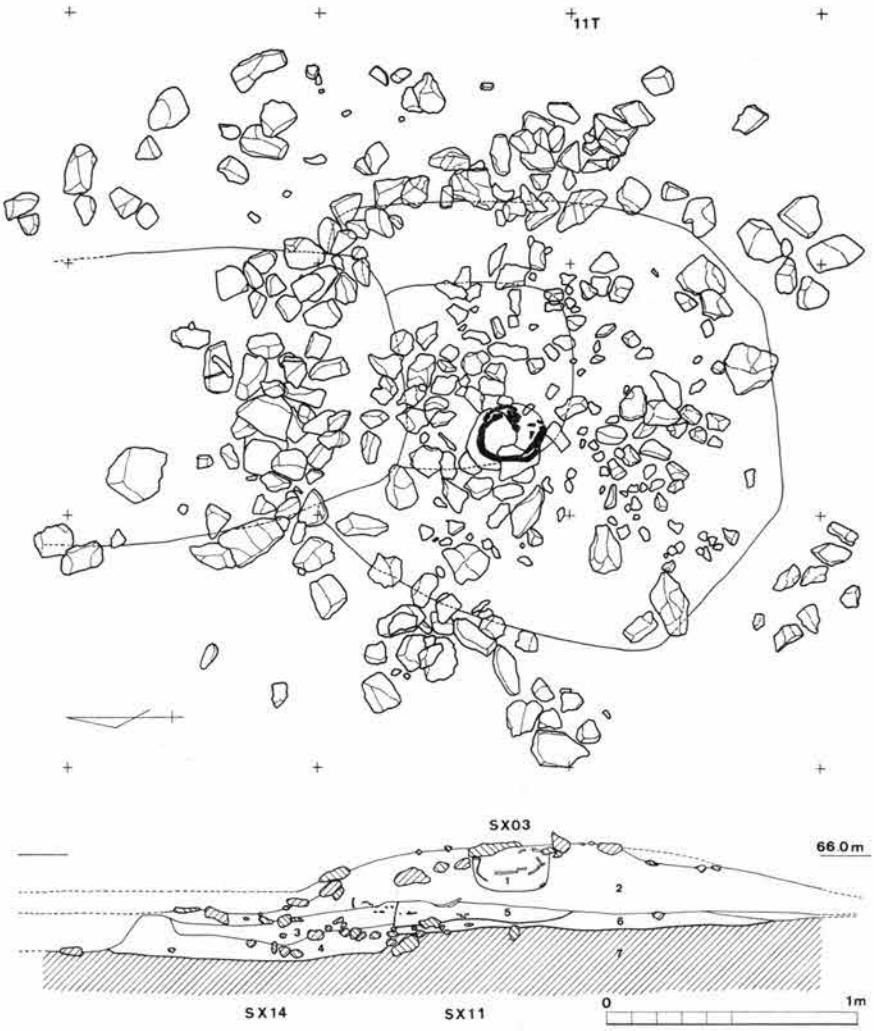
あり，特にSX12は円礫を置かず，骨片を散らしたような状態であった。他のグループとは違い，集石の輪郭は長方形を呈している。

これらのほか，離れた地点でSX13・14がそれぞれ単独で築造されていた。SX13は，薬王寺2号墳の墳丘裾にあり，SX14は，同古墳から南へ100mほど下がった所にある。いずれも




第58図　B地点墳墓SX01実測図

1. 暗黄褐色土　2. 暗黄褐色砂質土　3. 暗黄褐色土　4. 暗褐色土　5. 暗黄褐色土　6. 暗褐色土　7. 暗褐色土　8. 暗黄褐色(砂混じり)土　9. 黒色粘質土　10. 黄褐色(礫混じり)土




第 59 図　B 地 点 墳 墓 SX11 等 実 測 図

1. 暗黄褐色土　2. 暗褐色粘質土　3. 黄褐色土(骨含む)　4. 暗茶褐色土
5. 明茶褐色土(骨含む)　6. 黒褐色土　7. 暗黄褐色土

一辺0.8～1mほどの方形の集石墓である。

これらの墳墓の築造方法は，まず方形土坑を掘り，土を充塡しながら骨を埋め，20～30cmほどの土壇を形成した後，最後に石を貼りつけるというものである。蔵骨器が明確であるのはSX03のみであるが，SX09では鉄釘が遺存しており，木製蔵骨器を使用した場合のあることが知られる。なお，卒塔婆等の木製標示物があった可能性は否定できないが，五輪塔等の石造物のあった可能性はない。今回の調査地内の墳墓で骨片が確認されたのは，SX02・03・04・12の4か所である。

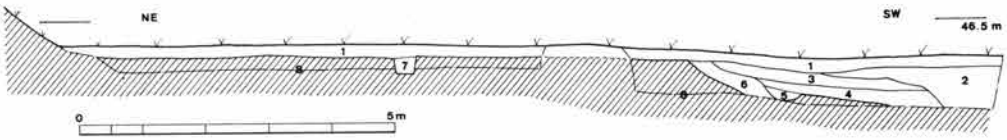
〔C地点〕

調査は，他と同じくまず現状写真を撮影し，平板測量を実施した後に掘削を行った。徐々に地表の腐植土を除去していくと，調査地を二面に区画する溝が明確に出現した。幅は狭く簡便なつくりであるので，地境のための溝である可能性が高い。さらに掘り進めていくと，地表下約10cmほどで，丘陵上部では地山(黄褐色砂礫層)が露出し，丘陵下部はまだ腐植土を含んだ土が堆積していることが判った。このため，一部を断ち割って土層の把握に努めた。この結果，調査地南端では地山が露出するのは約90cmと深いことがわかった。つまり，丘陵上部をカットし，同下部に土砂を運び，盛土したことが確認できた。この地業がいつ行われたのかは，残念ながら整地層の中から遺物がほとんど出土しなかったことから不確定であるが，整地層上面で発見された遺物は，江戸時代後期以降であるので，少なくともそれよりは古いとは言える。

〔D地点〕

D－1地点は，D地点の中でもっとも広い平坦地で，南北約100m，東西約30mの広さがある。この内南北80m・東西22mの範囲を調査した。中央には土塁があり，これは丘陵斜面の途中から台地の端まで，等高線に直交して築かれている。遺構は特に土塁の南側に集中していたが，時期的には弥生時代から奈良時代まで断続的にあり，鎌倉時代と推定している土塁とは直接関連はしない。竪穴式住居跡4基以上，一列に並ぶピット群(奈良時代)，焼土坑などの遺構が発見された。また，1か所に50個ほどの土錘を埋めた土坑もあった。奈良時代のものか。焼土坑は，特に土塁の北側に集中していた。一辺約70×110cmの長方形で，深さ約30mである。土坑の壁は焼けており，かなり高熱であったことがわかる。いづれの焼土坑も無遺物である。

D－2地点は，D－1地点から幅20m弱の谷を隔てた北にある。南北約40m，東西約20mの半円形をした台地である。D－1地点よりは2mほど低い。表土を除去すると，すぐに円礫を多量に含む暗褐色土となり，この層の中から多量の奈良時代の須恵器が出土したが，ベースとなる土層は円礫が多く，遺構は検出されなかった。




第 60 図　C地点土層断面図(トレンチ東南端)

1. 暗灰褐色土　2. 黄褐色土　3. 暗褐色土　4. 暗褐色土(赤色粒を含む)　5. 暗褐色土(黒味強い)　6. 暗黄褐色土　7. 暗灰褐色土　8. 黄褐色粘質土(地山)

D－3地点は，D－2地点から幅約15mの谷を隔てた北にある。南北約30m，東西約30mの台地で，ここでも表土の直下から多量の円礫を含む暗褐色土となり，遺構は検出されなかった。

## 4. 出 土 遺 物

多保市城跡を明確に物語る遺物は乏しいが，それでも，土師器皿・瓦器鉢・青磁椀・宋銭などが出土した。

まず，A地点の出土遺物について略述する。宋銭は，5枚出土した。その内，明確なものは祥符元宝(1008年初鋳，以下同じ)，景祐元宝(1034和)，皇宋通宝(1039年)，元豊通宝(1078年)の4枚である。

瀬戸皿（第61図1）は，口径11.6cm，器高2.6cmで，黄緑色の釉がかかるものである。

青磁椀（第61図2・3・6）は，口縁部外面に，普通雷文帯と呼ばれる文様を有する龍泉窯系の製品である。3は外面上部に粗雑な雷文を施し，下半は粗雑な蓮弁文を施している。内面にも粗雑な花草文を表現している。釉色は淡緑色で，口径は推定14.2cmである。

土師器皿（第61図4）は，口径7.7cm・器高1.9cmで，奇麗に仕上げた淡褐色のものである。口縁端部には油煤が付着しており，灯明皿として使用されたことがわかる。第1郭盛土出土。これは京都産と思われ，内膳町跡編年(注21)によれば15世紀に入るものである。

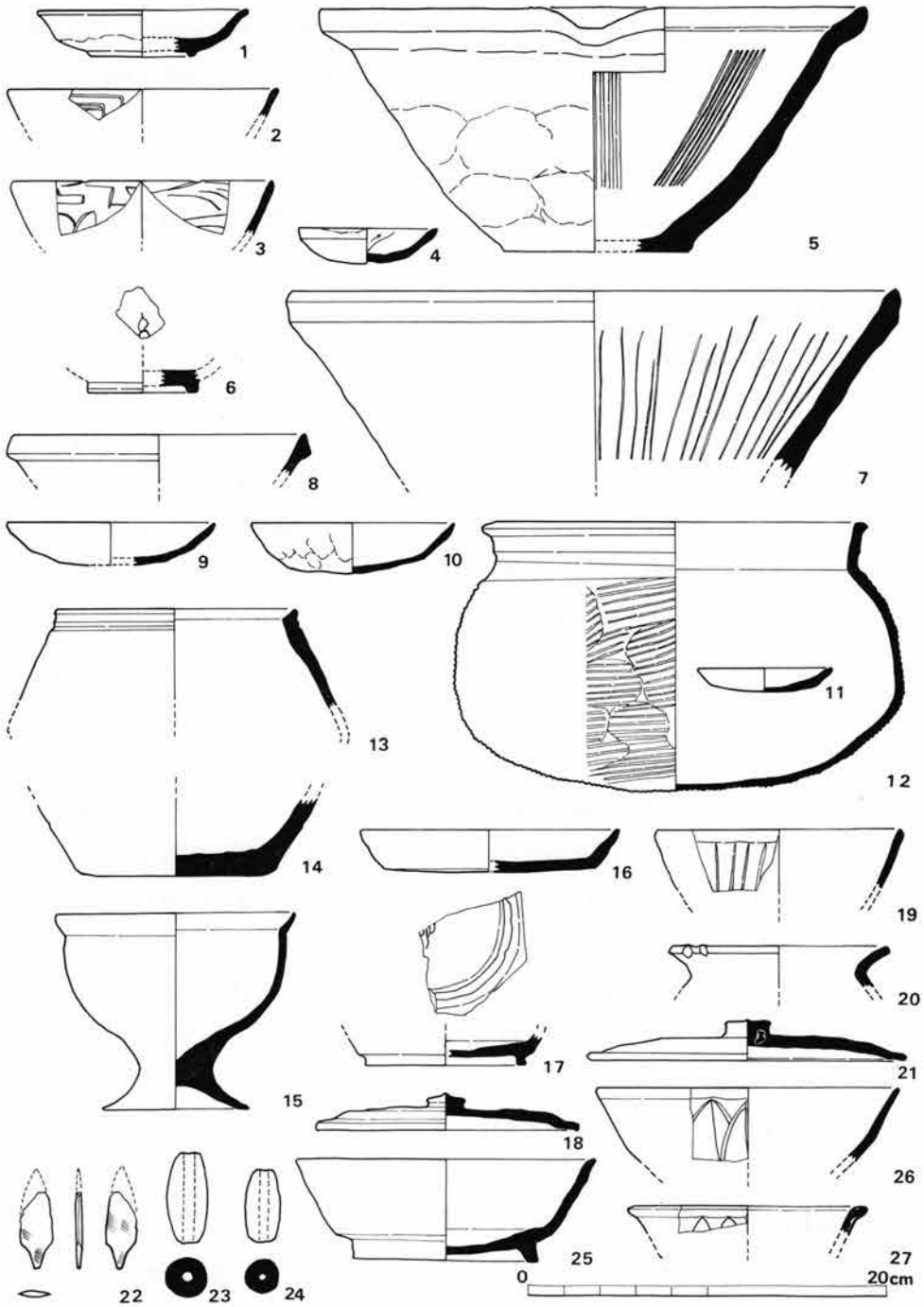
瓦器鉢（第61図5）は，口径30.2cm・器高13.5cm(推定)で，口縁端部がやや外反し，口縁部内面に一条の沈線を有する。内面には幅3cmに7本の条線を1単位とし，推定8か所に施文されていたらしい。底部付近は使用痕が顕著で条線は磨滅している。表面は黒灰色，断面は灰色である。体部外面は掌で押さえて形態を整えているので，あるいは内型を使用し，成形していたかも知れない。菅原正明氏が分類(注22)した大和国のタイプに近いが，口縁部は外反してはいないので，本タイプは丹波国内のどこかで製作された，いわば「丹波型」のものかも知れない。時期は比較資料に乏しく限定はできないが，15・16世紀であろう。第1郭盛土出土。口縁部は4/5残存。片口鉢である。

丹波焼鉢（第61図7）は，内面の条線を1本1本ヘラで刻んだもので，第1郭から出土した。色調は淡橙色で，口径は34cmである。年代は14・15世紀であろう。

次いで地B点の出土遺物について述べる。

中国製白磁碗（第61図8）は，表面採集品である。釉色は，わずかに灰色がかった白色である。太宰府の森田・横田分類のⅣ類(注23)で，年代は12世紀後半と思われる。口径16cm。

土師器皿（第61図9～11）は，いずれもSX03から出土した。色調は淡褐色である。口径は11cm程度の中皿と，7.5cmの小皿とに分かれる。13世紀後半～14世紀頃か。




第 61 図　出　土　遺　物　実　測　図

A地点(1～7)，B地点(8～13)，D地点(14～27)
1：瀬戸皿，2・3・6・19・26・27：青磁碗，8：白磁碗，4・9・10・11：土師器皿，
12：土師器鍋，5：瓦器鉢，7：丹波焼鉢，13・14・15・20：弥生土器，16：須恵器皿，
17・25：須恵器杯，18・21：須恵器蓋，22：磨製石鏃，23・24：土錘

土師器鍋（第61図12）は，SX03で蔵骨器として使用されていた。外面は，左下がりのタタキ技法で成形されており，口縁端部はやや丸味を帯びてはいるが，直線的に外に屈折している。13世紀後半～14世紀前半か。

C地点は特筆すべき遺物はなく，D－1地点の出土遺物について説明する。

弥生土器（第61図14・15）は，無頸壺(14)と，台付鉢(15)がある。無頸壺は調査地の南にある溝(SD84）で検出した。口径は13.4cm。色調は暗黄褐色である。台付鉢は竪穴住居跡(SH120）で検出した。色調は黄茶褐色である。口径は13cm，高さは11.2cmである。22の磨製石鏃は溝SD48から出土した。材質は粘板岩系である。

奈良時代の土師器には皿(16)がある。これは土坑(SK124）から出土した。色調は赤褐色で，口径は14.2cm，高さは2.3cmである。同時代の須恵器には高台付杯身(17・25)と蓋(18)がある。17は遺物包含層から出土した。色調は灰色である。上半は欠損しており口径は不明だが，底部は遺存しており，この外面には墨書の跡を認めることができる。1字分の下半が残存しているのみで，内容は不明瞭である。25は土坑(SK55)から出土した。色調は青灰色である。口径は16.4cm，高さは5.6cmである。18は土坑(SK87)から出土した。色調は青灰色で，外面端に重ね焼きをした跡がある。口径14.6cm，高さ2.1cmである。これらの土器群はおおむね奈良時代後半と思われる。これらと同時期の土錘(23・24)が土坑から50個以上出土した。一網の土錘の単位を示しているのであろうか。孔の径は6～8mmである。

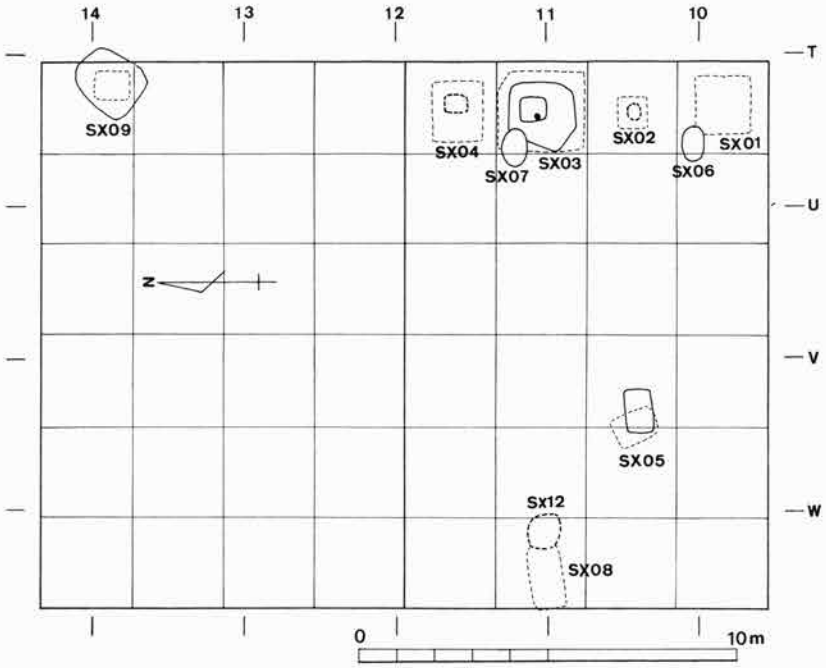
中世の遺物としては，龍泉窯系青磁椀がある。黄褐色の地山直上から出土した。胎色は灰色で釉色は灰色がかった濃緑色である。外面にはヘラによる簡略化した蓮弁文を施している。口径は13.4cmである。年代は15世紀後半～16世紀であろう。

D－2地点は，D－1地点と同様の奈良時代後半の須恵器のほか，弥生時代の甕が出土した。色調は茶褐色である。口径は推定11.8cmである。

D－3地点は，奈良時代～平安時代前期の須恵器蓋が出土した。色調は灰色で，口径は17.6cm，高さ2.3cmである。このほか，中世の遺物として青磁椀・杯(26・27)が出土した。いづれも龍泉窯系の縞蓮弁文椀・杯である。26は肉厚な蓮弁文である。胎土の色は灰色で，釉色は灰色がかった暗緑色である。上田氏や小野氏の編年[注24]によれば，13世紀末～14世紀初の製品である。27は26に比べて肉厚な蓮弁文ではなく，やや退化した傾向を示している。胎土の色は灰白色で，釉色はくすんだ青緑色である。14世紀後半か。

### 5. B地点の墳墓群

今回の調査によっていくつかの新知見を得ることができた。今後に残された課題は大きいものがあるが，以下，墳墓に焦点を当てて今後の研究方向の指針としたい。




第 62 図　墳　墓　配　置　図
実線：土坑の輪郭　破線：集石の範囲　太い破線：骨の集中範囲

B地点の墳墓の配置に注目してみると，一定の法則にのっとっていることがわかる。つまり，墳墓の位置を表示する集石はいずれも方形もしくは長方形に置かれており，しかも一列に並んでいるようにみえる。3章の各地点の成果で分類した中で，Aグループはもっとも規格性に富んでいる。今これを基準に8尺(2.4mとする)等間の枠を作り，墳墓の配置図と重ね合わせてみると，第62図のようになる。もっとも細い点線は集石の範囲を表わし，実線は土坑の輪郭，太い点線は骨片の範囲を，SX03の中心にある黒丸は蔵骨器(土師器鍋)の位置を示している。この図で読みとれることは，SX01・SX02・SX03・SX04がそれぞれ8尺の枠にすっきりと収まることである。BグループもCグループも，おおむね枠内に収まることがわかる。このように，B地点の墳墓は8尺の墓域をひとつの単位とする意図のもとに築造したことがわかる。そして，AグループにはSX01とSX06，SX03とSX07の重複関係が認められ，これらもおおむね8尺の墓域の中で収めていることから，縁者(二世代か)が同じ墓域に葬られたと推測できよう。Aグループはこれら近親者とおそらくひじょうに近い者達の墓域(4ブロック)といえ，BグループやCグループもまた，それぞれ血縁集団の墓域と把握できるのではないか。

大胆に考えてみると，この墳墓群は地縁的な関係をもつ3つの血縁集団が，8尺の枠の中

に計画的に造墓した結果といえる。これらの墓がひとつの村のものか，もっと大きい六人部荘という範囲のものかは決定できないが，このような規模の墓は，13～14世紀に限定しても，山田館跡，宮遺跡などで発見されており，中世の大内村，宮村，多保市村とそれぞれ対応していることが理解できる。したがって，現段階の調査成果によれば，多保市村の長およびこれに準ずる人達の墓といえよう。有力農民もしくは地侍の墓というのが，もっとも可能性の高い推定である。

## 6. ま　と　め

今回，多保市城跡の調査によって城の変遷と，それ以前の遺跡の存在が確認できた。ここで時代別に把握してみよう。

弥生時代は，D—1地点に居住していたようであるが，詳細は今後の整理作業によって把握できよう。中期末の遺物が多いようである。同時期の遺跡は，奥谷西遺跡・大内城跡・宮遺跡などがあり，集落が点在していたといえる。

奈良時代～平安時代前期は，D—1・2地点に居住しており，遺物の量からすれば集落があった可能性がある。竪穴住居は1基確認されており，また1網分の土錘が出土したことから，居住の拠点であったといえよう。今後，掘立柱建物の組み合わせを考える必要がある。

平安時代の遺物は末期のものとして，白磁椀や図示していないが須恵器鉢がある。単独出土で意味は不明である。鎌倉時代後期にB地点の墳墓は造られる。おそらく城の施設もこの頃に造営が開始され，南北朝の動乱期に確立されたらしい。この後16世紀前半までは遺物が確認されるが，これが多保市城の終焉を示しているかは，未調査の本体部分もあることから確定はできない。

（伊野近富）

注１　作業員(大内地区)　芦田実雄・井上光治・竹内　実・中司順太郎・堀　一三・堀　一夫・堀嘉寿・堀喜太郎・堀　憲三・堀　佐一・堀三治郎・堀　俊治・堀俊太郎・堀　竹三・堀　只志・堀　好一・吉田義男・堀　利夫・片山サワ子・片山すゑ・竹内千枝子・土田和子・土田初江・土田美千代・土田美也子・土田ゆき子・土田としえ・土家筈恵・中司てる子・中野千代の・堀あいの・堀　昌子・堀　綾子・堀恵美子・堀　きみ・堀コトエ・堀千恵子・堀みさえ・堀美智子・堀ゆき子・堀よしえ・堀ヨシエ・堀美津野・山本美喜子・吉田光子・西躰香代子
(多保市地区)　大槻実太郎・大槻太重・大槻佐一・和田銀太郎・芦田精一・芦田一男・芦田庄五朗・芦田重五郎・芦田重郎・広野喜一・大槻かつ枝・大槻正子・芦田満寿枝・芦田しげの・大槻まさの・大槻みゑ・塩見ヤエノ・大槻美代野・芦田よし子・芦田阿や野・芦田志津乃・芦田八重子・大槻としゑ・芦田富子・大槻まつゑ・芦田志ず・芦田もとゑ・田渕ミヨ・芦田ひな代・芦田ふみの・大槻ちえの・大槻一代・大槻和枝・大槻まさえ・大槻あつ子・広野いつ子・広野さがの・和田歳子・芦田とみ枝・芦田とき（順不同，敬称略）

注２　調査補助員・整理員　国木健司・杉山司郎・黒石哲夫・須田九三・千原　毅・今川俊之・安野哲也・永田真也・中坪央暁・中井英策・佐藤　敦・西町達也・中井　靖・小笠原博実・谷口学・堀　芳長・植村浩昭・高橋法和・安達秀樹・芦田秀樹・小林　学・大槻祐己・和田浩二・竹原智之・土田理也・川村一裕・細見成喜・浜口和宏・和田信三・繁田　豊・北山利勝・堀祐子・大西宏美・藤田知子・浅田和美・加藤典子・芦田秀代・北山由美・藤田たまみ・堀　美幸・家元恵子・中司晶子・和田美香・芦田淳子・塩見佳子・吉良弘子・原　敦子・真下　操・藤本昌子・井村祐子・大槻敦子・田中好美・今川貴美・川本美保・田中春美・大槻由美・大槻まなみ・室田桜子・芦田江美子・土家かおり・今川エミ・外賀清子（順不同，敬称略）

注３　伊野近富「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(1)大内城跡(『京都府遺跡調査概報』第１冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注４　岩松　保「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(3)ケシケ谷遺跡(『京都府遺跡調査概報』第10冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984

注５　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡では17か所の調査が実施されている。

注６　注４に同じ

注７　近藤義行「森山遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第６集　城陽市教育委員会)　1977

注８　検出した状況は散乱していたが，本来は一つに集っていたものと考え，集石遺構とした。

注９　村川義典『春日町七日市遺跡』春日七日市遺跡発掘調査団　兵庫県春日町　1984

注10　山下潔巳他「青野遺跡Ａ地点発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』第２集　綾部市教育委員会)　1976

注11　岩松　保「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(1)洞楽寺遺跡(『京都府遺跡調査概報』第10冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984

注12　辻本和美「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(3)宮遺跡(『京都府遺跡調査概報』第１冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注13　昭和54年度以来17遺跡が調査されている。

注14　注11のまとめに若干触れられている。

注15　注９に同じ。

注16　辻本和美「福知山市石本遺跡の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第14号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984.12

注17　瀬川芳則「スキを立てるまつり」(『同志社大学考古学シリーズⅡ　考古学と移住・移動』)　1985

注18　紙面の都合により，大まかにまとめた。

注19　後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」(『人類学雑誌』54-4)　1939

注20　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ　1966

注21　平良泰久ほか「平安京（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財調査概報』京都府教育委員会)　1980

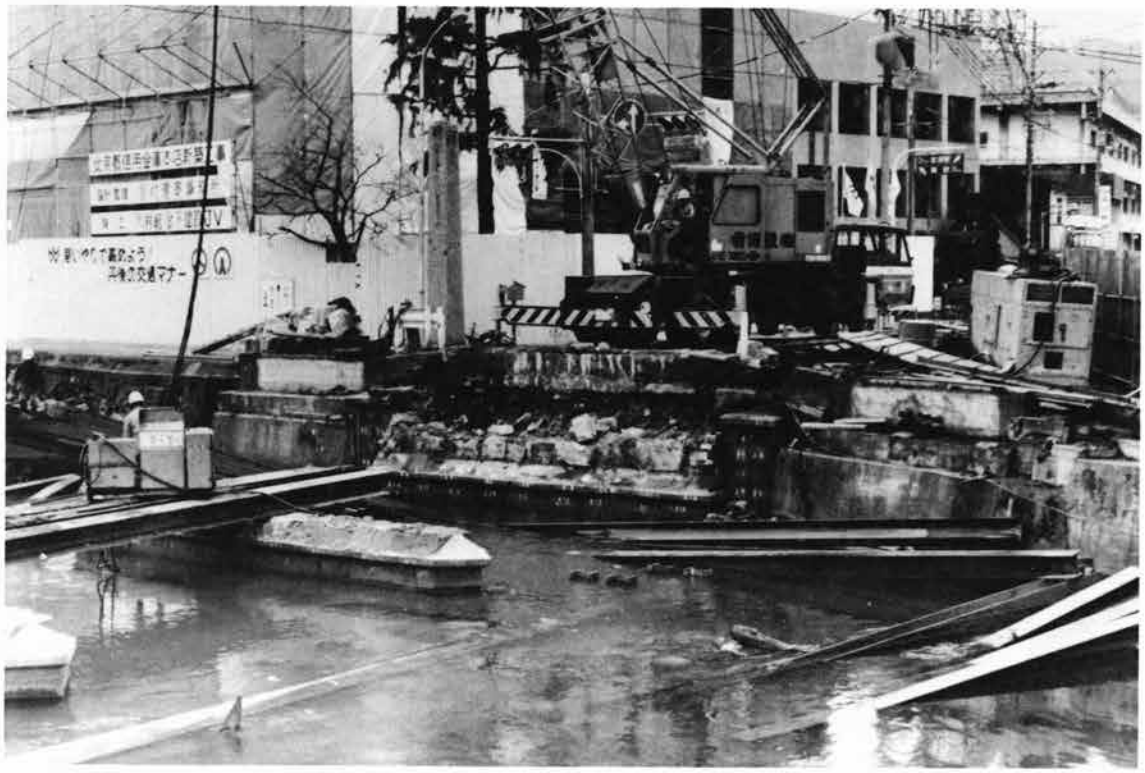
注22　菅原正明「畿内における中世土器の生産と流通」藤沢一夫先生古稀記念『古文化論叢』　1983

注23　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」(『九州歴史資料館研究論集』4)　1978

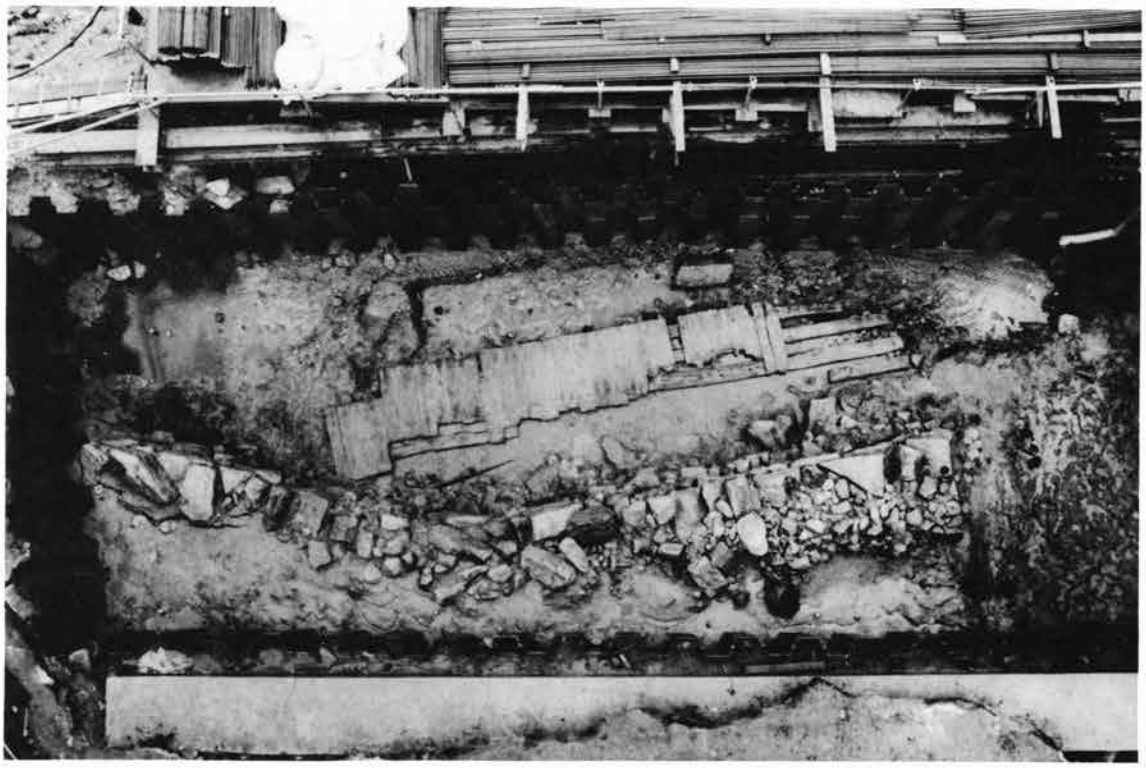
注24　上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」小野正敏「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No.2)　1982

# 図　　版

図版第１　　宮津城跡第４次



(1)　大手川右岸トレンチ調査前（西南から）



(2)　新・旧外堀石垣全景

図版第２　　宮津城跡第４次

(1)　新・旧石垣接続部

(2)　旧石垣および胴木

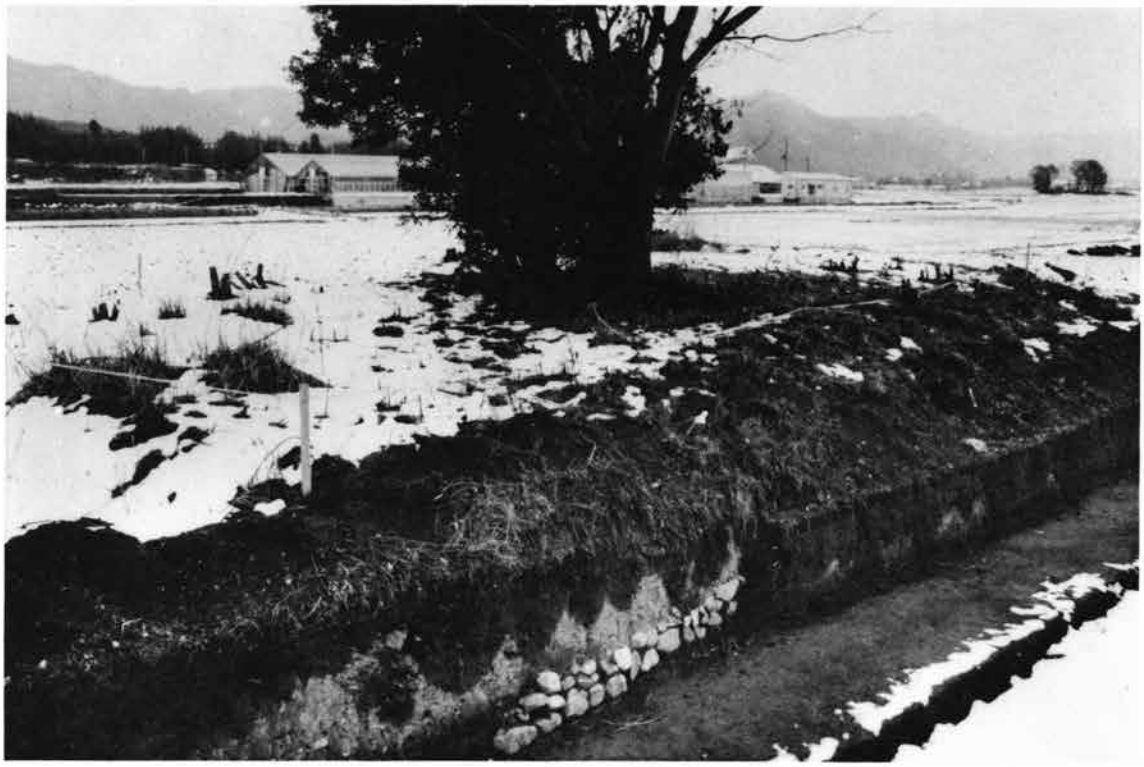
## 図版第3　土師川改修関係遺跡

(1) 調査地遠景（南東から）

(2) 調査地全景航空写真（南西から）

図版第４　　土師川改修関係遺跡

(1)　トレンチ掘削状況（北西から）



(2)　石垣状遺構検出状況（西から）

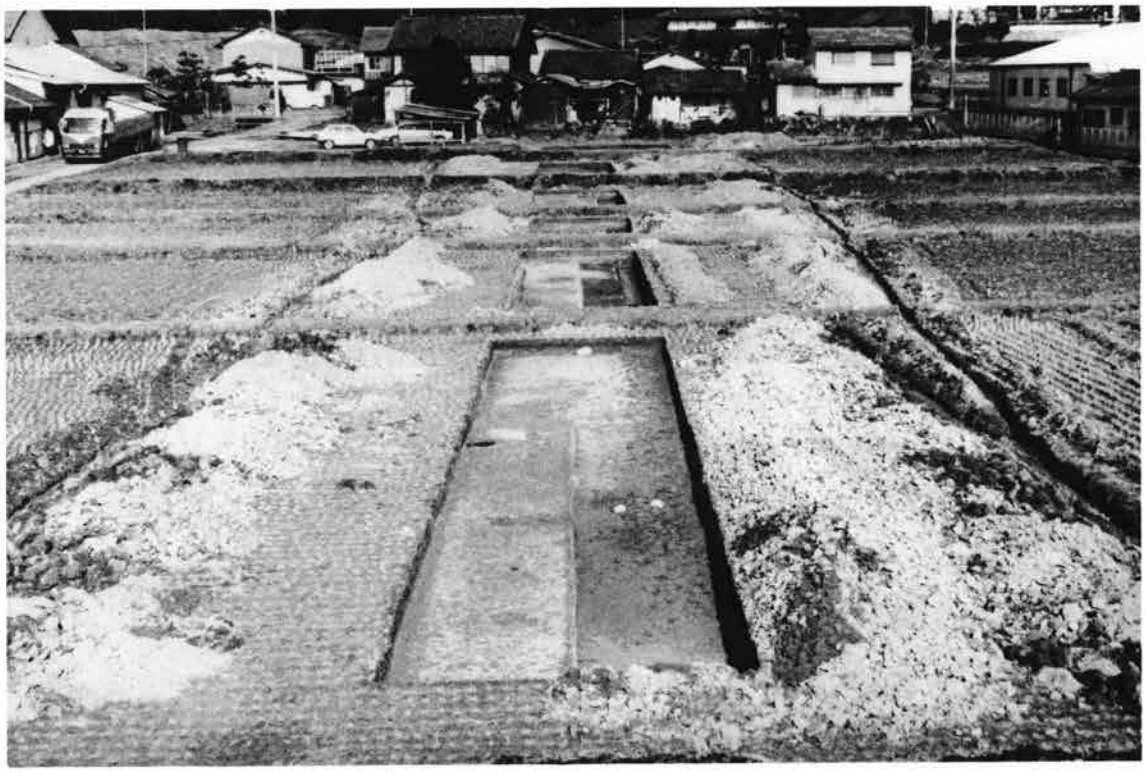
## 図版第５　　土師川改修関係遺跡

(1)　第15トレンチ溝状遺構群（上層）

(2)　第15トレンチ溝状遺構群（下層）

# 図版第6　味 方 遺 跡

(1) 試掘調査状況（北から）



(2) 試掘調査状況（南から）

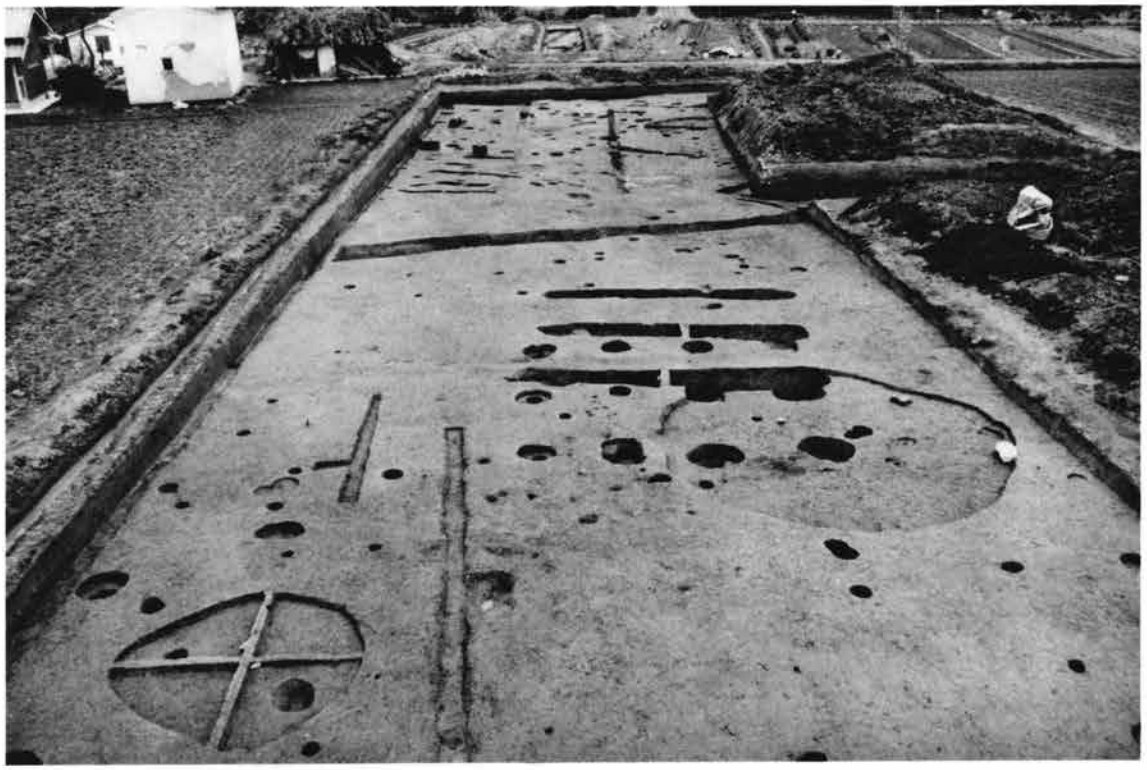
# 図版第7　味 方 遺 跡

(1) 第7トレンチ試掘調査状況（北から）

(2) 第9トレンチ試掘調査状況（北から）

# 図版第8　味 方 遺 跡

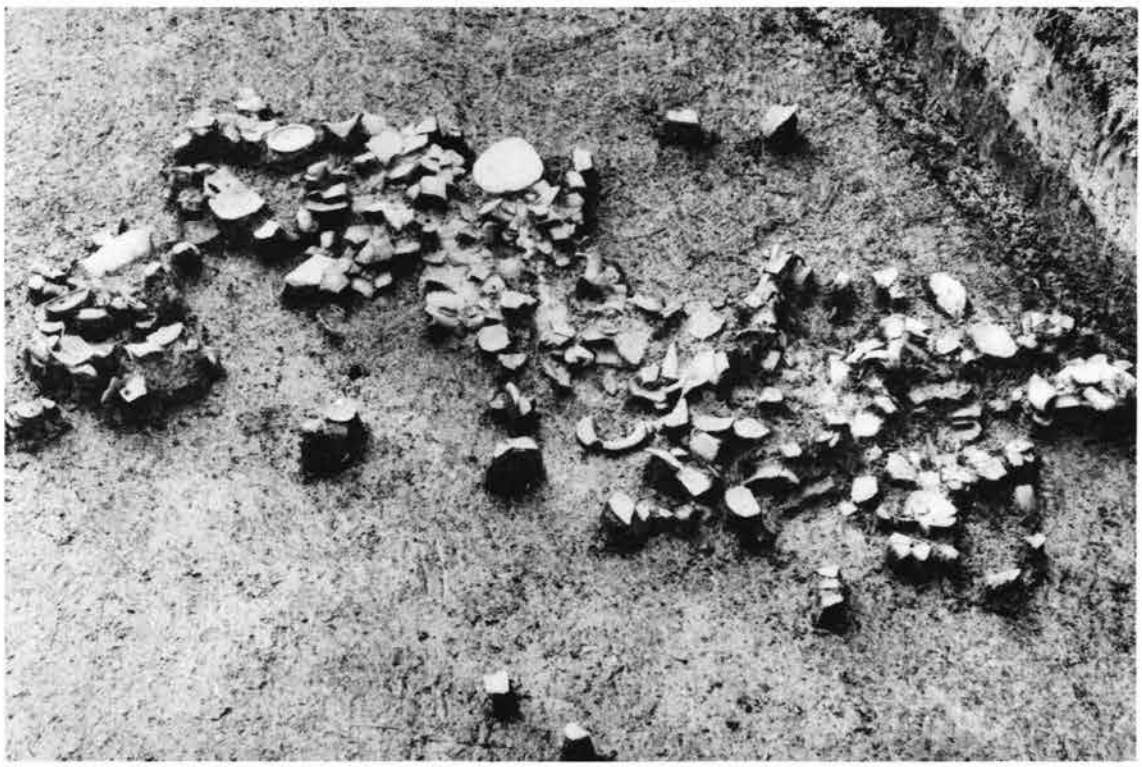
(1)　7・8トレンチ拡張調査後の全景（南から）



(2)　同上　北半部の遺構（北から）

# 図版第9　味 方 遺 跡

(1) 円形竪穴住居ＳＢ01（北から）



(2) 土器溜りＳＸ04（北から）

(1) 調査地全景（東から）

(2) トレンチ掘削状況（西から）

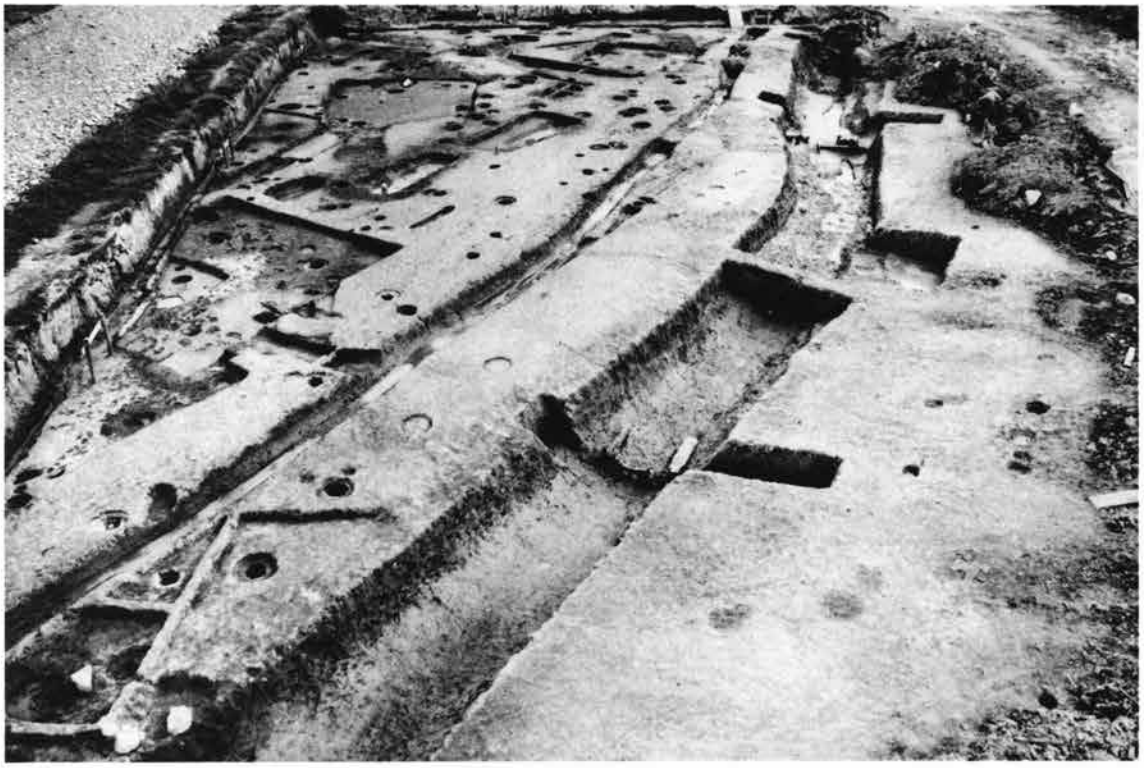
# 図版第11　石本遺跡

(1) 試掘調査状況（南から）

(2) 調査地全景（北から）

# 図版第12　石本遺跡

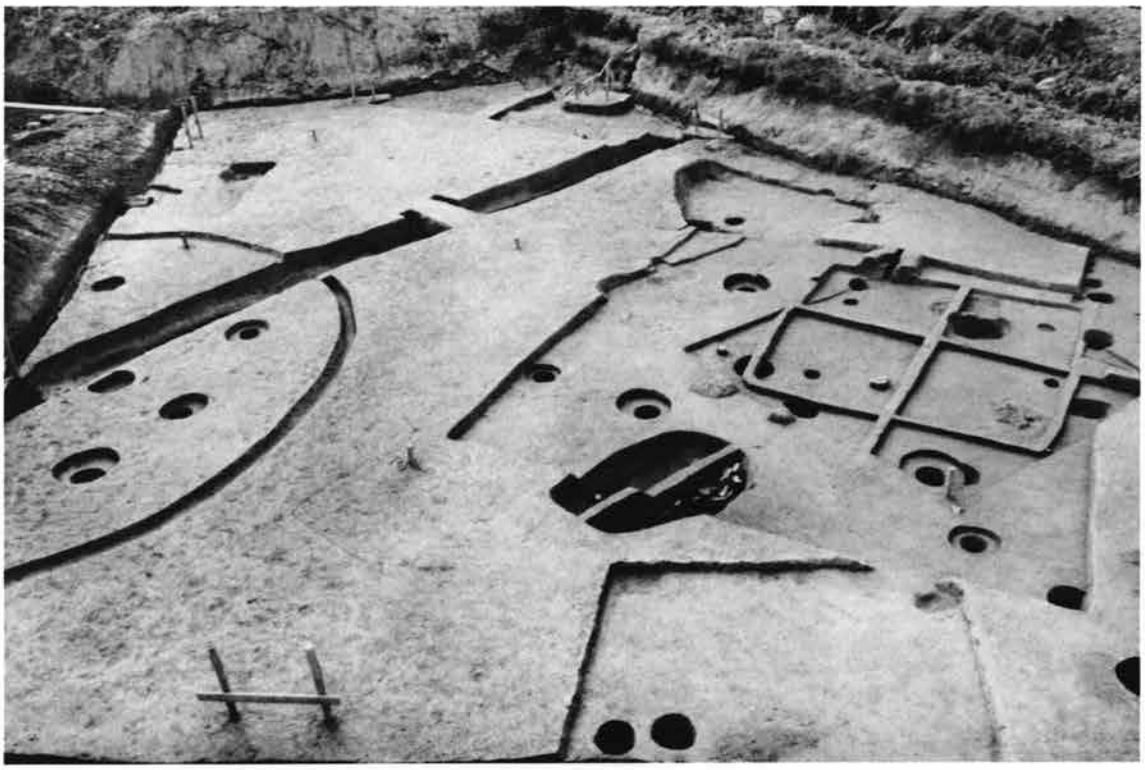
(1)　A地区調査状況（南から）



(2)　A地区　大溝(溝２)検出状況（北から）

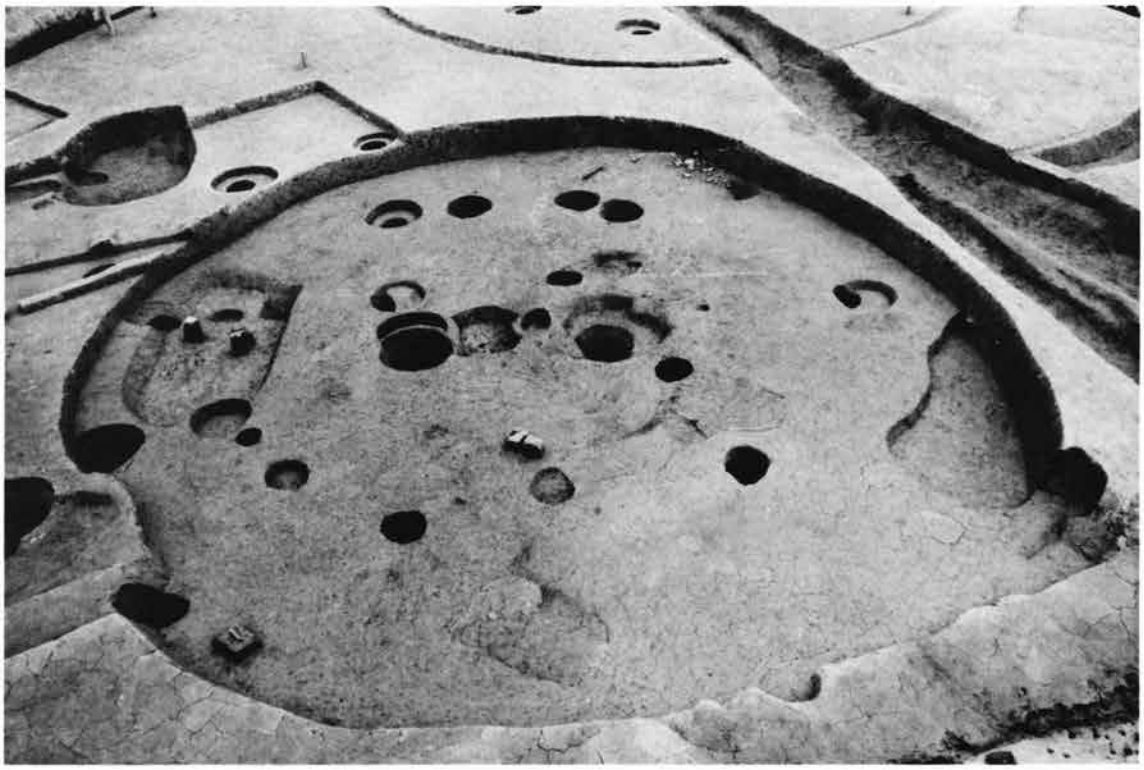
# 図版第13　石本遺跡

(1)　B地区調査状況（北から）



(2)　C地区調査状況（東から）

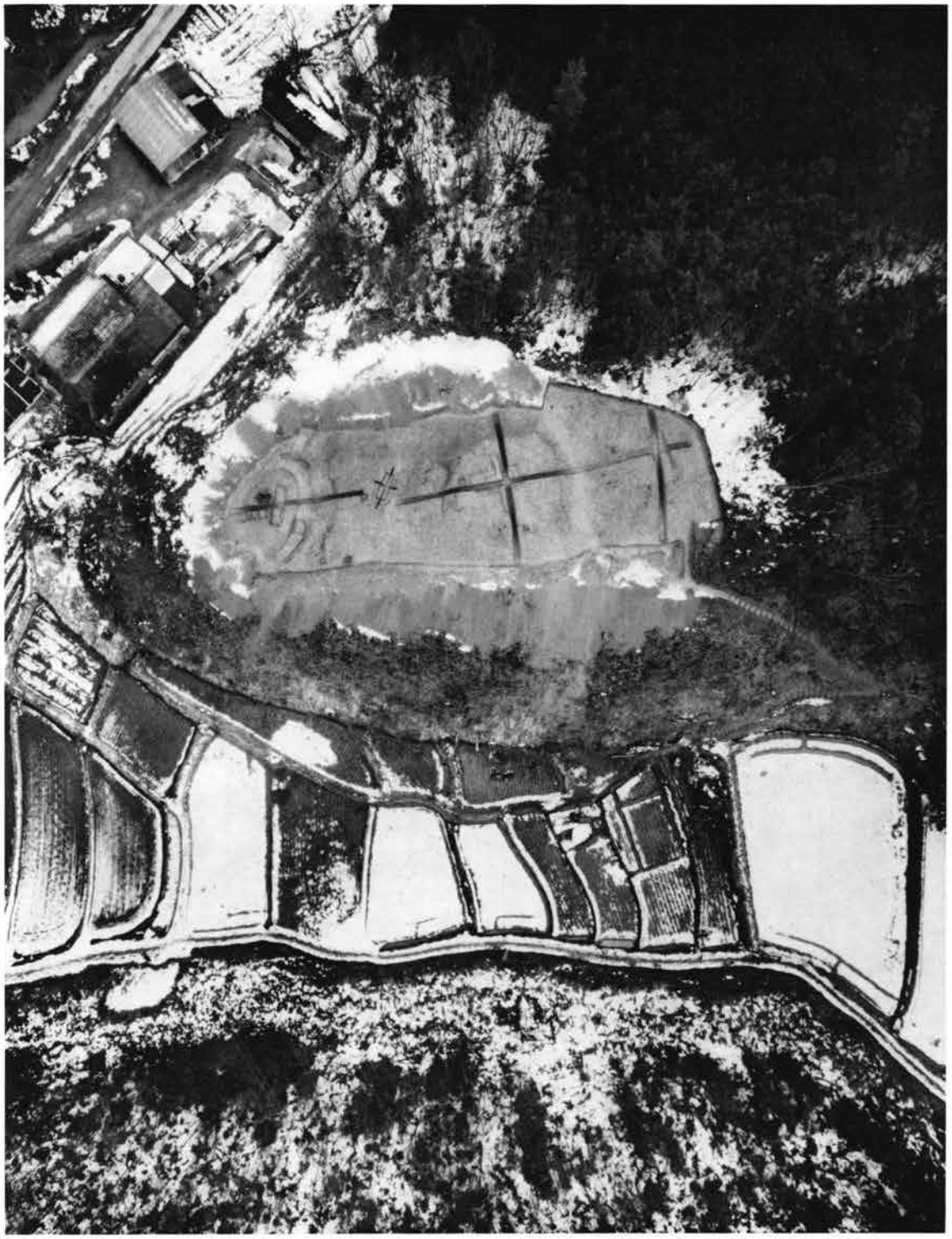
# 図版第14　石本遺跡



(1)　C地区　16号住居跡（北東から）

(2)　A地区　8号住居跡（西から）

図版第15　波 江 古 墳 群



調査地全景（航空写真）

# 図版第16　波 江 古 墳 群

(1) 調査地遠景（西北から）

(2) 調査前全景（東から）

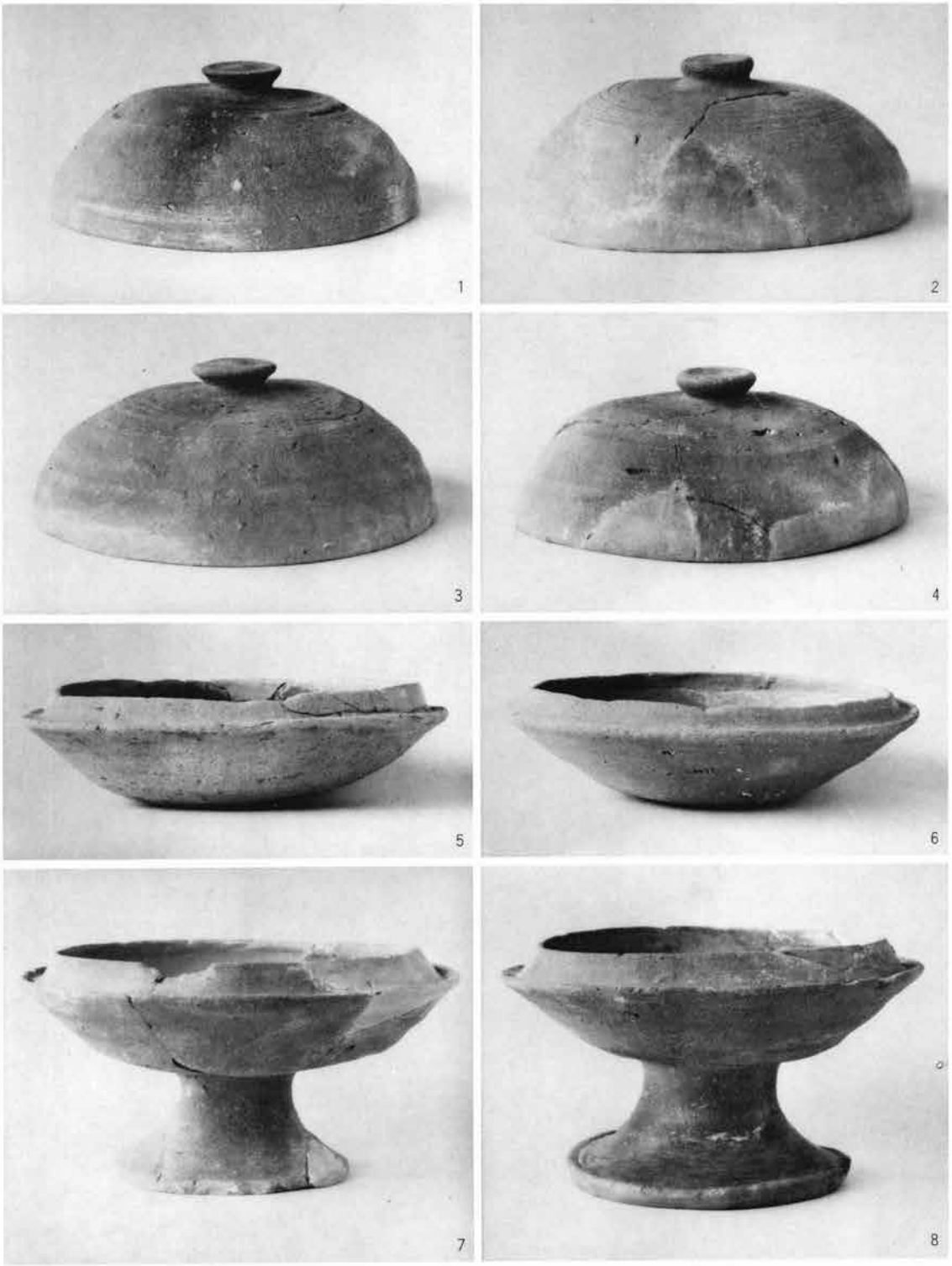
図版第17　波 江 古 墳 群

(1) 波江3号墳・波江4号墳周辺第1主体部（東から）

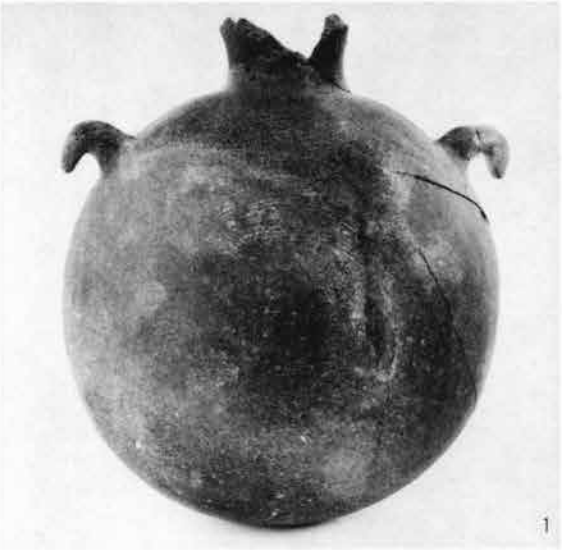
(2) 波江4号墳（東から）

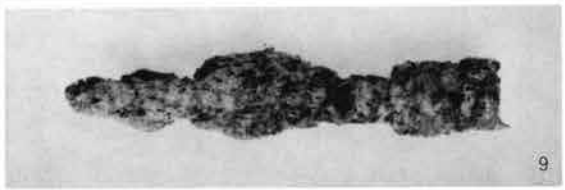
(1) 土坑1遺物出土状況

(2) 蔵骨器検出状況




出土遺物(1)
1～4．有蓋高杯蓋　5.6．杯身　7.8．有蓋高杯

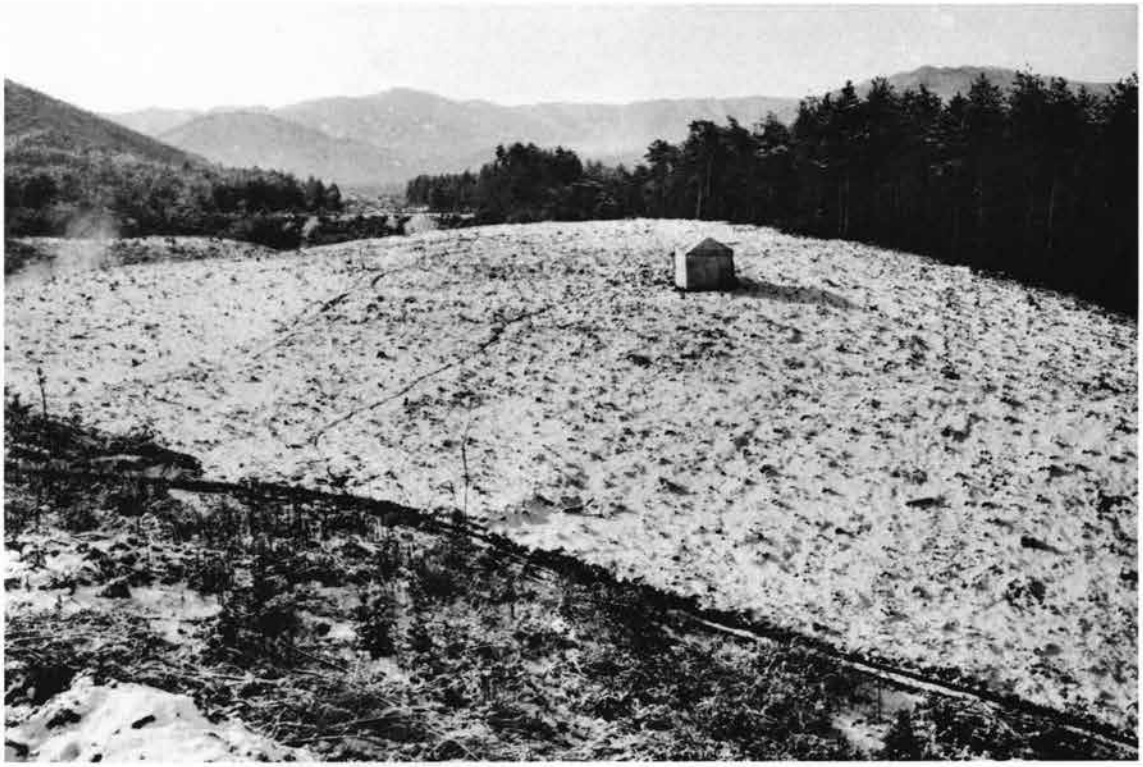





出土遺物(2)

1．提瓶　2．横瓶　3．土師器椀　4．聰　5．片口鉢　6．甕　7．金環　8．刀子　9．鉄鏃

# 図版第21　奥谷西遺跡

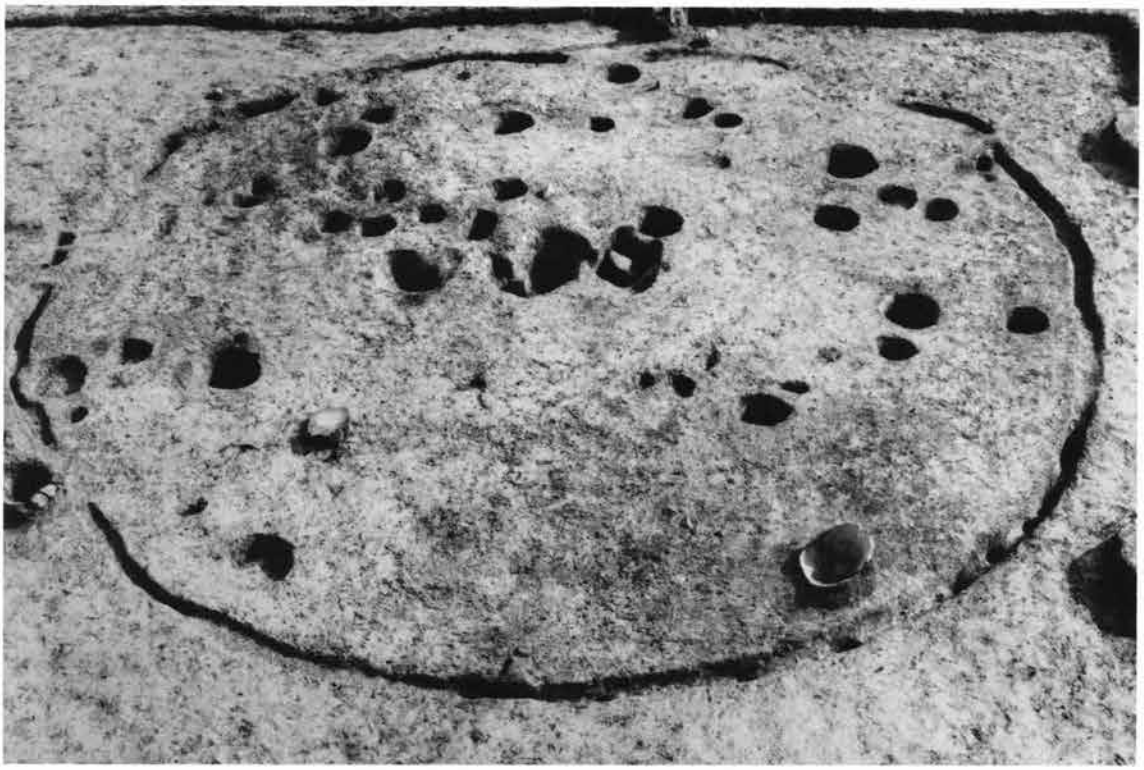


(1) 調査前風景（北から）

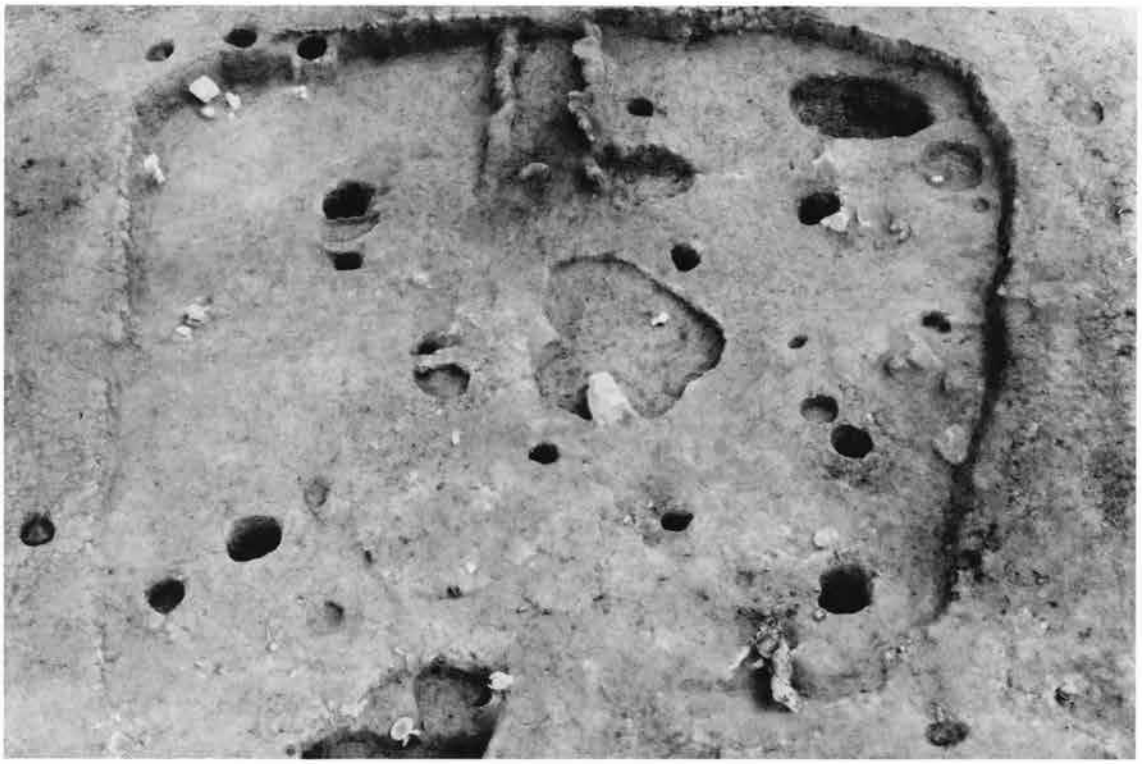
(2) 調査地全景（南から）

(1) 溝SD03完掘状況（東から）

(2) 溝SD03土層断面（東から）



(1) 竪穴住居跡SH393（西から）



(2) 竪穴住居跡SH144（東から）

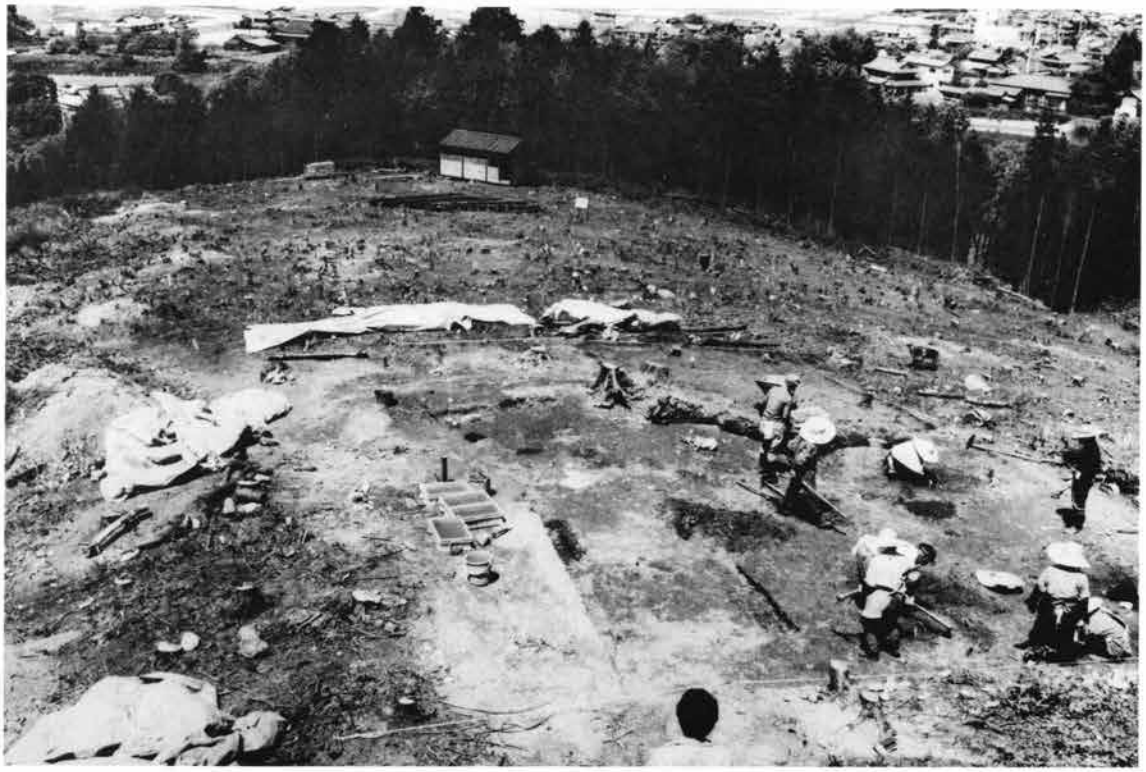
(1) 竪穴住居跡SH144カマド検出状況（南から）

(2) 土坑SK192検出状況（南から）

(1)　土坑 SK192出土遺物

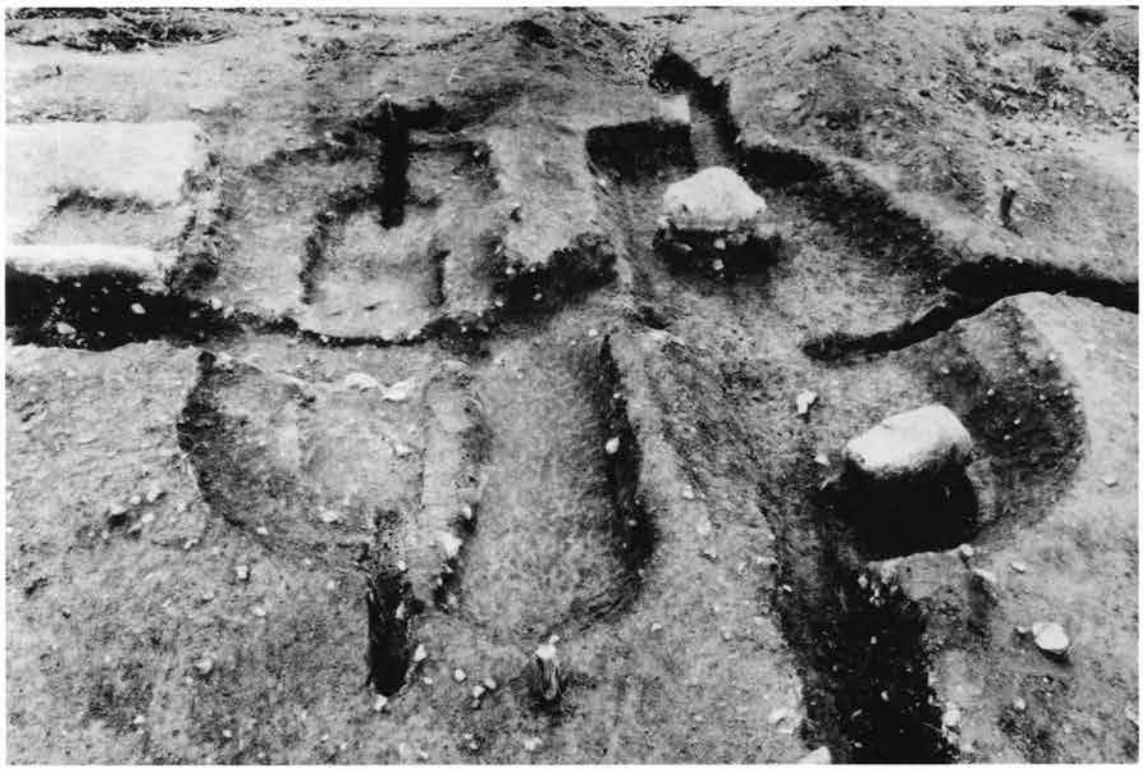
(2)　集石遺構SX06出土遺物

図版第26　薬王寺古墳群



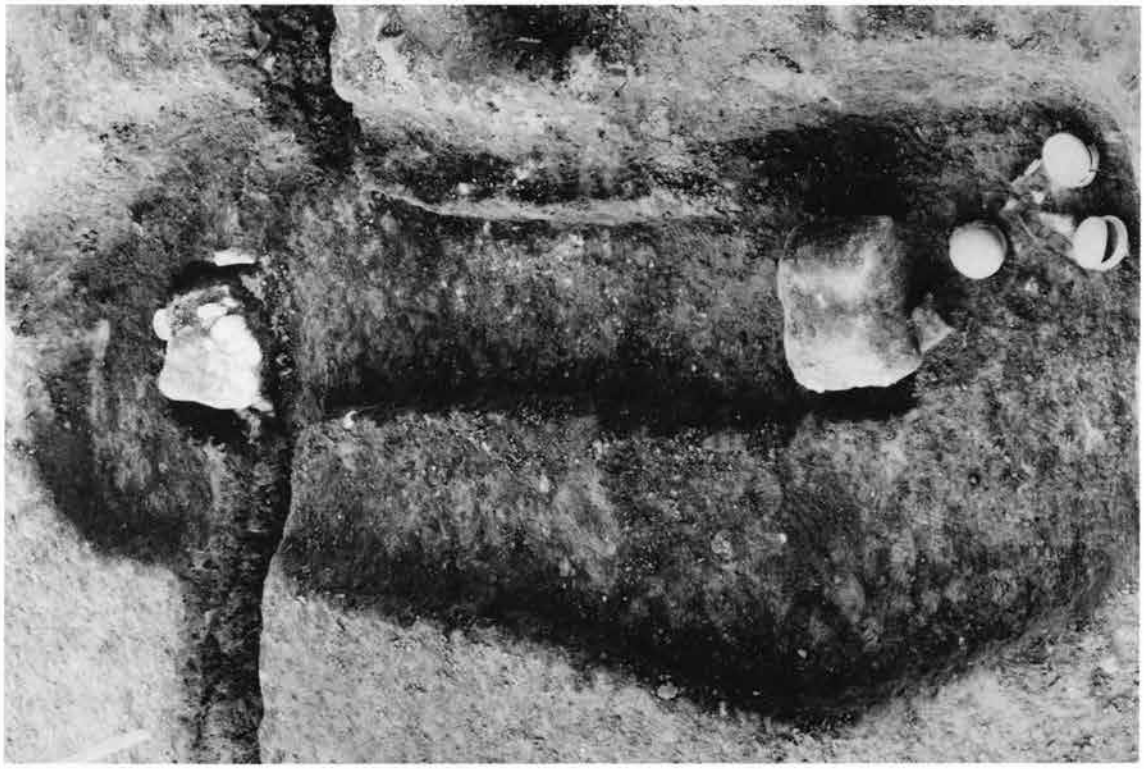
(1) 調査地全景（東から）

(2) 調査地全景（東から）



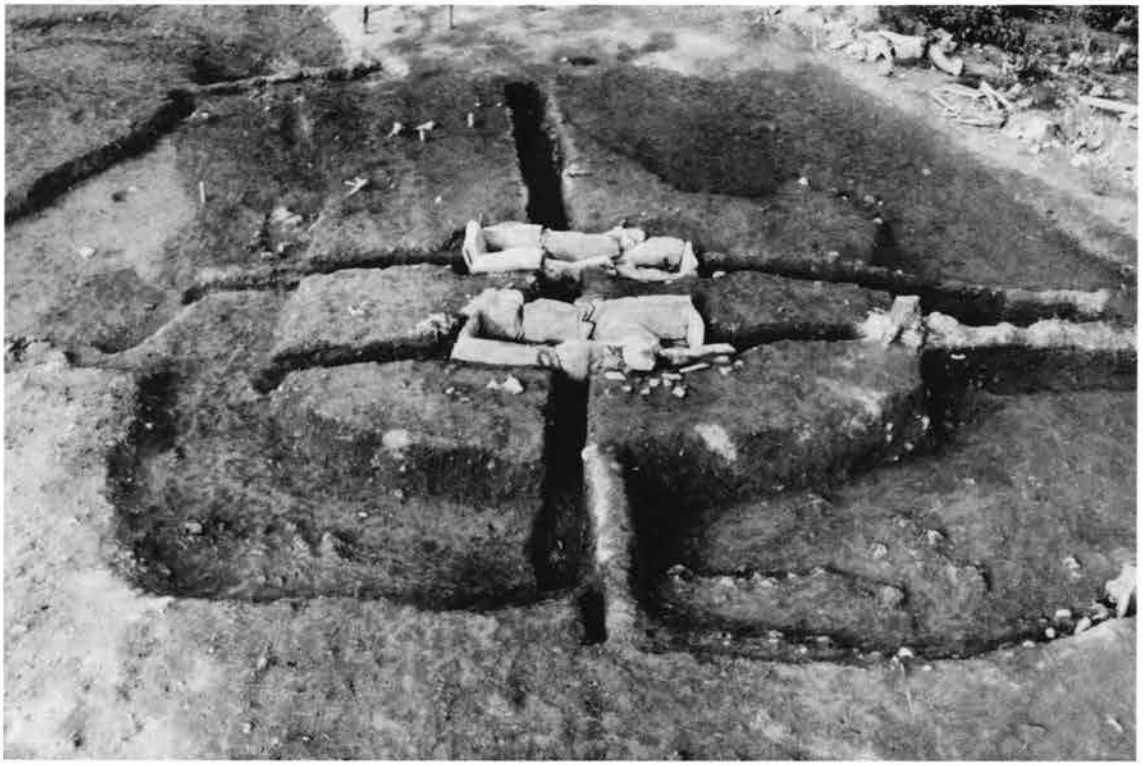
(1)　1号墳主体部全景（北から）

(2)　2号墳主体部全景（南から）



(2)　2号墳第2主体部（南から）

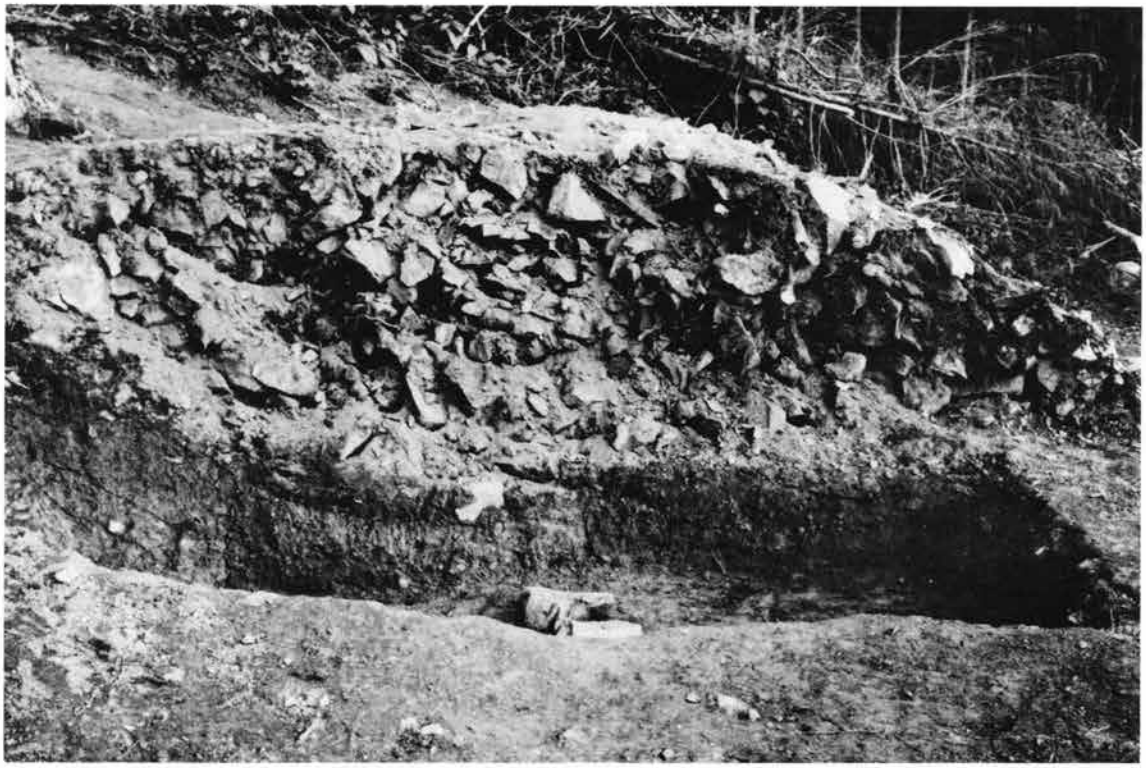
(1)　1号墳第1主体部（南から）



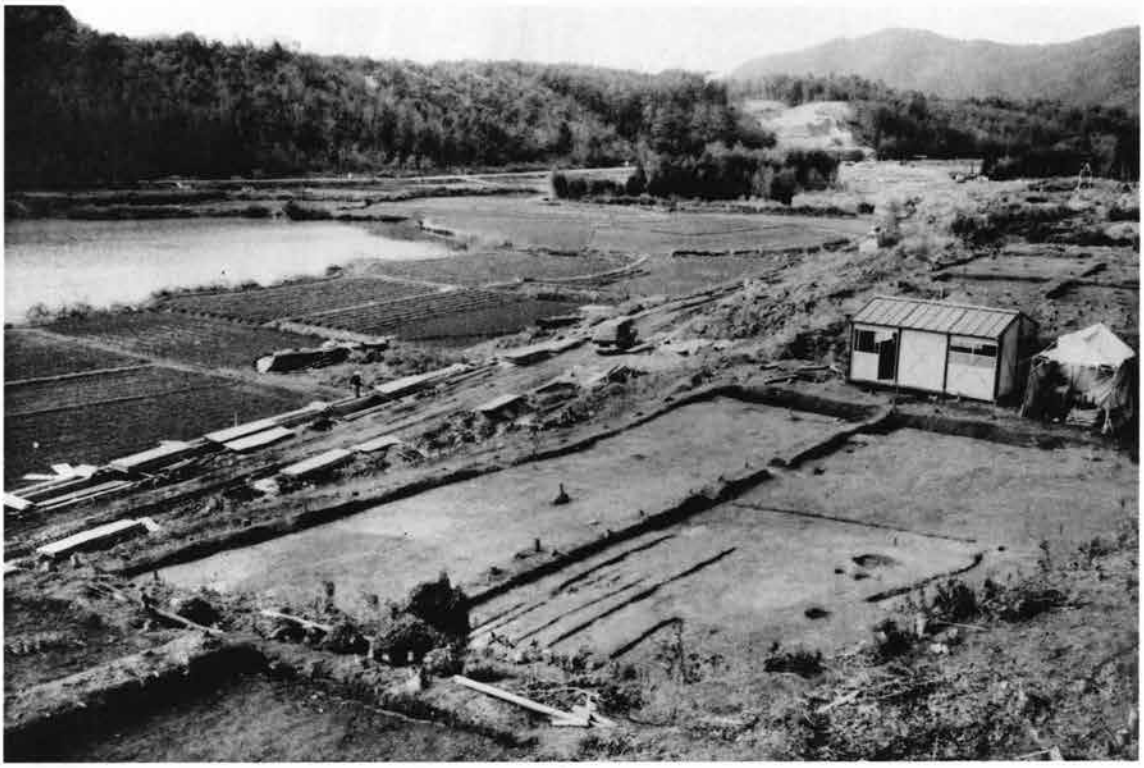
(1)　3号墳主体部全景（東から）

(2)　SX01全景（西から）

## 図版第30　薬王寺古墓・多保市城跡



(1)　薬王寺古墓断面（西から）



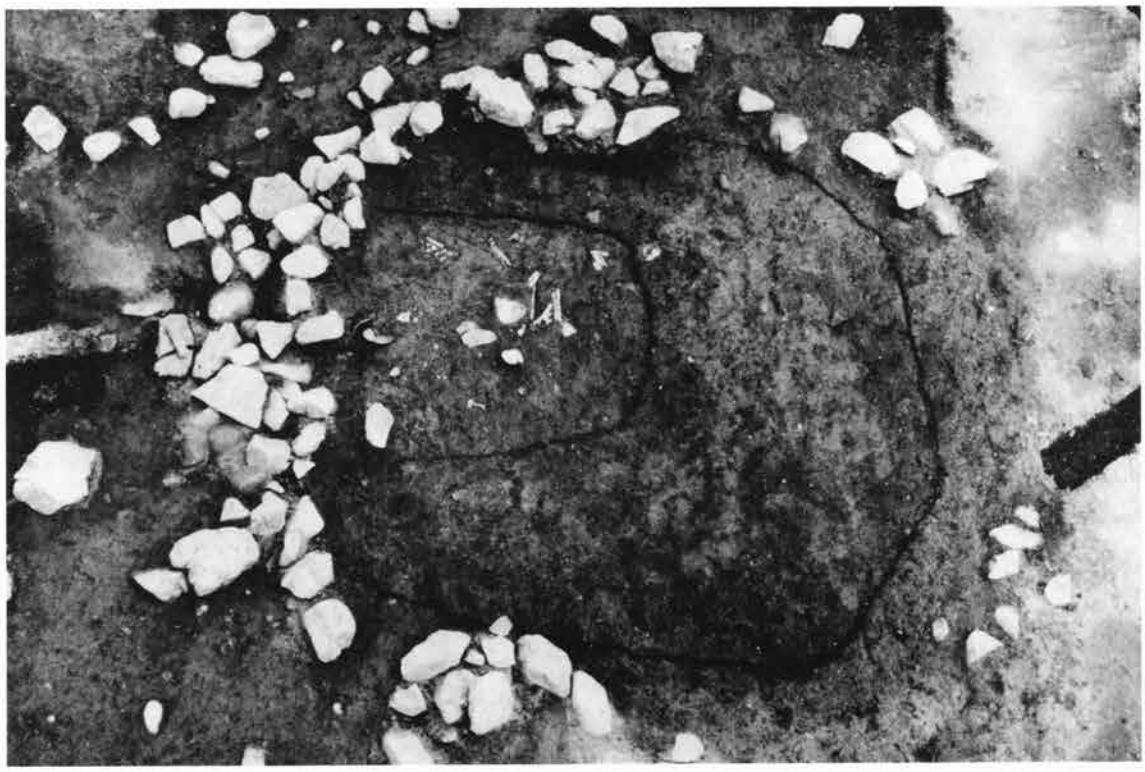
(2)　多保市城跡A地点（南東から）

# 図版第31　多保市城跡

(1)　多保市城跡C地点（北から）

(2)　多保市城跡C地点（西から）

(1) 多保市城跡B地点SX11（北から）



(2) 同SX11下層（西から）

京都府遺跡調査報告書 第13冊

昭和60年3月20日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）